日露戦争史

木間瑞雄

210.18 Ka33 m

A HISTORY

OF

THE EARLY INTERCOURSE

BETWEEN

JAPANESE AND EUROPEANS

BY

KIKUTARO KAN

SUPERVISED BY

INAZO NITOBE, A. m. Ph. D.

WITH ANNOTATIONS BY

SHIGETAKA SHIGA, Nōgakushi.

SHŌKWABŌ.

SANCHOME, HONKOKUCHO, NIHONBASHI-KU,

TOKYO, JAPAN.

2557 (1897).

帝國圖書館藏

国立国会
27. 3. -4
図書館

261143

These Pages

are dedicated

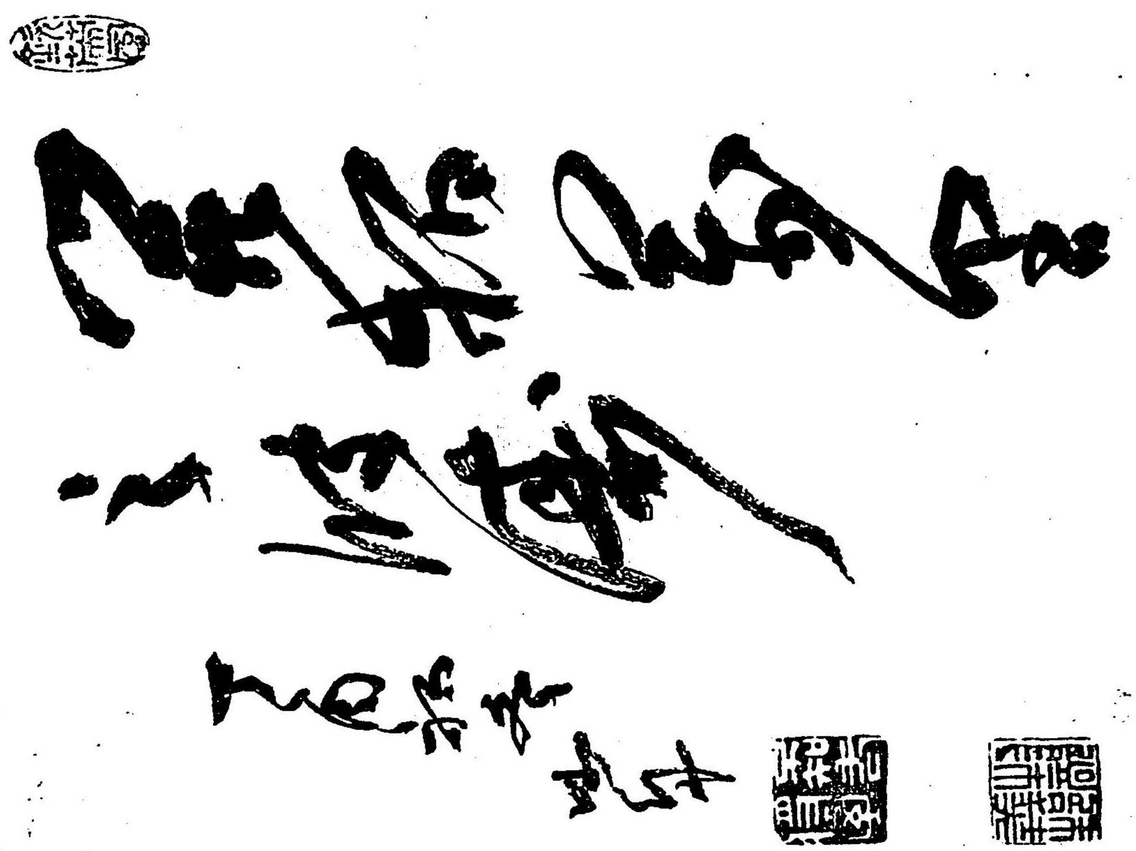
To my dear Mrs. Nitobe,

From The Author,

a book-worm in her library.

此書は新渡戸氏の圖書館によりて成るものなれば。紀念の爲め。親愛なる新渡戸夫人に捧ぐ。

著者



自叙

余好んで古今の史籍を讀み、深く外交の國運に關係する大なるを悟り、苟も事の外交に渉る者あれば、輒ち抄錄して笥に藏む。客歳夏校暇を得、手に任せて次序を正し、反復これを讀むに、復た筐底の蠹腹を肥すに忍びざる者あり。乃ち輯して一小册と爲さんとす。

已にして以爲らく、外交の事重く且大なり。殊に歐人に對する交渉事跡は、方今の時勢にありて、世人の留意注目すること深至ならずんはあらず。而して德川幕府時代に於ける日歐の交通に關しては、撰著の書渺からずと雖、其起源に溯りて、精密の研究を下せるものなく、歐人初來の年月の如きも、曖昧模稜の間に葬られて、未た一定の確說あらざるが如しと。乃ち自ら揣ら

ず、本書撰著の業に從ふことゝなれり。

然れとも日歐交通の起源を究めんと欲せば、余が年來の抄錄のみを以て、材料充分なりとす可からず。更に進んで歐米の史册をも涉獵するの要あり。會ま恩師新渡戸稻造氏嘗て海外に在るの日より、亦茲に意あり、歐米の著書に就きて、之が史料を蒐集する前後二十年、裒然積んで堆を爲す。余乃ち先生に請ふて其圖書館に出入し、旁ら其高敎を仰ぎ、辛うして本書を完成するに至れり。本書もし世道に裨補する所ありとせば、余敢て其德を新渡戸先生に歸するに躊躇せず。

余が本書を撰著するに當り、最も多く參考したるは、ミュンステルベルヒ氏の "Japans Auswärtiger Handel" ビントー氏の Père girnacao" ベイニング氏の "Inglorious Columbus" ヒルドレス氏等の

Japan and the Japanese" なり。故に他の參考書は參證引用を傍註に明記せりと雖も、此四書に係れるは、一切闕畧に從へり。

本書の撰著に關して恩師新渡戸稻造氏は校閲に、同窓の先進志賀重昂氏は批評に、各其勞を煩たれ、其他長田權次郎、岩崎行親、岩谷讓吉、西垣恒矩、森田最中の諸氏、及ひ在種子島前田讓造、柳田龍藏、石堂新藏、森友諒諸氏の熱心なる助力を與へられたること極めて多く、卷中に挿みたる寫眞版の圖は、一々原圖に據りて、和田英作氏の縮摹を煩はせり、茲に特書して謝意を表す。又出版に關して、裳華房主人の厚意を荷へることは、著者の永く記して忘れざる所なり。

終に臨んで一言す。著者の本書を公けにせるは、毫髮も之に藉りて名利を衒はんとする念あるに非らず。唯忠實に歐人初來

の問題を研究せんと欲するのみ。讀者幸に懇篤の批評を吝むこと勿れ。

明治三十年十月金貨制施行の日

於札幌農學校

菅　菊太郎識

帝國圖書館藏

日歐交通起源史

第一論　日本人種は初めより『アーリアン』(歐羅巴人種)の血種を混せざるか

目次

◎日本に於ける人類の發現……一
◎日本固有の人種即ち日本原人種……三
◎日本渡來の人種即ち日本人種……八
○第一　支那より移住せりとの說……一〇
○第二　韃靼民族の落胤なりとの說……一二
○第三　アッカド國より來れりとの說……一三
○第四　シナイ高原巴比倫住民の末族なりとの說……一五
○第五　セミチック人種即ち猶太人種と同族なりとの說……一六
○第六　亞弗利加チュラノ帝國の後となすの說……一六
○第七　馬來方面より來れる馬來人種なりとの說……一七
◎日本人種は南方及び北方より渡來したるものたるに歸着す……一七
○第一　日本人種は北方より來りたるものとなす說の證據……一九

目次

○第二　日本人種は南方より來りたるものとなす既の證據……二〇
◎日本人類は竟に南方及び北方より來りたる『アーリアン』人類なり……二二

第二論　日本國民の文運は何が故に比較的遲滯せしや

◎何故に東亞白皙人種の文運は遲滯せしや……二六
○其第一理由＝日本邊古民人の常職は漁撈を以て最としたるが故なり……二六
○漁族と獵族との文化の遲速
○本邦の邊古には漁撈の民族多し
○本邦の邊古獵事は至て微々たりし者の如し
○其第二理由＝日本國は地理的別離の位置に在り。西海岸良港灣なし……三二
○日本の地理的別離
○亞細亞の文明と日本の種的國勢
○日本の邊古には航海術發達したりしも、西海岸に良港灣を得さるが爲め一に此の非運に至る
○日本の東海岸をして西海岸たらしめさりしを惜む
○第三理由＝亞細亞大陸地固有の文物は死的文物なり……三七
○東洋文物は世界歴史として價値を有せず
○自由の發達と國の位置、地勢及び宗教
○日本は死的文明を享けて遂に文化の進捗を見ず

第三論　日本の西海岸に於ける諸國との交通の梗概

◎史學的理想の日本國……四二
◎神代に於ける朝鮮及び支那との交通……四三
○朝鮮とは親子の國たり。○常世は支那國にあらざるや。
◎神武以降の非正史的交通……四六
○對朝鮮。○對支那本土。
◎推古朝以來の正史的通使……五一
○隋の世。○隋より唐に移りて。○邦人の入宋。○蒙古。○足利氏の衰世。
○織田氏豐臣氏。○德川氏。○王政復古明治聖帝踐祚。

第四論　何故に日本人種は歐羅巴人の來るを俟たず自ら進みて歐羅巴人の門を叩かさりしや

◎扶桑國は墨西哥附近なりとの說……六〇
◎亞米利加の原人は亞細亞殊に日本より至れりとの說……六三
○第一狀況＝地理的連鎖……六六
○第二狀況＝潮流の運動……六七
○第三狀況＝風の方向……六八
◎航海術は疇昔東洋に於て大進步をなしたる事……七一
◎東洋民族中、日本民族は航海術に於て一日の長たらざる可らず……七三
◎日本人は振古果して米國殊に墨西哥に入りしか……七六
◎歐羅巴人も亦振古より米土に入るべきの關係を有せり……八四
◎閣龍以前スカンヂナビア人、先つ米土に入る……八五
◎他の歐羅巴人も亦、古より米土に入りたり……八八
◎日本と歐羅巴人との米土に於ける偶然の邂逅及往來……九〇
◎日本人と歐羅巴人との米土に於ける交通中絕せしは何故ぞ……九二

第五論　歐羅巴人が亞細亞の地を蹈み殊に支那帝國に入りたるの旦あれば日本人が世界の耳目

に照會せらるゝの夕あるべし
◎亞細亞洲の各國相國するや連甍隔壁の一鄕の如し隨て一國の事は他國も亦預り知るべきの關係あり……九五
◎歐羅巴人が亞細亞に踏入り東洋の記錄を留めたるの始め＝其挫折……九六
◎歐羅巴人が自動的東洋交通を始めしは其自己の邦國建設完備の日、十四世紀前後に於てせり……九九
◎マーコ、ポロ果して此時を以て支那に入る＝日本を全歐に照會す……一〇〇
◎マーコ、ポロがジーパングー島の記事抄譯……一〇三
◎ジーパングーの語解及ひ、そは日本を指すものなりとの辨……一〇七
◎ジーパングーは日本に非らずと云ふジョージ、コリングリッヂ氏の立說……一一〇
◎ジョージ、コリングリッヂ氏の立說に對する著者の反駁……一一七
○地圖上の論點。○里程上の論點。○元寇の論點。○風習上の論點。○駁論結案
◎マーコ、ポロの人となり、及び其支那に入りたる前後の閱歷……一二四

◎マーコ、ポロの東洋紀行が印刷となりて全歐に傳播したる次第……一三二
◎マーコ、ポロの紀行は初來の歐羅巴人を導ける一大伏線なり……一三六

第六論　近世史の始めに於ける歐洲人文の開展、殊に航海術の萠發は、歐人をして東洋發見の途に上らしめたり

◎歐洲航海術萠發の一新時元……一四〇
◎萠發以前に於ける航海術の狀態及び萠發の當時……一四二
◎歐羅巴人中東洋亞細亞近海に航路を開きたる先鞭者＝ペスコ、ダ、ガマ氏……一四六
〔附〕　ハスコ、ダ、カマ氏の小傳……一四九
◎ガマの新航路に發程したる葡萄人及び其動靜……一五〇
◎葡萄牙人が支那近海に出現したるの始め及び交通の次第……一五二
◎葡萄牙人の居留地ありたりと云ふ支那リアンポー位置考……一五七
◎澳州が葡萄牙人の手裏に歸したる次第……一六〇

第七論　初めて大日本帝國を發見したる歐羅巴人は誰ぞ

◎航海術萠發以前に於て歐羅巴人は日本國に來りしや……一六二
◎ガマ以後の正史的初來の歐羅巴人に關する諸種の史說……一六八
〔附〕　初來の歐羅巴人に關する諸說綜合一覽表……一六八
○天文十年說の出所及び由來……一七三
○天文十年說に對する著者の見解一……一七六
○天文十一年說の出所及び由來……一七八
○天文十一年說に對する著者の見解一……一八一
○天文十二年說の出所及び由來……一八三
○天文十二年說に對する著者の見解一……一八六
○天文十四年說の出所及び由來……一八七

第八論　自ら日本の發見者なりと稱する初來の歐人メンデンズ、ピントーの閲歷及び其紀行

◎ピントーが東洋に來るまでの閲歷……一九三
◎傳敎師としてのピントーが東洋に於ける所行……一九六
◎ピントーが日本に來る前四ケ月間の閲歷紀行抄譯……二〇一
◎ピントー等が種子島に漂着す紀行抄譯……二〇六
◎ピントー召されて豐後王に謁す＝謁見後の一珍事……二一六
◎ピントー王子の一命を救ひ種子島に廻航し再び種子島を出航す……二三〇
〔附論〕ピントーに關する評論……二三四
◎ピントーの東洋紀行が世に傳播したる次第……二三四
◎ピントーの紀事……二三五
◎ピントーの評論に對する著者の評論……二三八
◎ピントーの紀行中、日本來航事歷は信據するに足るか……二三九

第九論　初來の歐人說の歸着竟に奈何

◎既往に於ける初來歐人說者の偏見……二四一

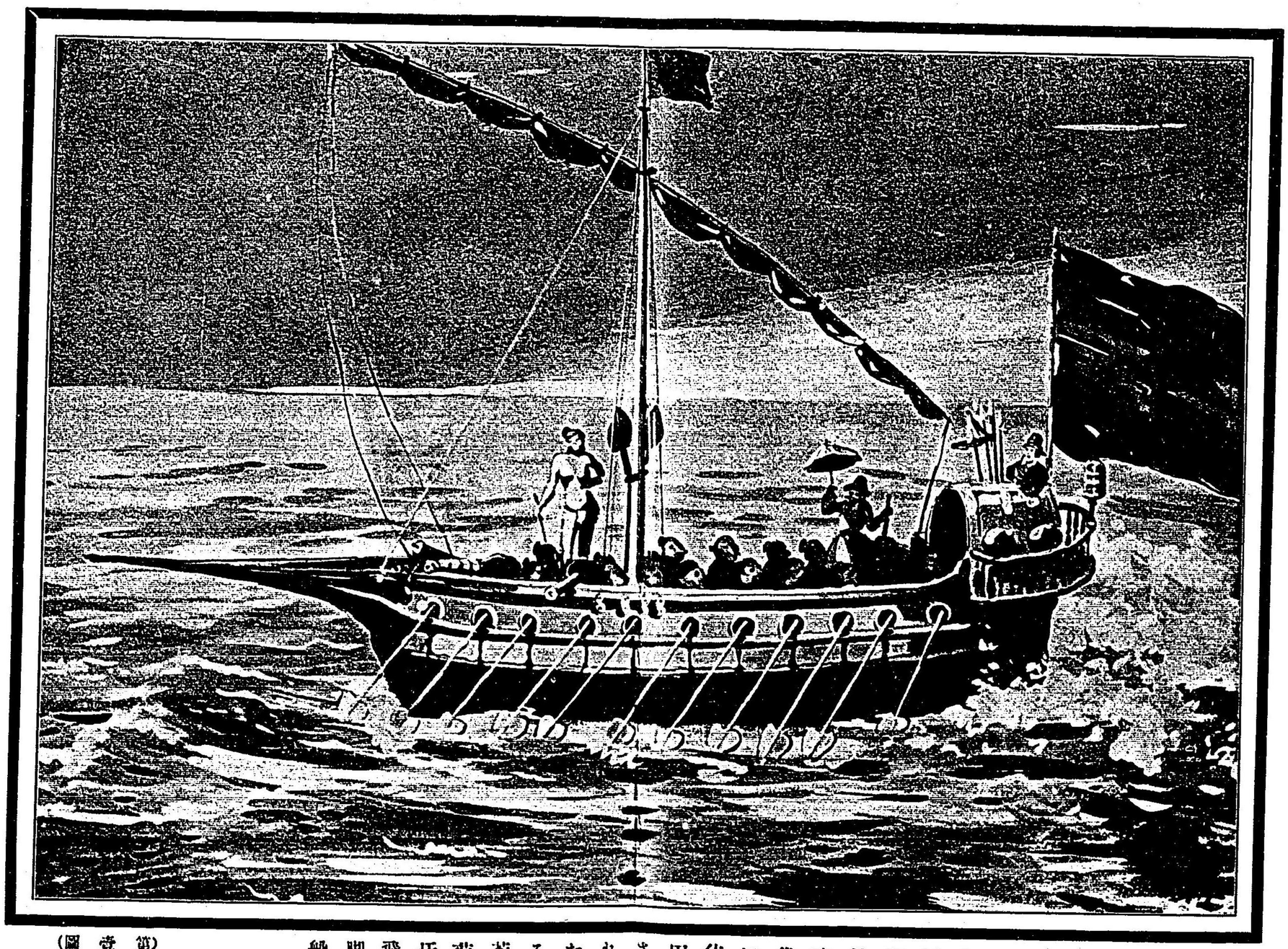
◎日本の發見者は葡萄牙人なるべし……二四三
◎日本の發見と其年代(西暦一五四二、＝一五四三年)……二四四
◎初來の歐羅巴人即ち日本の發見者が到着したる地點……二四七
◎初來の歐羅巴人と其抜錨地點……二五〇
◎初來の歐羅巴人と船隻人名又び人員等……二五一
◎初來の歐羅巴人說の歸着綜叙……二六四
〔附論〕種子島及び種子島時堯
◎種子島の地理及び歷史……二六六
◎舊種子島領主從五位下左近衞將監平時堯の家祖及び其性行……二六七
〔附〕種子島家略譜……二七〇

第十論　初來の歐人即ち日本の發見者が日本の社會に及ぼしたる影響及び其以降の成行一斑

◎初來の歐羅巴人と鐵砲の傳來……二七五

◎初來の歐羅巴人と耶蘇敎の傳來……二八四
〔附〕初來耶蘇宗則ち『ゼヂユイツト』派の眞相……二八七
〔附〕日本耶蘇宣敎師の權輿フランシス、ザビールの來歷及び性行……二九一
◎初來の歐羅巴人以降に於ける歐羅巴人來航の成行……二九三
◎當初來の歐羅巴人に對する日本人の動靜……二九七
結論……三〇八

日歐交通起源史目次了



日本國發見時代に使用されたる葡萄牙飛脚船　（第壹圖）

日歐交通起源史『歐羅巴人の初來』

新渡戸稻造校閲
賀重昂批評
菅菊太郎著述

第一論　日本人種は初めより『アーリアン』(歐羅巴人種)の血種を混せざるか

地理學的日本と人種學的日本

本書題して『歐羅巴人の初來』と云ふ、其言也既に頗る漠たり、初來とは、著者の意、地理學的日本への初來に在る乎、人種學的日本への初來に在る乎、請ふ豫め之を說述し置かん。

凡そ地理學的日本とは是れ造物主が天地を創造し賜ひ、地は虛曠にして淵面は晦冥なる時、早くも神靈水面に覆育し、天下の水一區に滙り、大球上に乾土現はれ、茲に

初めて今日の國土を見るに至りたるより以還を云ひ、人種學的日本とは地理學的日本の境域に於ける人種學的日本の住民、即ち日本國民が現出して一躰となり、某種の制度の下に綜合せられたる時より以還を云ふものたるべし、而して著者の意は二個日本の間に敢て隔壁を築くをなさず、隨て人種學的日本が今を去る事僅に三百五十年前に、歐羅巴人を初めて引き入れたるにも拘はらず、地理學的日本は開闢の古に於て既に之を引き入れ、以て人種學的日本を形成せしめたるに非らざるか、著者は先づ此事實より本論を說き起さゞるべからず、斯くの如くして日本人種の起源を論究するは「歐羅巴人の初來」を理想的に解するに於て正に避くべからざる順序となれり、蓋し所謂日本人種の起源とは地理學的日本に於ける人類の發現にして、日本人種果して「白皙人種」歐羅巴人種ならば「歐羅巴人の初來」は宜しく此に在りと謂はざるべからざればなり。

日本に於ける人類の發現〔1〕

日本の地盤は既に地球の上々紀に於て成り、始原紀に於て滄海面に島嶼として露出し、太古紀に至るも雖地熱は甚だしく減却せず、陽光微かに烏羽玉の闇を照すに止り、生物未だ蕃殖せず、中古紀に至りて火山變動と共に日本諸島は地盤大に隆起し、一回は亞細亞大陸と綿亘せしも、後近古紀に及んで陸地の一部陷落して、朝鮮と一葦帶水を劃斷するに至れり。

後近古紀は尤も記憶すべき一時元にして、一般人類なるものは此時に發現せり、然れ共此時元に於ける一大恐慌は地温急下「グレシアル、エーヂ」(氷結時代)の悲境に陷りしことなり、地球上の生物忽ち活路を失ひ、西比利亞地方に栖息せし象、北米の野牛に類するもの等は、朝鮮半島より陸路を徒歩にて、相前後して日本に移住せしことあり、日本人種の祖先も或は此等の動物と仝道せしものなるべし、當時の日本人(後の所謂日本の原人)は固より野蠻不文の族なるを以て、其歷史を傳へざれ共、學者の說く所によれば多く阿留泰人種なるものなるべしと云ふ。

註〔1〕此說は全く理學博士小藤文次郎氏が往年大學通俗講談會に於て演述せられたる「日本の蓋世界」より拔萃したるものなり(東洋學藝雜誌四、七三號)

(一)「コロボックル」人種　日本の太古「コロボックル」なる矮小人種棲息し、全國に散日本固有の人種即ち日本原人種

在したりとは坪井正五郎氏が始めて主張したる所なり、氏は夙に現今我日本國の各地に遺存せる竪穴横穴、及矢ノ根、石斧等の豐富なる材料に審査する所あり、其の博學淵識を以て十餘年來この説を主張せり、然れ共坪井氏の斯説は、餘り奇怪に失するが爲め、世の論難攻擊[1]を避くる能はず、今日人類學者間の一問題となれるもの〻如し。

「コロポックル」とはチョンベチュラー氏(john Batchelor)の説く所に隨へば、「チョロポ、ウンクル」にして其意「此臺(卓子)の下の人」と云ふにありと、通俗にはコロポク(アイヌ語蕗の義)クン(仝下)クル(人)乃ち「蕗の下の人」なりと云ふの義とするもの〻如し、此義に由て觀るも其躰軀の矮小なる一民族にてありしことは疑ふべからず、故に著者は思ふに是れ畢竟本朝の古書に散見する所の土蜘蛛なるものにあらざるなきを得んやと、然らば、獨り其名目の奇怪なるのみにして、事實は一も奇怪とするに足らず、其説固より重きを置くに足らず。

土蜘蛛とは蓋し假字にて土隱(ツチグモリ)の義なりとは黒川眞頼氏[2]が説く所なり、其の説に曰く、身短、手足長、侏儒と相類し、上古より日本全國に居住せり云々、舊史を按ずるに天津彦火瓊々杵尊の日向に[3]天降られしとき、天暗冥奈何ともする克はざりしを、土蜘蛛の奏により、再び日月照光と云ひ、亦後神武天皇は大和の土蜘蛛の皇化に歸せざるものを討滅し、崇神天皇の四十八年に建借間命(タケカシマノミコト)は穴居の賊類を討平し、又建諸組は皇化に服せざる西國の土蜘蛛を討伐し、景行天皇の十二年に、天皇自ら西國の賊及不服の土蜘蛛を征する等、舊史に其の存在を傳ふるや明かなり、然れ共若し「コロポックル」にして果して土蜘蛛にあらずとせば、他に舊史に於て類似の記事を索めざるべからず、然るに其記事なし、故に「コロポックル」を以て數万年の古に棲居して、早く滅族したりとせばイザ知らず、佐藤傳藏氏の如き、最近の報告[4]に於て、此民族の最盛時代は三千年以前なるべしと明辯するを以て觀れば、舊史に明徴なかる可からず、故に土蜘蛛は「コロポックル」と異名仝物なりと斷定するを得ん。

註〔1〕史海廿一號仝廿二號等に於て神風山人等の攻擊あり又國事新論八號に於て森鷗外氏の駁論あり

〔2〕黒川氏の此説は穴居の民として史學雜誌四卷六七に見ゆ

〔3〕日向高千穂の高は山の極めて高きにて千穂は既に土蜘蛛の義と(古史通)

〔4〕史學雜誌七編第六號

（二）「アイヌ」人種　「アイヌ」は舊記の蝦夷にして、天降人種の以前に於て「コロポックル」と全じく、日本全洲に散在したるものなりしや論を俟たず、此事實は今日の地名が全く「アイヌ」より轉訛し來りたるものと云ふによりて明認するを得べし、今「アイヌ」學者の二三地名に對する解釋を載す。

地名	ジョン、バチェラー氏の解釋[1]	永田方正氏の解釋
大和	「ヤムマカト」栗林の意（但し此國に栗あり白野夏雲氏の說）	「ヤマントー」にて冷水の沼國（此頗の意
能登	頗又は岬の意味	國ノー郡（瀧郡）にヤの瀧あり）
若狹	「水が出る所」と云ふ意	同
阿波	海に棲む鳥の名「しそ」	「アハ」と云ふ植物の名「はな」
江戸		

「アイヌ」人種は現今我北海道滿州、樺太、西比利亞地方に棲息する民族にして、其本源は這邊の大陸地にあるものゝ如く、其日本に渡來したるはバチェラー氏は滿州よりせりと云ひ、久米氏[2]も亦北方より樺太黑龍江の海峽を渡り來りたる種族にして肅愼の徒民なりと論ぜり、然らば前節小藤博士の所論にも見へたる如く、振古彼我地續きの時に移住し來りたるか、又は日本海の氷結時代に於て渡來したるか、只讀者の想像に任ぜんのみ、漢土禹貢の書に見ゆる所の四海のこと、自ら中に東夷即ち我日本に於て支那本來の人種と異なれる人種あり、韓土の烏夷、山東省の萊夷、淮水の淮夷、皆全一人種なりと見做したるは、當時の「アイヌ」人種にはあらざるか。之を要するに日本固有の原人としては「コロポックル」及「アイヌ」の二人種を以て論ぜざるべからず、柏木氏が北方人種即ち日本固有人種となすものは、想ふに斯二人種を指したるものなるべし、然れ共森三溪氏[3]は日本の原人には前後四種ありと云へり、乃ち北方より來れる「コロポックル」及「アイヌ」、南方より來れる土蜘蛛及び熊襲と、熊襲を以て原人となす、其說の可否未だ斷す可からず、暫らく記して後說を俟つ。

註〔1〕地名口碑等より「アイヌ」が日本全國に擴息したりとの說は東洋人類學會雜誌七二號バチェラー氏の論文及一八八七年出版チャンベレン氏 Aino Studies 參照

〔2〕史海十八卷日高見國論に明かなり然れども久米氏の說に反對して「アイヌ」の祖先は南に在りとせる吉田落後生の論文は、史海廿號に出でたり

〔3〕史海二十號「天降以前の原人」を見よ

日本渡來の人種即ち日本人種

日本の原人種は果して阿爾泰人種なるや否やは別問題として、今日の我々日本人が原人種の後裔なりとは何人も信ぜざる所なるべく、偶々グリフィス氏(Griffis)ありて、日本人は「アイヌ」の後胤なりと呼びたりと雖も、其意蓋し多少の血種を混ずると云ふに過ぎざるべし、凡て先輩の說く所を以てするも、日本國に於ける人種は獨り原人種に止まらざるものゝ如し。

ベルツ氏(2)　田口卯吉氏(3)　柏木貨一氏(3)　ラザム博士(最新)

日本人 ┬ 一、「アイヌ」人種　一、蝦夷人種　一、日本固有人種(コロボクル、アイヌ)　一、日本土着人種
　　├ 二、琉球人種　二、天降人種　二、南方人種　二、白皙人種
　　└ 三、日本人種(出雲人種)　三、外國人種

斯の如く或は日本人種と云ひ、南方人種と云ひ、天降人種などゝ云ひ、其稱呼は一ならざれども、皆日本原人以外に現日本人の祖先あることを述ぶるは、即ち一揆にして、我が古史に高尙俊邁なる靈族が、上世他方より日本國に下り立たゝせ賜へりと云ふにても知らるべきなり。

シーボルド(Siebold)は特に九州の民人に於て其美貌白皙人種に近しとなし、其婦人が日天に爆さるゝを嫌忌するは依然白皙人種の餘風の存する所となし、チユンベルヒ氏(Thunberg)も亦名門貴族の公達が、隆準白色、美目皓齒なるは全く白皙人種の觀を脫せざるものとなすと雖、他の學者、例せば獨のライン(Rein)の如きは、蒙古人種を狹義に解釋して、日本人は蒙古人種にして、毫來も馬來人種の元素なきものとなし、人類學者ペッセル(Peschel)及プリチアード(Prichard)等も、日本人と朝鮮人とは全種族に屬して、蒙古人種の一部分たることを主張したり、然れ共日本人を以て蒙古人種に例するは世の批判を免れざる所にして、始め人類學者アガシズが、人類九分類中の一なる蒙古人種中に日本人を例としたるを不可なりと論ずるもの多きを以て知るべし。

日本人種なる問題は蓋し今日世界人種學者間の一大難問にして人類の部族を定むるに唯一の標準なる比較言語學は、東洋に於て未だ十分に發達せず、是を以て某學者は日本人種に斷案を下すの時機到來せずとなせり、亦一理ありと云ふべし、故に諸先輩の說も一々信據するに足らずと雖も、且らく之を羅列し、日本人種論の歸着する所を概察せんと欲す。

註〔1〕Mikado,s Empire

〔2〕Die Koerperlichen Eigen Schaften Ser Japaner··及Nature und Voelkorkunde Osto Asiens XXXII.S.334.

〔3〕共ニ史海十四號及十七號ニ在リ

〔4〕Reins japan P.383.-396.(但シ英譯)

〔5〕Peschel Volkro. Kunde.P.376

(第一)支那より移住せりとの說(蒙古利亞人種說)　支那は黃帝の時北狄の進入に遭ひて、人種の變動を惹起したる事あり、其先住民族は此際山東省山脈の西南より、又は黃海の南岸より我日本に渡來するの便宜を有したり、然らざるを吳の大伯の後夫差、越の勾踐の爲に國を亡ぼされ、遙かに海を渡りて肥後の菊地に住み、其後裔熊襲民族をなせりと主張して、日本人種の起源に附會せんとするは、抑も淺見不慮の極なり、この出來事たる、我々日本人の祖先と仰ぐ天降人種の下り立たせ賜へる以後に在り、又何の餘地あつて斯說をなさんとするや、顧ふに斯說は始め林羅山一輩の儒家が漢土に深醉したるの時に傳へられたる杜撰說にして、今日に及ては、少しく通識を有する者は、此種の說に與みせざるべし、ケンファー氏(Kempfer)先づ之を駁し、ファラン氏(Farlan)も國語、宗教、躰格、風習等の相違四ヶ條を以て之を否認せり、殊に彼我言語學上の關係が絕對的相反するは最も見易き點にして、支那人の言語には名詞及動詞の變化なく、發音の組織自ら日本語とは異なれり、假に英文字を以て之を驗するに、アスピレートHを支那にては明快に發音し、本邦にてはF音を以て之に代ふる如く、又R及Dは邦人は洋人と仝樣に發音す、れど、支那にては凡てLとなる如し。

井上哲二郎氏の說に曰く、支那人種が、假令支那朝鮮方面より入り來りたるにもせよ、英の「ブリトン」(原人)が「アレグロ、サクソン」人の侵入に遭ひて、其舊來の言語を泯滅したる如きに至らざりしを看れば、支那人種の移來は極めて小數にして日本人種の爲に仝化せられたるものなるべしと、此說頗る肯綮に中れりと謂つべし。

註〔1〕林羅山編「本朝通鑑」に此說始めて出づ

〔2〕氏曰く兩國人は既に數法の仝下かざるものあり到底一二名詞の類似を以て日本人を支那より分派せしものとすべからず尙氏は兩國人性質の相違を述べて曰く日本人には傲慢にして悪嘆するの徵候あり支那人には淡恬にして潔白なる氣象あり日本人或は慓悍にして爭を好み放肆輕躁豪慢食

然なり支那人は或は平和を好み行儀正しく頗沈思深考にして智識あり之に由て他を欺き利を貪る弊あり其他兩者間の禮儀作法も全トからざるものあり云々……Kempfer's History of Japan.

〔3〕明治廿五年十月二十日東邦協會に於ける演說全報告二〇二一號

(第二)韃靼民族乃落胤なりとの說(蒙古利亞人種說)　本說は比較的言語學より推論するものにして、稍々信據するに足るの解釋たり、日本の國語は韃靼遼東及朝鮮方面と連帶せりとの說を唱へたる人は、獨逸のヘッケル(Hekker)佛國のポ゛ーク(Klaploth)の二氏を以て嚆矢となし、シーボルドも亦日本語は朝鮮語及「クリリアン」語(此民族は現今蝦夷及滿州沿岸に生息す)と酷肖するものありと云へり、然るにクラプロート(Klaploth)は斯說に反し、滿州山丹地方の國語は全く「タンギシアン」(Tungusian)語に屬し、日本語とは秋毫の關係なく、隨てシーボルドの云ふ所は更に根據なしと說けり、クラプロートは斯く聲言しつ、其類語集には實際日本語をも對照臚列せるは奇なりと云ふべし、果然ペルリー(perry)出でゝ韃靼起源說を主張し、クラプロートの杜撰を責めたり、近今に及んでは彼の有名なる米人グリフィスあり、日本人種論の結末に附加して曰く、自分が日本に於ける人種學者の說に據て確かむるに、頭骨偏圓なる、眼球の斜傾せる、顴骨の秀でたる、頭髮の黑鳶色なる、鬚髯の粗なる、皆滿州及朝鮮民族と近緣あるを示すものにして、日本人は疑ひもなく「タンガシック」人種に屬するものなりとて、母國滿州より朝鮮を經て九州に入來りたるものとせり、想ふにファラン氏が日本人種を論じて絕對的蒙古利亞人種なりと絕叫し、滿州ドンガラ等の中央亞細亞人種と全族にして、其祖先は嘗て亞米利加に居住せしものなりと云へるも、皆以上の所論と暗合するものなるべし。

註〔1〕japan Expedition.
〔2〕Griffis' Micado Empire.
〔3〕リード氏の考にては菜人英學者とは「ヂャパン・メール」のアストン氏ならん……Reed's japan.P.16.
〔4〕Farlane's japan. P.144.

(第三)アッカド國(土耳其斯坦の西南)より來れりとの說(蒙古利亞人種說)　此のアッカド國と云ふは早く亡滅し絕て知るものなかりしに、一千七八百年代オッペーア(opper)(佛)ローリンソン(Rawlinson)(英)ラッセン(Lassen)(那)の諸氏が、往昔波斯に傳はれる楔狀文字を解釋して、始めて其文字が獨り波斯に止まらず、アッシリヤ巴比倫に行はれ、

尙ほ其文字の創始は紀元前三千年に溯りて盛大を極めたるイプレート、チグリス河畔の王國アッカド及ズメル國人に在ることを知り、爾來、考古學者が彼我の古器物を對比し言語を稽査して、此民族が日本に渡來したるものたることを按定したるなり、此人種は『ズメロ、アッカヂェル』人種と稱へ、蒙古人種に屬せり、佛のオッペアが言語學上より調ぶる所によれば、烏拉耳亞爾泰派に入るべきものなりと。

其言語の類似は尤も興味あり、今二三を摘載す（アッカド國王の第一帝はイスパルと云へるは發音伊那那伎神に近しと附合するものあるに至る）

日本語と烏拉耳亞爾泰語が全く言語學上の加添語に屬するを以て日本人種の基源が稍もすれば亞爾泰附近にあるものゝ如く既かれ易し即ち獨りレーンの如きも日本人種はアルタイに住居したる大人種なりと云へる如し依て序に下に其附近の言語の類似を示して參考に供す

日本語	アッカド語
イヘ（家）	イ或はイヒ
ウデ（腕）	イド
フデ（筆）	フト

日本語	バスク語	日本語	ビショット語（小亞細亞の東南シリアの北）
是レ	ホレ	皿	フサ
計	パッカリ	先	サキ
部屋	ヘヤ	勝	カツ
主	ヌシ	聞	キク

（ウラル山の西）

（經濟雜誌）　（大日本新聞二九一號）

註〔1〕明治十八年五月明治日報及び東方協會報告二〇二一號に由る

（第四）シナイ高原、巴比倫住民の末族なりとの說（白皙人種說）　此說は一七二七年ケンファー氏が始めて主張せる所たり、其言に曰く巴比倫の高塔建築の際、人類の言語混亂し、爲に東西南北八方に離散したる民族中、東方に來れるものは、即ち日本人にして、其口碑自ら聖書の旨意に吻合すべしと、氏は其流寓移住の途筋を示して曰く、先づ東方に向へる一派は、メソポタミヤを經て裏海の沿岸を迂回し、エニサイ（yenisi）シリンガ（Sylinga）の谿谷を攀ぢ、アルグイン湖（Argueen）に沿ふてアーグイン河に出で、終に黑龍江に來り、爾時無人荒蕪の域なる朝鮮半島に殖民すること年あり、永く其山水に眠りたりしが、次を追ふて來住するもの多く、互に軋轢、爭鬪を生ずるの結果、自ら海上に浮で一葦帶水の日本に殖民を始め、日本人種の祖先をなせりと、然れ共其言や新奇を街ふ想像說に過ぎずして、識者の一顧吩にだも値ひせざるものなりとす、偶々寺石正路氏[1]なるもの先年、次の四ケ項目に就てバイブルと古事記の吻合を述べ、ヘブリユの鬼神談は、日本の鬼神談に全じく全然其祖先は相交通したりと云ふ說を樹てたり。

第一、開闢の始水あり　第二、泥土の中より出づる神あり　第三、神丘及創造の日に七の數あり　第四、天地山川を作りたる後人を作る

無量刼道人なるものも亦前年斯説を繰返し、日本人はヒッティト人種なりとてケンプファーの説に投合せり。

註〔1〕東京人類學會雜誌三八、三二〇頁

〔2〕史海三十六卷、七頁

(第五)「セミチック」人種即ち猶太人種と全族なりとの説(白皙人種説)　是れ蘇格蘭の學者マクレオッド(Macreod)氏が主張する所なり、其説に曰く、猶太人の標徴として知られたる、鼻梁圓曲鷹族の嵴鼻に類似せる如きものは、亦日本人の上流社會に於て認むべしと、抑も「セミチック」とはバレスチアナ附近に起れる希伯來語を語る所のシリヤ、カルデア、亞拉比亞人等を指示するものにして、世の學者は斯説を更に重きを置かざるものゝ如し。

(第六)亞弗利加「チユラノ」帝國の後となすの説(白皙人種説)〔1〕　英人ハイド、クラーク(Hyde Clarke)氏の最新説にして、其説に曰く太古亞細亞の高原に於て「アーリヤン」人種が發育したるに先ち、一種の白人種は既に亞弗利加の高原に、人生の健康に適する空土を發見したり、此人種は亞弗利加「チユラノ」帝國として、知られたる一大國を形成したり、云々、而して氏は多年研鑽の結果、亞弗利加州の國語、及アシャンチー(Ashanteo)語と日本語の間に類似の點多きより歸納して、上に説く所の「チユラノ、アフリカン」帝國民は日本人の祖先なるべしと斷案を下せしものゝ如し今次にクラーク氏の記錄に隨ひ日本語と亞弗利加語の類似せるもの二三を示す。

日本語		亞利加語		
カミ(神)	kamu	Pum	muri	mizi
カタ(肩)	kata	Yoro		
ソラ(空)	sar			
ハラ(腹)				
ヨル(夜)				
ムラ(村)				
ミヅ(水)				

註〔1〕Roed's japan VOL.1.P.17.vol.2.P.53.

〔2〕Hyde clarke's Comparativo table…in Reeds japan p.331.

(第七)馬來方面より來れる馬來人種なりとの説(馬來人種説又は蒙古?)　北米のピッカーリング(Pikkering)博士が羈旅の客となりて布哇に停るの時、我日本人を見て説をなして曰く、是れ馬來人種ならんと、蓋し馬來人が日本に來るには黑潮の便

宜あり、自ら人の信じ易き説にして、獨逸のドエニッツが夙に主張する所たり、隨て其言語風俗の類似をも相當に附會して、自説を確めんとするは學者の通僻なり、井上哲二郎氏[1]も亦馬來起源を説く一人にして、日本人種の最大部分は此人種に依て占められ、北方人種は小部分に止るとなせり、然るに此には馬來起源に絶對的に反抗試むる學者もあり、獨逸のライン氏[2]其人にして、氏は云らく、馬來語は日本語と些の關係なし、是れ其動詞と主格の位置、形容詞と主格の位置等に於て全く正反對の文法を有すればなり。(云々以下畧)

註 [1] 人種言語等の關係より日本人の位置を論ず、東京協會報告、二一號
[2] JJRein's japan P.389.

日本人種は南方及び北方より渡來したるものたるに歸着す

日本人種論が人類學者間の難問たる丈け、各得手勝手に附會の説を爲し言の架揑に出づるも、恬として顧みず、故に後の學者リード氏[1](Reed)の如きも、其諸説の可否を判定するを得すして止みたるものゝ如く、單に支那及南洋より風波の爲に漂着居

住したるものなるべしと極めて曖昧なる結論を爲せり、然れ共著者を以て之を觀るに以上の諸説紛々たる間に自ら歸着する所あり大要二大部門に分つを得べく即ち

(1) 北方朝鮮方面より來りたるもの[2]
(2) 南方馬來方面より來りたるもの、

是なり、然るに其學者の説をなすや往々、自説を揚けんが爲に他説を抑へんとするの嫌あり、北方より來ると云ふものは南方よりは來らずと云ふ、豈斯道の爲に吝まざるべけんや、著者の如きは寧ろ兩説を信ぜんと欲するもの也。

一日本人種は北より來りたるものとなす説の證據

(イ) 五本の文法は全くマレイと反對して却て朝鮮蒙古滿州土耳古、ホンガリー、フィンランド語に全く
(ロ) 勾玉に背瑕紆にて作れるものあり背瑕紆は西藏若くはバイカル湖邊の產なり、
(三) 天降人種金銀を裝飾せるが又は劍類を携へられたり金銀は朝鮮の產と思はるゝこと、
(四) 天降人種は全く文身をなさゞる事、
(五) 天降人種は面白く頭髮黑しマレイ人種は鮑鬚なれ共日本人種の上等社會は鬚髮共に美なり是れ北方人種たるの證なり、
(六) アムール川コーカサスアルタイの麓には幾多の日本古代の陵及塚に似たる墳墓あり

(七)崑崙山下に曲玉を好む人種あり、

(八)朝鮮人を日本人は全一人種なりとの説、

(九)日本古代の風俗左衽は滿州隨靺の遺風なり、

一日本人種は南方より來りたるものとなす説の證據

(一)「カミ」と云へる語は蓬萊マレイ等にて行はれ其意味は英語のRulerと全一にして酋長自身にも之を稱せり我古事記に吾は「クニツカミ」なりと云へると全ト又後世の相撲守上總守等の守に全し、

(二)涅齒の風俗は全く南洋の檳榔の實を嚙みし餘風なるべし南洋は之が爲に別に藥を用ひて齒を黑くすると行はる、

(三)古事記に鰐魚のとあり鰐は南洋に在らざれば非せざるなり、

(四)勾玉の翡翠にて製せしものあり翡翠は我國に產せずして交趾支那に產するものなり

(五)後漢書に日本の俗類屋厓僚亘(今の廣東瓊州島の俗)、

(六)吾國人に文身のものあり文身は南洋裸蛮の民の裝飾にして北方衣服ある民族のなすざる所、

(七)古事記を按ずるに古代は木綿を以て衣服を作れり木綿は楮にて楮なりサモア土人の用ふる所、

(八)マレーのピーザンと稱する木は扶桑木の一種なり、

(九)アイヌ語「シヤモロ」(日本と云ふ)の「シヤモロ」は緬羅モシリー國にて南方に緣あり、

註(1) Roeds japan Vol.1.p.17

(2) ブリントン氏が日本人と朝鮮人とを日本人種なる一屬の下に置くは尙ほ斯既に緣の近きを示すものに似たり依て其系統表の正否は暫らく不問に措き參考の爲め之を左に抄す……Brinton. race and people. P 194

ブリントン氏の亞細亞人種系統表

支那人種……支那人

西藏人種……西藏人、ラダキス人、チベレス人、ボタチス人

印度支那人種……緬國人、暹羅人種、安南人、南爪人、交趾支那人、東京人

「タンダシック人種」……タンゲス人、滿州人

蒙古利亞人種……蒙古人、「カルムック」人

韃靼人種……「ターコマン」人、「ヤコート」人、土耳古人、ウスベック人、キルギス人「コサック」人、匈奴人

「フィニック」人種……「フイン」人、「ラプス」人、「エスソニアン」人、「ウグリアン」人、「マグアー」人、「モードビン」人、「サモエード」人、「オステークス」人、「ボガル」人、「リボニアン」人、「カレリアン」人

「シビリック」派

北極人種……「チユリチス」人、「コラック」人、塔察加人、「ナモロス」人、「ギリヤック」人、「アイヌ」人

日本人種……日本人、朝鮮人

日本人類は竟に南方及北方より來りたる「アーリヤン」人類なり

著者の目的は日本人種が「アーリヤン」人種即ち歐羅巴人種の血統を享くるものたることを證定すれば足れり、人種論の詳細に亘るものは人種學者の講説と付し、著者は前々節載する七種の人種論に就て看察を歸結すべし。

凡そ七種の人種説中、その蒙古及馬來人種説をなすものは、毎に荒唐無稽を以て了るも、他の白皙人種即ち「アーリヤン」説をなす者の立論は、稽考據ありて信憑すべき傾きあり、而して其日本に於ける「アーリヤン」人種の降臨は猶ほ希臘に於ける「アーリヤン」人種の如く、南方及北方の二方面より來れるものなりとの考證は前説に於て悉せり、著者を以て之を見れば其の北方より來りたるものは、彼の出雲人種と稱するものにて、南方より來りたるものは彼の高千穗人種と呼ぶものなるべく、我中國の野に於て此二人種は計らず邂逅して共にその故國を忍び、宛も今昔の感に堪えざるものありしは希臘に於ける山部及海部の二方面より入りたる全一「アーリヤン」人種則ち「ヘレニス」の邂逅と極めて相似たるものあり、著者か出雲人種と稱する者は大己貴神を中心として北朝鮮より出雲方面に臨御ありたる高貴民族を指すものにして、此民族の存在せしことは、舊史に卑陋醜穢なる固有人種の外に品位高雅の王神酋長ありて伊志爲又伊波と稱する石窟に住める由を云ふにても知るべし、而して後者の高千穗人種は、取も直さず日向高千穗峰に天降られたる天孫瓊々杵尊以下を云ふものにして、此一行の降臨に先ちて經津主武甕の兩神か神使として出雲に馳せ、中國平定の道を問へるに思ひ合すれは、兩民族は全一高貴の天降人種（下降の途順を異にしたる）として其前者は一歩後者に先んじ降臨したるものたるを知るなり。

今や著者は進んで此高貴民族、即ち我が日本人種祖先の國たる、所謂高天原なる所は何れの靈界なるやを判定せんと欲す、著者思ふに高天原なるものは坤球上に於て人類の創めて發現したる靈地の謂に外ならず、然れ共通俗學者の説く所の印度歐羅巴人種の發現地たるヒンデウクーシに於ける方三万哩パミール高原が果してこの高天原なるや、又獨逸のペッシェル(peschel)が云ふが如く、生理學上、地理學上印度洋上に邂古大陸を存したりと説き、佛經にも全樣に錫蘭以南に嘗昔巨大の陸地

ありし由を云ひ、森三溪氏[3]の如きも高天原は自然印度洋上の靈地を云ふと說けど、凡そ今日ホンブロン氏(Honblom)の人類一起源說とルーイス、アガシス氏(Louis Agassiz)の人類數多起源說との議論決せざるの今日に於て、高天原即ち高貴民族の發現地を定むることは頗る困難にして、單だ今は其降臨地の高千穗なるより推すも南方に於て高天原即海原を有し、潮流或は風向の關係にて[4]我日本の地に臨降ありたるものとして止め置くこそ妥當ならめ。

大凡日本人種發源の經界として知られたる高天原なる處は日本人種即ち「アーリヤン」人種を哺育したる所ならば、論理上、歐羅人種の祖先國も亦高天原なることを知さらるべからず。是れ歐羅巴人種は日本人種と共に「サンスクリット」經界高天原附近の如じ語の語源を有するに徵して、近くはアストン(Aston)氏が日本語はチュニアシ語の特徵を有すと云ひ、更にアキン(Akkin)氏の學說に隨ひ日本語と「アーリヤン」語源の類似點を示せるに徵して知ることを得べし、彼の詩伯シルレル(Schiller)すら其殘篇に於て獨逸の理想は日本の口碑に相似たるものありと云ひしは、日本人と歐羅巴人の間に割くべからざる血緣の關連するものあることを知らしむるものにあらざるなきを得んや。

嗟乎日本人種！今より三百五十年前に日本人種が初めて歐羅巴人種と相見へたるの時之に對するに毛唐人又南蠻を以てしたる日本人は固より多年自然淘汰の勢力を共に幾多の變遷を經たるにもせよ、其祖先は全じく、毛唐人又南蠻の祖先と相近く、人種學上血屬の間柄なることを、夢にだも記憶せざりしなるべく、今日の日本人と雖尙未だ之を知らざるものあらん、由て著者は本論を著して特に我同胞と共に斯有爲民族の抱負を大ならしめ坤球面に跳梁するの日あるを祭つもの也、噫呼、日本人種！日本人種は歐羅巴人種と一族にして最有爲最高尙の一民族なりし也。

註[1]新渡戸稻造氏、農史講義
[2] Peschel's Volkerkunde.
[3]巢海天降人種降臨の途順
日本人種[4]明治二年十月刊行横濱知天雜誌
[5] Asiatic Society of Japan.

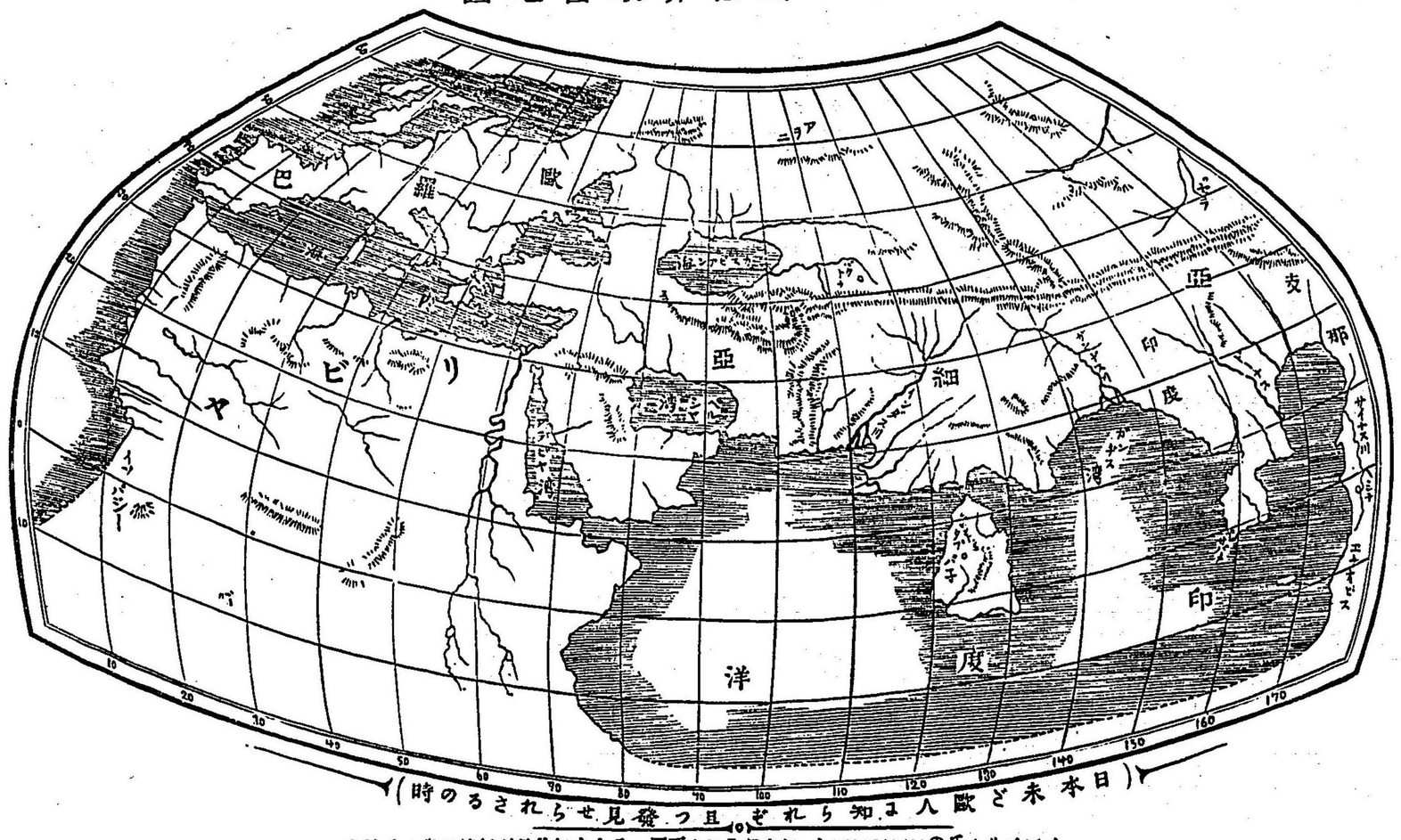
第二論　日本國民の文運は何が故に比較的遲滯せしや

何故に東亞白皙人種の文運は遲滯せしや

日本人種既に最有爲、最高尚なる白皙人種なり、然るに其文運の進捗は僅に近今に於てし、彼れ歐羅巴人に比して頗る遲滯せしは抑も何か故ぞ、凡そ渾球上十數億の生民中、自然淘汰に於て文化順適の頭顱を有するものは白皙人種なり、視よ固有の智能を揮霍し才識を恢張して、渾球面上に時めき渡るものは、悉く西歐の白皙人種ならざるは莫きを、顧みて今より大凡そ五百年前の彼等を見れば、渾球の一隅に蹐蹐して、見る影もなかりしが、一朝自然的文運の進捗に鞭つや、庶隙爲すなきの駑馬を拔ひて文化先登の月桂冠を恣にせり、而かも均しく是れ白皙人種なるに我大日本國民は何が故に文運の開展比較的に遲緩なるを致せるや、著者の所見を以てすれば三個の理由ある者の如し。

其第一理由　日本邃古民人の常職は漁撈を以て最とせしたるが故なり

トレミー氏世界最舊地圖



寫抄リヨリ第二卷行刊倫敦年九七八一ハンバリー氏ノエンシエント、セオグラヒー四曆

第貳圖

漁族と獵族との文化の遲速

邦人口を開きて立國の本を語れば、輙ち農と云ふ、農たるや固より立國の大本、然れども陰陽渾沌の裡に斯國出つると同時に農事起れりと思惟するは大に過てり、農の事たるや民人緻密に蕃殖し、各其口を糊するに當りて單に手を拱ひて自然の供給に俟つべからざるに及びて始めて起る者にして、社會進歩の中段以降に位し、一般世界の建國尤も古き國民にても其前段に溯ること少なくも八千餘年の間は、田獵と漁撈とに野蠻的生涯を送りたるものならざるべからず、蓋し斯の如きは世界の各國を通じて其轍を同うす、復著者の啞々を俟つなき也。

而して這般農事の前驅たる漁撈と田獵とは、其取捨銓擇の如何により、其國人民、文運進捗の遲速に影響するものにして、亞米利加土人、印甸（インヂヤン）の如き、其例證の一となすべし、阡陌千里に亘るの郊野、幾萬の亞米利加印甸は各其部落により、文化の度を一にせず、中には智能著しく、進み罕に白人を凌ぐものあり、中には依然蠻貊の域を脱離せざるものあり、是等兩種の土人生業の情景を看るに、一は啞獵を事とし、他は漁撈に從へり、而かも其啞獵を事とするものは、是開發進取の民族にして、其漁撈に從

ふものは、是れ頑冥停滯の民族なり、蓋し漁の事たる、其網罟に依ると釣弋に依ると
に關せず、視官は固より、全身の注意は每に一定不變の點に於て動き、終始水の細波
微瀾と相接するを以て、生理學上局部の發達は或は望むべきも、總じて智力の發達
は得て望むべからざる勢あり、之に反して畋獵の事たるや、每に趨蹌馳騁、全身の動
作をなし、在意着管至らざるなきを以て、普ねく五感の活動を催進し、不知不識の間
に智識の啓發を來すものとす。

論をなす者は云はん、總じて漁獵の發達は冒險的遠洋航海の思想を著しく促進せ
じむるの傾向あり、故に此點に於ては獵族は斷じて漁族の下風に立たざるべから
ずとされ一理あるの言なるが如し、漁族は或一定の程度迄は非常なる進歩を獵族
の上に決すと雖、これを過ぐれば退却の傾向を見るに至るべし。

碩學スペンサー(Spencer)も云へり、凡そ生存競爭に勝利を制するものは、足の強壯
なる民族に在りと、復たワシントン、アーヴィング(Washington Irving)が實地目擊した
る所によるも米國土人の漁業生活をなすものは、足骨弓曲し(是れ印甸が本業の習慣に於て小腿中に長生すればなり)到底進化の望みなしと、以て斯說をなすは獨り著者のみならざるを知

るべし。

翻て本邦の建國時代を看察するも、地理上より云へば、四面環海の一島國、深山幽谷の毛族を奔らすに適するよりも寧ろ河海沼澤の水族を殖するに適するに若かず、復た氣候の上より云へば、概して肉食を求むるの必用少なかるべく、況んや歷史は靈怪なる口、碑を孕み、毛族の肉は一般に之を忌むものあるより、本邦の邊古に於て畋獵の起らざるは固より其所にして、生を漁撈に營むもの多かりしなり、請ふ此事實を歷史に徵して、讀者の考證に便せん、我朝開闢の始め天津彦火瓊々尊の天降らるゝに先んじ、經津主神と武甕神とを出雲に降し駐除平定の任に當らしめ、特に大己貴神に問ふに其故を以てす、大己貴神對ふるに己が子に更に問ふ由を以てす、當時其御子と申すは事代主神と申されしが、出雲國三保之崎に釣魚を以て業とす、故に能緒手船を以て使者を乘せ高皇靈の敕を事代主に傳ふ云々とあり、又古史を按ずるに神武東征速吸の門に至りし時、一漁人あり、艇に乘して至る、天皇之を招き、問曰汝誰也、對曰、臣是國神也、名珍彦と云ふ、曲浦に釣魚す云々、又問曰汝能く我が爲に導耶、對て曰く、之を導かん、天皇敕を漁人椎

攜末に授く等の類古史に散見するもの固より尠くるに遑あらず要するに邃古漁業が生民の職業たりし事を證定するに餘りあるを信ず。

本邦の邃古獵事は至て微々たりしもの〻如し　次に獵は如何なる狀勢にてありしやと云ふに強ち皆無とはなすへからずと雖、至て微々たるものなりしが如し、

そは同しく日本書紀に

兄火闌降命(ホカミノスヽノミコト)自有二海幸一弟彦火火出見命自有二山幸一始兄弟二人相謂曰試欲レ易レ幸遂易レ之各不レ得二其利一兄悔レ之乃還弟弓箭一而乞二己釣鉤一弟時既失二兄鉤一無レ由二訪覓一故別作二新鉤一與レ兄兄不レ肯受一而責二其故鉤一弟患レ之即以二其横刀一鍛作二新鉤一盛二一箕一而與レ之兄忿レ之曰平二我故鉤一雖レ多不レ取レ益復急責故彦火火出見尊愛苦深行吟二海畔一時逢二鹽土老翁一問曰何故在レ此愁乎對以事之本末一老翁曰勿復憂吾當爲レ汝計レ之乃作二無目籠一内二彦火火出見尊於籠中一沈二之于海一即自然有二可怜小汀一於是棄籠遊行忽至二海神之宮一其宮也云々

之に據て察するに火酢命(又火闌降命)が彦火火出見の山幸則ち校獵と自己の海幸則ち漁撈とを易へて、其狩獵の獲物なきに窘み、再び漁撈に易んとて斯の如き紛議を釀し、火火出見は其道の講すべき者なきに至り、幸に海神の宮に去るの運に至りしなり、獨り校獵は獲物のなきが爲のみならず、毛族は一般に神の使者なりとし妄信し、捕獲を快しとせざるものありしなるべく、其他史乘徵すべきの料頗る鮮なし、古事記に曰く

かれこゝに鄕合まして、其御刀は草那藝劍を其奚祖受比賣の許に置て伊服岐の山の神を取に幸行き、こゝに法山神は徒手に直に取てんと詔給ひて、其山の賺ます時に、山邊に白猪逢へり其大牛の如くなりき、かれ言譯して詔給はく是白猪に化れる者は其神の使者にこそあらめ、今殺すとも還らむ時に將殺と給ひて賺坐しき(ハシヲチング)

去れば純料なる校獵の國朝の歷史に見へたるは人皇廿一、廿二代、安康雄略以後に在るべし、故に著者は斷乎として、日本邃古の民族は漁族なりしを說き、隨て文運の進捗に遲緩を致せし理由たるを敢て云ふ。

註〔1〕是レモルガン氏ノ"Classification of Ethnic Periode"ヲ以テ人類發現十万年說ヲ割當シテ得タル年數ナリ(新渡戸氏農史講義)

1. Lower stutus…subsisting on Frint and nut (Saragery) 60.000.
2. middle " ….Fish Siet'd use of Fire (Barbarism) —
3. upper " …Bowd arrw Huntings Fishing (civilization) 20.000.
1. Art oF pottery……20.000.
2. Dom of Animal Cult. of maize } 15.000
3. iron ……5.000

〔2〕ドクトル、ヘンキ氏ハ之ニ對シテ裏面ノ說ヲ把持セリ
〔3〕「アイヌ」ノ骨格腰骨曲レリト雖其理由ハ異ナラン
〔4〕古事記大國主神國避ノ段及日本紀三卷ノ二枚等ニ在リ

其第二理由　日本國は地理的別離の位置に在り。西海岸良港灣なし

日本の地理的別離　凡そ春秋來往二千五百年、依然として未開の域に沈淪したるもの、此に明治の維新と共に恰も熄火山が俄然爆發し、頻に灰を降らし石を飛ばし、勢猛烈停止する所を知らざるが如き長足無儔の文明進歩を爲したる我大日本帝國は、東海の一島として、西歐の英國と共にセラーの所謂地理的別離の位置に立ち、文明の域に進むべき要素を具備しつゝ、歐人往來の巷となるを後ちて、漸く文明の域に進みしものは、抑も亦遲ひ哉、英國は西歐の一島國なり、其今日あるは彼の地理的別離あるか故にあらずや、セラー(Sherah)の論に曰く、凡そ國が特段なる文明を發達せしむるは其地理的別離に關する大なり、英國が歐大陸と離れ、僅にデボン海岸と北方の佛蘭西ギンドレッドローランドとの間に存する小海峽の隔離を存したるは彼が貴重なる歷史を生むの基たり、人或は疑はん此狹幅の海峽能く別離的障壁の用をなすやと、然れとも此海峽には潮流の關係にて特に高潮廿五英尺に及ぶことあるを知らざる可からず、云々

歐洲本土國をなすものは、十を以て數ふべしと雖、過去數年間に於ける歐洲文物進歩の機微、大に動きたるものは英國に於てしたり、是れ偶々以て文物の小孩が大陸に孕まれたるにもせよ、島民國の手を借て始めて安產するものたるを示すものにものにして、島國には斯種の一種高貴靈怪なる氣が、其大空に旁魄彌漫するものとせざるべからず、故に一定の期至ると共に大陸の文物を產育する爲め、安全なる穩坦として島國に待つあるものゝ如し、島國と大陸と斯の如く互に待ちつ待たれつする爲に、兩者の間には隨て船舶を以て往來出入するの良港灣を雙方便宜の排置に於て所有せざるべからず、蓋し其文明の生產期已に火輪漕船の發見後に降りて稍良港灣たらざるものにても、良港灣の職務を辨ぜしむることあるを豫め想はざるべからず。

故に英の歐陸に於ける、其文物の產期に際しては、已に輪船の行はるゝあり、廿五

叭の高浪更に其妨碍を爲すに足らず、歐陸の瓦港灣は東英の瓦港灣に對し、彼此の往來を自由になし得たる也、而して今や大日本帝國の亞細亞大陸に於ける、果じて英國の歐洲大陸に於けるが如きを得しか。

亞細亞大陸に於て文物の小孩が便々として孕まれたるは、洵に數千年の往時なり、支那の帝堯時代印度の釋迦時代は則ち然らずや、時は正しく產婦たる大陸が東海唯一の穩媼たる日本を後つに切なりき、只慮ふべきは往來出入の港灣なり、觀よ大豁露なる日本の西海岸を爾時產期の早きに過きたる爲め、今日の如き火輪船の便を有せざるを以て船路險惡怒濤山の如くなるに加へて、山嘴岸曲巨舶を容るゝに足るもの何れにある、偶々之あるも潮落ぐれば舟膠するの類のみ、是を以て山影蒼として望むべき隣邦朝鮮とは神代より往來絕えざるを致せしも、未だ嘗て漢土及天竺と船舶往來龍骨を乾すに暇なかりしを聞かず、隨つて日本の自然の國勢に於て、穩媼たるべき責務を果すこと能はず、アタラ小孩を夭死せしめたりき、寔に東洋の爲に惜んで惜まざるべからず。

日本の遠古には航海術發達したりしも、西海岸に瓦港灣を得さるが爲め一に此非運に至る　進んで當時の航海術を稽ふるに頗る發達したものゝ如し、天降人種が南洋より千里波濤を衝て來りたるは、航海上の大手腕ありしを見る可く、彼の饒速日尊が天の磐樟船に乘りて大空を往來せりと云ふも亦然り、況して天浮橋既に一大巨舶なりとせば、其操縱の技倆驚くべきものありしや必せり、日本人種は航海民族たるより其本色として船舶を尊重するの風あり、之を浮寶と稱へて守國利民の大資となせり、此民族に於ける航海術の進歩は後人の驚嘆を値すべきなり。

吾人日本人の祖先が、此大資を齎して至近の亞細亞大陸に航せんか、艇舶の瓦港灣を欠くを奈何、折角の航海的民族も其手腕を施すに所なくして、空しく脾肉の嘆に泣くのみ、隨て文明小孩の瓦穩媼たるの國勢をも棄て了れり。

日本の東海岸をして西海岸たらしめさりしを惜む　上古時代に於ける我が航海術の發達彼が如くなりしに、陵夷して衰頹し、後年泰西に於ける航海術一層の進歩をなし、浦賀灣頭米艦の海を歷して來るに及び、我國民愴惶なす所を知らざ

りしを想ふに及では、著者筆を投して悵然祖先の靈に謝するの途なきを嘆せざるべからず。

然れ共自然の形勢は人力の左右すへきに非らず、試に地誌を披て檢せんか、日本の東海岸と西海岸とは、其海岸線を比較するに、六百六十里の差にして、其比二と一の如し、[2]凡そ明治以來、西洋文運の流入、船隻の投錨多く東海岸に於てするを見るは、此自然の地勢これを然らしめしなり、故に今に及んで悵然として天を怨むものは、日本の東海岸をして西海岸と其位置を換へしめさりしに在り、若し假に其位置を換へしめたりとせよ、日本文運の小孩は呱々として今より二千年の上代に於て、生れしならん、嗚呼此西海岸恰もスカンヂナビヤ人を容れたる氷州が千有餘年封鎖して今日に至りしが如きのみ、噫。

註〔1〕是れ内藤耻叟翁の既にして其の他凡そ遣船等の如きも神代に開け神武天皇吉備國の高島に在る時之が改良なさへ計られんと舊史に明かなり、然れども或論者理學博士三好氏の如きは、却て日本人由來船を恐る等の既をなせり(東洋學藝雜誌一六三)

〔2〕三厩より赤間關に至る西海岸線六五一里、太平洋に面する東海岸線一三一一里……明治三十年五月地學協會員の回答による

其第三理由　亞細亞大陸地固有の文物は死的文物なり

東洋文物は世界歴史として價値を有せず　本邦西海岸は港灣に乏しきが爲め文物の進歩に阻害を與へたりと云ふと雖、元來東洋に於て懷妊せられたる文物其物は、强健完美の發達をなすへき價値を有せず、故に之を死的文物とは云ふなり、ギーゾー氏(Guizot)が自著文明史に於て東洋文物は之を論するの値なしとて放棄したるは、其死的文物たるの故のみ。

渾球上に於ける大小民族が自然淘汰の勢に打勝ちて、人種泯滅の日まで强健完美の發達をなすへきものは、勉めて其民人の資質稟賦を侵害せざる底の文物ならざるべからず、然らば民人の資質稟賦を侵害せさる底の文物とは何そや、自由權の尊重、生産業の放任是なり、セバート、マッケンジー(Sebart Makengie)曰く歴制主義は上帝が人類の進歩に備へたる勢力を障害打破し、自由は是等の勢力に向

て自然の目的及實行を證すと、既に自由權を抑壓し、生產業を束縛するに於ては、此種の文明に命するに死的文明を以てせさるべからず。

自由の發達と國の位置地勢及宗教　嘗みに東西文物の相違を比較斜察せんに、若しセラーの云ふ如く、凡そ國の地形的成立（Physiographical Formation）は人智の開發如何に關係するとせば、歐洲の如き岬灣の出入多く、リッター（Ritter）及キヨット（Guyot）等が算計せる如く、其陸地岬角地の比に於て亞細亞洲は六に對して一、北米は十四に對して一の割合なるに、獨り歐のみは、四に對して一の岬灣地あり、海岸に於ける異常の屈曲を表はし、海岸線の延長は總て一萬七千哩に達すると云ふ。隨て地形成立は內陸に於ても頗る複雜を來し、縱橫に奔馳する山系と相俟ちて、到る處に水乃至山の池溝隔壁を築きたる如く、自ら地理的別離をなせる各種の別乾坤を有し、且又別社會をなし、別政府を建つる傾向を生じ、且つ各種の相異なりたる思想を生むべきものたり、希臘の如きは之が好標式にして、其國の彼の如く小なるに拘はらず、幾多の別乾坤別天地を作り、或はスパルタとなりアゼンスとなり、其地理的境界は、彼等を驅て多く獵族たらしめ、一般國民皆

對等の權利を以て、自由に獵地に橫行する等より、自ら其民人に自由自治の精神を養ひ來り、後に「ギルド」（Gild）となり、立憲共和政躰の基を開けり、故に路易十五世をして偶々「佛國は我一人の所有に屬するものにして凡そ二千五百万の國民は只我の快樂を遂ぐるに必用なる外、他に價値あるものにあらず」と公言せしめしも、歐陸の地形的成立は多く之を容さず、エドモンド、バーク（Edmond Burk）をして貴族なるものは全く何事をもなさず、彼等の容貌は余をして困倦せしむ、彼等は戰爭又鬱悶に依て僅に死すへきものゝみと憤慨するに至らしめたり、後ち竟に「プルターク」（Plutarch）の愛讀者ヲヤクエス、ルーソー（Luther）を出し、佛國の大革命を遂げて地理的形成の自然に副はしめたり、斯の如く凡そ全歐の至る所は皆相前後して自由產業を以て骨髓とし、經濟的原則に源ける特種の文明思想を開發し來り互に衝突融和して强健完美の文明を形成し、輓近此文明勢力は破竹の勢を以て渾球上面を風靡し去らんとせり、是れ活的文物に非らずして何ぞ。

之に反して東洋亞細亞洲は海岸線の屈曲比較的に少なく隨て地形的成立は一色單純なり、是を以て文明の開發は其來る久しと雖、東陬より西隅を通じて一色

單純なる、所謂東洋思想を養成し來り、永く思想上の進歩開發を認めず、殊に民人は太初より其豐沃を利用して農耕に從ひ、早く既に主權者を置て、土地の分配及所有權を確定せんとし、日月の推移と共に主宰者階級と勞働者階級を生し來り、一般民人の自由思想は全く亡滅し、空しく習慣を以て專横壓制に對する絶大保護なりと思料するに至れり、マーシヤル(Marshall)の如きは、特に耶蘇敎を引き來り、其敎育が勞働者階級の自由獨立を專重し、凡て、經濟學的原則に原つける文明の開發を促すの力あるに對し、東洋にては却て波羅門、釋迦、孔門の敎育が、之に正反對の階級的思想を注入し、民人の自由權を侵害し、生産業を抑壓し、不經濟的の文明を促進したり、又何を以て强健完美の文明となり、歐土の文明と轡を並べて馳騁するの餘地あらんや。

日本は死的文明を享けて遂に文化の進捗を見ず

テーロル(Taylor)及ハンボルト(Humbolat)の云ふ如く、日本の正史が神武天皇耶蘇紀元前六六〇)に始まらすして、後一千三百餘年人皇三十二代天智天皇の時に始まるとするも又アストン(Aston)及チヤンブレン(Chamblerain)の云ふ如く、同じく一千年後應仁天皇前後に始まると爲すも、共に是れ日本の正史が儒佛の入來を以て肇めて起ると爲すなり、それ恰も著者の所謂死的文物を享受したるの始めに相當すべく、當時歐陸にては佛蘭西王國クロビス(Glovis.l)一世の治世と殆ど相應じ、耶蘇敎の延蔓を見たる時たり、是れ事情に於いては東西偶爾の吻合と雖、抑も亦歐土に於て活的文物の漫ろに光を磨するの時は即ち東洋に於ては死的文物の末路を吊するの時なり、相距ること太だ甚だし。

蓋し著者が儒佛を以て東洋文物の片影とし耶蘇敎を以て西洋文物の片影として見んと欲するは、經濟的原則より民人の資質稟性を侵害せさるを以て標準としたる臆測にして、必すしも耶蘇敎旨の淺深を評論するにあらず、宗敎としての幽妙深玄に至りては或は、佛敎を推さゝるへからさるものあればなり。

之を要するに西洋が活的文物を享受して、文明を發達進捗するの間に、日本は死的文物を享受して寸進尺退、其民族固有の文物も消磨潰滅し去られ遂に又なすなきに了れり噫。

註 [1] Mccarthy's History of Our Own Times. P. 6.

第三論　日本の西海岸に於ける諸國との交通の梗概

史學的理想の日本國

クルチユス(Curtius)[1]の希臘史を論するや、希臘本國及びコンスタンチノープルより眞西眞南に描ける二線の內方に含容せらるゝ小亞細亞の一部分と土耳其の一部分とを史學的理想上の希臘國として併論したるより、大に希臘史論に於て闡發開悟する所ありしと云へり、蓋し兩者其國境の相接近するが爲に古來自ら人種の混合習俗の感染等は免るべからざりしを以て、歲月の推移と共に密接の關係を作り、一國の躰を馴致したるなるべけれはなり。

今や日本問題殊に日本の外交問題を解釋するに當りて、尙クルチユスの希臘論に於ける如く、朝鮮及支那の一部分をも我日本國に內容して、史學的理想上の日本として併論せば、日本の外交史論の上に闡發開悟する所鮮少ならざるべきを知る、某論者の如く「上古、高天原、海原、常世の三國聯合し、即ち日本、朝鮮、及支那東南沿岸の地は、皆同種族の住みたる區域なり」と、云へる說の眞否は今問はず、要するに此等古來地方の自他密接の關係を有するは、希臘對土耳其小亞細亞に讓らざるものあり、況んや朝鮮及支那本土は東洋文運を生むの母にして、日本の文運も此に孕まるべき天の默契たりし關係あり、不幸地理と時節との乖戾より、タトヒ其默契を皆無にしたるにせよ、以下著者の論題を解釋するに當りて、先つ彼我の間にありたる交接往來の事迹を論頭に上ほし其關係の密着を知り置くの必要ありと信ず。

註 [1] History of Greece. Vol. 1, p. 13.

神代に於ける朝鮮及び支那との交通

朝鮮とは親子の國たり　神代に於て素盞嗚尊が韓鄕の島に渡られし事を始として、紀一書に云ふ如くんば、尊の皇子伊太祈(イタキ)又の名は五十猛(又の名大屋彦)を以て韓國に王たらしめ(是れ古紀に據るに諸冊二神三子ある中第一子大日靈貴尊は以て高天原を、第二子月夜尊は夜見國を、第三子素盞嗚尊は海原を知らしめたり、而して其海原は韓國たりと云ふより思ひ合すれば、其御子にして韓に王たるは是れ其所なれば也)隨て當時の大八島即日本國とは親子の國を以て相往來し大八島の植樹は之を韓國より齎らしたるなりと云ふものあり、凡そ後世の龍宮と稱するは韓國の事にして、其主宰綿津見神は亦素盞嗚尊の後裔たるべく其女は後稻飯命の入韓と共に之に嫁がしめ(古事紀を按ずるに、火々出見

の稻飯命は妣國なる海原に入ると云ふ、蓋し神の妣玉依姫を聖り、稻飯を生む、故に韓即當時の海原は御母の國妣國也）彼我少なからざる因緣を有し、遂に北島親房をして日本と三韓と同種族なりと絶叫せしむるに至れり。

常世は支那國にあらざるや　古事紀に御毛沼命者跳波穗坐于常世國とあり、常世の解釋に付ては各學者の說異なり、本居宣長は韓國ならんと云ひ、新井白石は常陸國ならん（新井白石曰、國常立は國帝立と、常國に立ち賜ひしと云ふが如く、常陸國なり云々（古史通）本居宣長の常世なる以て韓國となす、是れ但馬毛理の祖先天日槍は韓國の祖の子なれば、代々相傳へに、其本國に橘あるを知りて垂仁天皇に奏し、次て此國に渡るに至りたる所と立說するものなり（然れ共橘は暖國の產なれば、この謂れなし）（古事紀傳）と云ひ、近代の史家は滿洲に附會せんとするものあれ共、皆其考證確實ならず。

垂仁天皇八十年　天皇命田道間守遣常世國求非時香菓今謂橘是也、同百年春三月　田道間守至自常世則賫物也非時香菓八竿八縵來、萬里蹈浪遠度弱水是常世國則神仙秘所藏、是以往來十年

著者は右の垂仁の朝に田道間守常世國に非時香菓即橘を求めたる事實より鑑みるも、常世は南方にあらざる可からざるを知るなり、是れ橘は暖國の產なればなり、即ち常世を以て支那國と斷定するは極めて妥當なる議論なるべし。

夫れ開國の列聖、天降至高の諸神が日向に駐蹕せられたるの當時本邦の筑紫に在りし原人種は復支那本土にも殖したりしが、自ら我同胞の祖先即ち天降人種に對しては尊崇の念慮を惹起し、彼の史本邦をして東方君子國とし、神仙の棲む所となすに至る、斯の如くして既に建國の當初に於て支那なるもの、克く本邦を知り、又天命を祐けて德を本邦に布かんとせられたる我開國の列聖、固より克く彼を知り、之を討平するの思召は終始一貫したるが如し、（是れ彼月蝕祭にのられ給ふ、とわきて皇太神宮に申し給ふ祝詞にて明白正大なること明備す今之を略す）豈に彼此の通交なくして止むべけん乎、最初本邦が彼土の人に知られたるは彼の三皇五帝の時代、黃帝有熊氏の世とす、恰も是れ吾が皇祖大日靈尊の御時とす。

黃帝宮洛上、　忽有大鳥、御圖置席前、是鳥狀如鵰、　其雄如鳳、其雌如鳳、　皇帝又曰、此鳥遇亂則去居九夷矣、出東方君子國、
又有麟黃之獸、其黃狀如狐、背上有兩角、龍翼、出日本國、壽二千歲、黃帝得而乘之、遂周遊六合、

一書に本邦紀元前千九百廿七年（兩史紀元前一九五六年支那黃帝有熊氏の六十年）に通交の事聞えたるも

の是を前述の論證に照し、常世の說と相俟て支那國とは古くより相往來したるを知るべきなり。

下て我彥火火出見尊の御治世（皇曆紀元前四三九年、西曆紀元前一九八年）に於て明らかに支那周の世と交通あり、されど其記は皆本邦を目するに倭國、又倭奴國を以てす、加之其事たる貢を彼に入るゝものたれば、賢くも、我　天降諸神の御所爲たらさるは當初の御謀慮に照しても明らかなることなり、其名を倭に借るものは、在筑紫の原人種なる如し、（倭に就ては自ら說あり、後文に說き分くべし）而して其記は論衡卷八によるに

周時、天下泰平、越裳獻白雉、倭人貢鬯草、（侯國篇）

又成王之時、越裳獻雉、倭人貢鬯云々（儒增篇）

の如し、以て讀者の參考に供ふ。

神武以降の非正史的交通

對朝鮮人　神武以降に於ては始めて崇神の朝、任那の歸化人及蘇那曷知の來朝となり、垂仁朝に新羅任那の干戈を交るに降し、任那の爲に兵を遣り、其三年に天日槍の歸化となり、百濟の功滿王は仲哀の八年歸化し、次で神功皇后振古無匹の女才を振はれ、三韓の征旅となり、甲冑に伏する六十日天寒うして軍を旋らし、年に八十艘の朝貢を入れしめたり、以來背叛常なく、其數凡十六次に及ふと云ふ、我國文學史の一時元を開ける漢學の輸入は百濟の阿直岐が應神の朝に來たるにあり、繼躰の五經博士欽明の醫下歷博士及佛教の傳來は皆記憶すべき一大事歷なりとす、

對支那本土　支那は其國舟楫の術早く行はれたる（支那舟楫術に就ては種々の說あり、黃帝の時に於てすと云ふもの、共殼貨狹始作舟と云ふを引き、貨狹は黃帝の臣にして、柳の一葉が蜘蛛の如くなるを乘せつゝ、水に浮ふより思ひつきて作り、帝に進む、故に舟は船に作ると云ふ說あれど、是れ學寬臆測に過ぎず、既に堯舜の古に於ても舟筏の發明なくして奚んぞ黃河の南北を支配するを得んや、載ち易の繫辭に黃帝堯舜垂衣裳而天下治蓋取乾坤刳木爲舟、剡木爲楫、舟楫之利以濟不通、以利天下、蓋取諸渙、云々久米邦武の說史學誌三、一八二）にも拘はらず、其我が日本に來航せしは西史紀元前三世紀本朝孝昭孝安の年代に、秦の除市不死の藥を求めて來りたるに始まるものゝ如し。

（秦）二十八年始皇東行郡縣、上鄒嶧山、立知頌、乃遂封泰山、梁父、遂方士徐市等入海求三神山不死藥、

文中の三神山は富士山を指すものとするは是れ富嶽絕巔三裂狀をなし、三神宿るが如きより附會したる歟、兎に角除市一行六百人、紀州海岸より上陸したりとの陳

迹は、埋骨の地として今尚同所に存すと云ふ。

下では垂仁景行仲哀の各朝倭の名義を以て彼に通使するものあり即ち

光武帝中元二年丁巳西春正月、倭國奉貢、使人自稱二太夫一、倭國之極南界也、光武賜二印綬一。（後漢書倭國傳）

又安帝永元年丁未、倭國王師外等獻　百六十人　（後漢書）

是れ彼の後漢王光武安帝の二朝にして、前者は本朝の垂仁朝、後者は景行朝、なりしものにて、通俗に之を以て通使の始めとなせども、垂仁朝のは筑紫の一名族の所爲と覺しく、景行朝のは以て本朝の正使と知るべし、蓋し倭奴――倭國の極南界となすものと、單に倭國王となすものと自ら區別あればなり、況んや光武の印綬を賜ふものは、西邊の一民族なること明かなるに於てをや。

斯の如くして景行の朝、我より先つ辭を卑うし腰を折て入貢せしもの、元本邦禮節を重んずるの國風に仗り、隣國の誼として此に出てたるなるべし、然るに彼れ由來名分亂離、到さ〳〵亂餘を承けて大義を正すの時ならず、何そ禮節の何物たるを知らん、偶、以て乘す〳〵きの機を與へ、侵畧の欲を擅にするの念慮をこそ起さしめたれ、一

片我好意に酬ゆるの赤心なく、却て驕傲不遜の言を吐き曰く、汝所在踰遠、乃遣使貢獻、是汝忠孝、我甚哀汝、今以汝爲親魏倭王云々、又曰く齎詔賜金帛なとゝ是より長く九五の尊をして一倭土王を以て遇せらるゝの轍に陷らしめたり、著者此條に至り於邑として深く祖宗の彼國情に迂なりしを嘆くこと久し。

こゝに其後神功皇后の攝政中に於ける通使三條を摘錄するに。

明年景初三年、倭女王遣二大夫難斗米等一詣二郡一求二詣二天子一朝獻上大守郡更遣レ吏得送詣中京都上也　（神功皇后三九年）

又正始元年遣二建忠校尉梯携等一奉二詔書印綬一詣二倭國一也　（神功皇后四十年）

又正始四年倭王復遣使大夫甲聲者、掖耶等八人上獻云々、　（以上日本書紀卷九、特に魏志より摘錄せしもの摘錄にかゝる）

以還允恭天皇以後の交通事歷を宋書より抄出せんに

武帝永初二年、詔曰、倭讚、萬里修貢、遠誠宜甄、可レ賜二爵位一。（允恭天皇十年）

又文帝元嘉二年、讚人遣二司馬曹達一奉表獻二方物一云々　（允恭天皇十四年）

以下倭國王濟珍興武の遣使貢物皆略す、（是れ自ら其年代に於て反正、允恭、安康、雄略の諸帝に配す）由是觀之、當時歷代略正交通の脈絡を斷たざりしを知るべく、崇神の朝其賤祚と共に銳意、物務開成、男女の調を定められたるが如き、其制を彼に取る所ありたるや必せり、而して

其記にも亦有海外之國自當歸伏などとあり、頗る往來の影象として認むるに足るものあり、此他仲哀帝の時魏國生口及斑布を贈りたる如き、應神帝の時吳國織縫女を獻したる如きは、史に讓り今此に贅せず。

註〔1〕倭之辯　倭が本史に關するや大なり、倭にして若し本邦を代表するにあらずとせば、公式上の通交は全く遣隋使を以て嚆矢とせざるべからず、日本書紀の意はこゝに存したるか如く、妹子以前に多少通交の幻影を捕捉す可らざるにあらずと雖、殊更魏志に云はくなどゝし、本文に記入せざるものは深く慮る所ありたるなり、先づ倭なる國號の起りより之を究むるに、玉篇に倭は从レ未从レ女从レ人とあり、單に本邦上古豐熟を意味するに止るべし、今人以て明瞭の意味ありとなすは必竟誤れり、然れともこゝに引證せられたる倭奴は勿論倭國と雖、單に當時の日本を代表するものとすべからざるなり、想ふに垂仁朝以還未だ征韓の議起らず、遡たる天地の間、唯我獨存、既に韓國あるを知らず、況んや漢土をや、殊に本朝は夫れ貴くも天照皇大神の裔を承け威德の隆六合に普きに貢を奉ずて外國に事ふるの謂れあるべからざるは既に論ずたるが如し、是れ多くは熊襲等のなす所たりしや疑ふべくもあらず、されば漢籍にも倭國はたゝ筑紫島のみに限れる號なりとあり、復た史記の世家を考ふるも吳の太伯の後熊襲の祖先たりと（日本人種論に引けり）いへば、祖國に臣隷するは理の當然なり、只自ら以て倭國王と稱し奉貢使を派するもの剛愎不埒僧むべきの至と謂ふべし、而して倭土の事は世の史家以て筑紫の怡土郡となし、又筑前の伊都縣となす、是れ天明四年、二月廿三日筑前國那珂郡より漢委奴國王とかきたる金印を掘出したるにて之を證し得るに至れり、（倭土はオナと訓で沖繩即ち琉球の事なるべしと云ふ說あり讀者思はざるべからず）こゝに又讃、珍、濟、武、の奉貢は譯の相類するの故を以て殷仲天皇以下五帝に配するものは牽强附會に過ぐるものとして抗論せざるべからずとするものあり、すべて是等はそのかみ韓國へまかりて其國の政をとりける日本府の卿などのわたくしのしわざなりとす云々、此說又或は信ずるに足らむ歟、

推古朝以來の正史的通使

隋の世　漢末僭擬叛亂、世は苅菰の如く、晉、宋、齊、梁、魏、並び國して交々爭奪せるの極、遂に隋主煬帝の一統する所となる、當時本朝推古の朝、小野妹子を使節として、鞍作の福利を以て通事と爲し、入て朝せしむ、隋主も亦裴世清を遣り其翌年妹子と俱に來り、國書進物を獻ぜしむ、其書の大意に曰く、己れ德化六合に覃被し遐邇等しく愛育す、然るに皇明（本朝の帝王を指す）海表に居り居庶を寧んず、境內融和、今朝貢を

修む毋疑の美、朕之を嘉す云々、而して厥后本朝再び大小の使を遣て報聘せしむ、其辭に、東天皇敬で西天皇に白すとあり、吾徒千載の下史を繙ひてこゝに及ぶ、當時の滯弱なる對外政策を想ふて、轉た今昔の感に堪へざるものあり、蓋し支那建國は本朝に先だつ二千有餘年、物質的文明に至りては固より本邦に凌駕すること數等、妹子等其技術の進歩を目擊し來りたるを以て、勢ひ尊崇の念慮を生せしや疑を容れず、終に、主客の位置を轉倒するの失躰を招きたるに外ならざるなり、以來通聘は頻繁に行はれ、學生僧侶踵を接して、彼國に往來せり。

隋より唐に移りて、舒明の朝、始めて大仁大上君三田耜、大仁藥師惠を大唐に遣はす、大唐高表仁を遣り、三田耜を送る云々、唐の隆興と共に新羅高麗我に附庸たるを屑しとせず、遂に欵を彼に送り、彼我の間を隔離し勢ひ干戈を以て爭ふことゝなり、我遠征軍士は齊明の朝癸亥の秋肅愼の野に、黃海の波に碧血を流したりしが、後天智天皇の朝、彼より劉德高等來聘、兩國修睦前に渝ることなかりき。

天智以來式によりて歷代遣唐使を發し、彼も亦獻物を致して朝貢す、是を以て一政廳を筑紫に建て、以て專ら外交の事務を綜べしむ、之を太宰府と命く、別に鴻臚館を起し外客を接伴する所とす、是れ畢竟外交の煩累を避くるの策にして、如何に當時彼我の往來が頻繁なりしかを知るに足らん。

斯の如く冲天の勢を以て進みたる交通は忽ち一頓沮滯するの不幸を觀るに至りぬ、之を唐末五代の亂とす、當時の宰相道眞痛く通使の不利を建議するに及び、遂に之を停む、是より宋朝に移り圓融の天元三年に至る凡八十二年間、絶えて斯邊の消息を得ず。

斯の如くして國朝と唐土の交通は、寛平の後、菅原道眞の奏議と共に公式上の通使は停みしも、商估の往來に至りては一層昌にして（當時但馬沖等に大船を見ること屢々なりしと但馬巻に見ゆ）唐物品の輸入あれば、朝野の縉紳爭ふて購買せりと云ふ、著者はこゝに唐代の交通が如何なる影響を與へしかを一筆せざるべからず。

學生の彼土に學術の研鑽をなしたるは其人に乏しからず、阿部仲麿下道眞備の如き又桑門の傳敎弘法は、本法天台眞言宗の宗祖にして、其名赫々たり、かく本邦に著しく彼土の文物を輸入し來りたるを以て朝典廷範一に彼に摸倣し、全く局面を一新せり、大寶令養老令の如き、皆此時に發布せらる、想ふに延喜天曆の隆を致せるも

の、其因を遠く茲に發する乎。

邦人の入宋　入宋は僧齎然に始まる、(天台の祖齎然入唐(宋を唐と云は此時の習也)六年にして歸朝釋迦線十六羅漢を從ふ、大臣公卿以下車を立てゝ奉拜す……云々(百練抄)然れども未だ公式上の通使なし、日本運上錄に三條の朝牒書到るとあれど定かならず、白河の朝には宋主神宗鳥羽の朝には徽宗、幷に物を獻し書を我に致して頻に修交を促せども、常に其辭倨傲なり、故に我應せず、時に贈酬して一日の偷安を貪るのみ、其通商に至りては大に行はれたるものゝ如し、殊に一條の寛弘年間には、宋商の留寓を許せしことあり、越前の敦賀、筑前の今津は當時の貿易港たり、平家全盛の時に及び、其極に達せり、清盛思へらく、宋國の貿易を起すは、國計を贍し、私榮を街する足ると、承安二年明州刺吏方物を獻せしを以て、喜んで之に贈酬し、別第を福原に興じて宋商を招き、法皇に乞ふて覽に供する等頗る斯業を勵せり。

(法皇(後白河)令レ向二福原山莊一給、宋人來着爲獻覽云々……(玉海)

斯の如きもの殆んと百年、忽ち大蹉跌を致し、遂に通商の發達を阻滯せしむ、洵に千秋の遺憾なり、そは史に傳ふ、建長二年(後深草)入宋貿易船は五艘の外置くべからず、速に破却せしむべしと、是れ其機先つ動くものにして、此制裁に出てたるの因は、何れにあるかを詳にせずと雖、當時蒙古、宋の北域に起り、我邊境を窺ふの兆あり、其前寶治年間に、西國の米穀渡唐を停止せらると云へるに思ひ合せは、自ら蒙古の膨脹を恐れ、此の禁制に出たるか如し。

蒙古　其主忽必烈に及ひ、國威内外に擴かり、西海に動く、即ち東朝鮮を呑み、西宋土を併せ餘威に乘して我日本を犯す、是より先き、高麗によりて、始めて我太宰府に、國書方物を奉り、以來三四回使者來朝せしも、幕府當時の執權北條時宗等、其倨傲無禮を憤り、或は斥け或は斬る、彼以て乘すべきの機となし、將に輸贏を多々羅の濱に決せんとす、茲に於て上下震駭、龜山、後深草の至尊を以て祈請宿禱旬日に亘り身を以て國難に代へんとするに至る。

嗚呼弘安の夏、多々羅の濱六十餘日、海波爲に腥く、四千の艨艟、十萬貔貅、空しく萬人塚唐人塚に名義を止め、南溟の潮風と消ゆ、げに勇ましきことの限りなれ、千歳の下、人をして徐ろに疇昔の感に堪えさらしむ。

此役の及ぶ所は吾國民をして彼の與みし易きを知らしめ、進んで商路を開き主動

の位置に立ち、彼は却て受動の位置となれり、平たく云へは我は切込太刀にして彼は受身となれり、斯の如くして主客の位置は顚倒せられたり、彼は頻りに戒懼して自由貿易を許さず、嘉元三年僧德見商船に乘し、四明に到る、元其内地に入るを拒む、然れとも彼れ延祐年間に及び始めて公然の通商を允すに至りければ、我も又後伏見の朝、足利直義の請により、船舶を元に通することを允せり、當時來往の繁思ふべきなり(天龍商船當時に始まる)

其弊の生する所倭寇たるものなり、紛爭葛藤常に絶えず、元亡ぶるの後明代に甚しく、義滿義敎の時、太祖朱元璋等屢々書を太宰府及び將軍に致し、修交を求むると共に倭寇の所爲を讓め、之を鎭定せんことを以てす、將軍日本國王に封するとの書を受け、歡んて鎭壓の事に從ひ、探題等と共に海賊を捕へて明に護送し、天下後世の笑を貽したるも是時にありき。

足利氏の衰世に及ては邦人貿易の利多きを知り、通商大に行はれ、義澄以下遣明使を派すし、御柏原(百三世)の朝遣明船を派せしむ、明帝武宗、金牌を鑄て勘合に給す、勘合符を以て交通することと此に始まる、當時又八幡(ハタン)船なるものあり、是れ邊民船舶の旗章に八幡宮の三字を書し抄掠のことに從ふ、外人頗る畏怖すと云ふ、是時に當り歐洲にてはコロンブス始めて亞米利加を發見し、東洋に拓殖貿易を企つるあり、本邦の外交是より稍々紛雜を極めぬ。

織田氏豐臣氏の時に及び朝鮮を介して多少の交渉あり、然れとも信長は寧ろ消極政策を持し、屢々勘合印なと受けたるも斷て應せす、秀吉に至りては通商は固より之を拒む限りにあらす、機の乘すべきあらば以て大明を席卷せんとするの野心あり、何んぞ區々の貿易を謂はん、其大抱負は彼の公言によりて知るべし、曰く、

「秀吉齡つまり此事(隆景の韓境を踏て大明に攻入る事)の中に病死候とも、秀次を大將とし是非共大明に取掛るべし、其時は我亡魂神となりて黑雲に乘り鐵の楯を突て、大明四百餘州の奴原を一々蹴殺さんと掌の内にあり、夫より天竺を切平け道さへあらば、地獄極樂迄も御手に入れ、牛頭馬頭の者共も御成敗十萬億土の阿彌陀如來閻魔大王も日本へ御禮させん云々」

德川氏に至りては琉球を介して使者往來せり、家光の時に及んては明は滿族の侵掠に逢ひ、皇帝崇禎南方に流寓す、鄭芝龍か平戸に歸化したるは此時にあり、斯

る故に交通既に絶ゆること久し、滿州康熙帝の即位は我後西院天皇(百十世)の寛文二年、四代將軍家綱の時とす。

次て綱吉我物産足らず、金銀の外出紀極なきを患ひ、清船八十艘或は九十艘或は三十艘に限りたるも、何分廣濶無際の海上欲穴塞き難く、却て密輸出を増し就中銅の輸出は巨額に達せり、想ふに中井積善か、其著逸史及ひ草茅危言に銅輸出を痛慨せしもの蓋此際の事を指すか。

王政復古明治聖帝踐祚ましゝてより、外國と和親を結び、清には伊達宗城を遣して條約を交換し了る、次て征臺の事に坐し、清、違言あり全權辨理大臣大久保利通、北京に論辯し無事局を結ぶ、明治十七年に及び朝鮮の騷亂より、日清交渉の端を開き、伊藤博文、西鄕從道は明年を以て天津に李鴻章と會し、東洋の治安策を諾る之を天津條約と云ふ、豈圖らん明治二十七年六月再び朝鮮東徒の事より、和親破れ、海陸に相鬩ぐ、寔に振古未聞の大事なり、李鴻章老軀を提げて馬關に來り和を請ふ、約成る、以上は我日本の西海岸に於て、東洋諸國と交通せる梗概なりとす。

〔1〕倭寇　なるものは或は九州の少貳大友、菊地等大内氏に破られ部下亡命の客の所爲に出つるなりと云ふ、然れとも單に之に止らす、年代を攻ふるに是れ恰も彼の元亡滅の當時に相當すれは、亡臣我海賊、或は商船織徒に投し、共に僧に此所爲に出てしや明かなり、而して彼等か漂掠に從ひたるの地は、要するに山東省附近にありしか如し(明治廿八年三月征清軍牛莊占領の時近際のものなる日本人の古墳は或は此在に發見したるものならんと云ふ)

至元廿九年日本舟至四明求互市舟中甲仗皆具……(元史太祖本紀)

德治元年元の慶元路に往て貿易す……(靖方策源)

元中八年渡邊民明の電州を侵す……(清方策源)

四明慶元路、電州と云ふ皆浙東、山東省附近の地名とす以て推すに足る、然れともこゝに南海治亂記によるに伊豫の能島來島院島の氏族大明浙江、閩廣の諸州を掠め、積歲不除して居住せしか、水軍に破られ退去し勦きぬ、云々とあり山東附近にも限らさりしか如し、

第四論　何故に日本人種は歐羅巴人の來るを俟たず自ら進みて歐羅巴人の門を叩かざりしや

扶桑國は墨西哥附近なりとの說

東亞細亞の民族が閣龍の亞米利加發見に先たつこと約一千年、既に其地を蹈み剩さへ士着の民をなせりとは、是れ西曆紀元四百五十八年宋國一沙門の慧深が單身孤劍、初めて扶桑國に入ると云ふに胚胎せる說なり、斯說をなすものゝ論要は迺ち扶桑國を以て我日本國を指すにあらずして、全く南米洲の墨西哥を指すと云ふに在り、其論據とする所は扶桑木其他動植の解說に在りと雖も、文獻通考本紀[1]に扶桑國は支那を去る東に二萬里[2]とせる里程は、就中好論據を與へたるものとす。

此の一大奇說の旗揚げは、佛のゲヂー(Gignay)氏にして、今より百餘年前即ち一八六一年、氏が亞細亞歷史の編輯中に、支那の史籍より扶桑の文字を得て、是れ今の墨西哥を指すものなるべしと按定したるに創まる、之に先ちブアシエイは一七五三年巴里に於て一論文を出し、耶蘇紀元四百五十八年中今のカリフオルニヤの海岸に扶桑と名づくる支那の植民地ありしことを論せしがベラベイ(paravey)ペレズ(pere ロ)ゴドロン(Godlon)アイヒサル(D'eichthal)ロブシード(lobshied)リガマン(Newman)に至るまで多少ゲヂーの扶桑論を潤飾敷衍せり、後ち一八八五年ベイニングの「名もなき閣龍」(An inglovious Columbus)出で論證の明快なるが爲め、殆と今は疑ふべからざるの事實となれり。

既に古くよりバフオン(Baffon)及フムボルド(Humbold)等の如きは偖に墨西哥及亞細亞の文明類似の點あるを說き、古代多少の交通なからざるべからずとするや年あり、米人レランド(Leland)か一八五〇年紐育の「チカッルボッカル」雜誌に斯問題に關する以上の沿革を詳述し、扶桑論なる表題の下に明らかに斯事實を證定し、頗る世人の視線を集中せしめたる折柄、前記のベイニングの大著出づ、假令フラブロート(一八三一年サムプソン(Sampson)ブレシナイデル(Breschneider)輩が、數千言の駁說を以てすと雖、其勢力たるや至て微なり、歐米學者社會、斯說に對する言論の趨勢斯の如し、著者も亦扶桑に就き聊かの見解なきにしもあらずと雖、扶桑の日本なると墨西哥なるとは本論の關する所にあらざれば敢て喋々せず、惟著者は言論の趨勢

や斯の如く、一般に歐米の學者が、米亞の間に於いて古代の交通を認めしを悅ぶのみ。

註〔1〕扶桑國考、齊永元元年、其國有沙門慧深、來至荊州說云、扶桑在大漢國東二萬餘里、地在中國之東、其土多扶桑、故以爲名、扶桑葉似桐、初生如筍、國人食之、實如梨而赤、綴其皮爲布、以爲衣、亦以爲錦、無城郭、有文字、以扶桑皮爲紙、無甲兵、不攻戰、其國法有南北獄、犯輕者入南獄、罪重者入北獄、有赦即投南獄、不赦北獄、在北獄者、男女相配、生男八歲爲奴、女九歲爲婢、犯罪之身至死不出、貴人有罪國人大會坐罪人對之宴飲、分訣若死別焉、以灰覩之其一重則一身屏退、二重即及子孫、三重者則及七世、各國王爲乙祁、貴人第一者爲對盧、第二者爲小對盧、第三者爲納咄沙、國王行有鼓角導從、其衣色隨年改易、甲乙青、丙丁赤、戊己黃、庚辛白、壬癸黑、有馬車牛車鹿車、國人養鹿、以乳爲酪、有赤梨、經年不壞、多蒲桃、無鐵有銅、不貴金銀、婚姻則壻往女家、門外作家、晨夕灑掃、經年而女不悅即逐之、相悅乃成婚、舊無佛法、宋大明二年罽賓國有比丘五人遊行其國、流通佛法經像、風俗遂改、

〔2〕支那十里＝日本一里＝英三里（三分ノ一英哩説）…クラプロート
仝二十里＝仝＝仝（十分ノ一英哩説）…オッペルト

此里程によりて打算せば自ら悟る所あらん今更に李洲の四方里説を示す

李洲は紀元七世紀代の支那の史家なりとす

遼東ヨリ日本ニ至ル……一万二千支那里）

日本ヨリ女眞（蝦夷）……千仝里
女眞ヨリ堪察加迄……五千仝里　四万四千里
堪察加ヨリ扶桑ニ至ル……二万仝里

亞米利加の原人は亞細亞殊に日本より至れりとの說

南及北に於ける亞米利加の原人問題は、史家の研究至て罕に、有名なる米史家ベンクロフト(Bancroft)の如きも之を冷淡視去り、人の絕えて知るものなかりしが、一八七六年モルガン(Morgan)の「ノース、アメリカ、レビユー」に物したる一論文とダーウイン(Dawin)の種源論とは著しく世の視線を引く所となり、原人問題に一線の光明を導けり、即ち高尙なる「アステック」民族、野卑なる「エスキモー」「インヂアン」の各原人種に對するの議論は一段の歩を進めたり、後ちヒーギンソン(Higinson)〔1〕等の出つるや、亞米利加の原人は全く亞細亞、殊に日本より移住したるの形跡ありと論定するに至れり、氏等の論に云はく、日米間の地理的連鎖は寧ろ英國の歐陸に對する關係よりも密着なるものにして、よしベーリング海峽は英吉利海峽よりは廣しとするも其航路上の難易は之を問はずして知るべく、況んや一年の間はベーリングは氷結

するの便利なるをや云々。

今米國の植物學者グレー(Gray)[2]の説く所によれば、日本の植物名譜は米國の植物名譜と相類し、全く西陸は前代相接續したるものなるべしと、植物分布の關係既に斯の如し、地質學上の證定は既に前章に數言を陳じたれば明なり、新渡戸氏が「アラスカ」に日本人の大血種を存すと云ふ、蓋し偶然にあらず。

印甸地方に於ける日本人居住の古跡に就ては、千百只ならざるものゝ如く、其關係の深き自ら分明にしてロブシードの如きは言語學上より確説せりと雖、私かに公言を憚るものゝ如し、唯著者の如きは印甸間に今日存する所の口碑に鑑み、明かに其人種の日本邊より至れるものたるを推知するのみ、口碑に傳ふ。

自分等は皆て遙かに西方の陸に住ひたるが、祖先の時代に此地に來りたるなりと、……(印甸一種「アサパカス」Athapcous の口碑)

自分等は他の惡人種の居住せる他の陸に住ひしが、遂に其の追ふ所となり狹き湖水を辿りし(其湖水は淺くして多くの小嶋あり)途に氷及雪の塊に出會ひ困難を極めたり云々(某史家曰く是れ恐らくはベーリングならんと)……(同チエペーウエーアンケ」(Chepeweyang の口碑)

「アイヌ」以前北海道に住みたる「コロポックル」は全然北方に隱匿せりと傳ふるに對し、北米には印甸以前、土窟に住ひたる民族[3]ありたりと云へり、是れ固より「コロポックル」にあらず、亦「アイノ」の如き人種にあらざるべしと雖、此間豈に多少の關係なきを得んや。

以上二節説くが如んば米亞の通交は、寧ろ自然的と云ふへし、故に今先づ本論に入るに先ち自然が米亞の通交を促す狀況は何れにあるかを説かんとす。

[1] Higginson's Hist. of the Us. p.5

[2] prof. Gray. Darwiniana. P.221

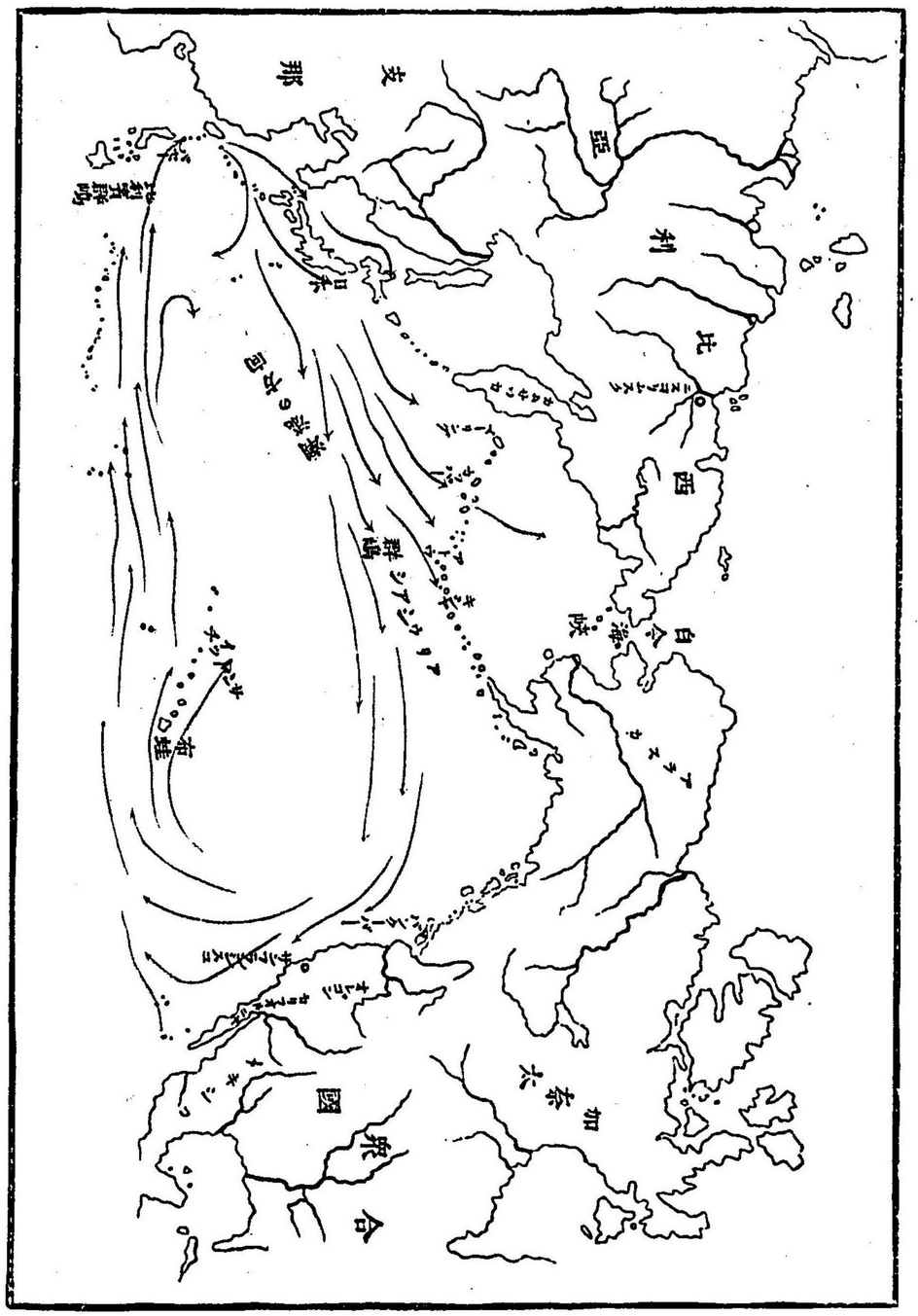
[3] Nitobe's Intercourse Betwen U.S. and japan. p.4.

[4] フォークス曰く此土窟民族は一般に印甸の祖先となせど其技術の優れる點に至りては印甸の及ぶ所にあらず依て按ずるに是れ蠻四哥の「ペブルー印甸」なるべく其來るや必ずや日本よりしたるものにあらずやと

リード亦云ふく土窟の狀態には其種類一ならざるものゝ如く(著者土窟の古圖を見るに「アイヌ」の小屋掛に類するものあるを覺ゆ)且つ古くより存在したるべく現在オハイオ州に在る穴中には八百の年齢を有する古木生ぜり、而して此民族は全くエゲプト及印度より來りたるものとの説あり其北米に來れるは蠻四哥又は中米よりしたるべし後北方より來りたる印甸の壓倒する所となつて滅族す云々

第一狀況　地理的連鎖

案に凭て渾球儀を審査すれば、米大陸は太平洋を挾んで積水萬里東西に相對峙すと雖、其極に近くに及ては其距離漸く接近し、竟にオコツク海に進めば兩大陸は地理的連鎖を以て相繫がるを觀む、凡そ地學者の云ふ所を以てすれば、太古亞米利加と亞細亞は北太洋に於て相連續したりしに、ベーリング(Behling)海峽をなしたるは全く後近古紀氷時代の異變なりと、之を以て推すときはアリウシアン(Aleutian)及千島群島は其根迹を止むる者にして、點々連鎖をなし、波濤を縫ふて出沒せり、這般の連鎖群島間の通航に於ては土人の小舟尙之を能くし、更に困難を感ぜずとは是獨り地圖上の談話に止まらず、米の北極探檢隊より少佐ペークレー、クンノン氏(Bauby Kannon)の齎らしたる報告に確にして、ベンイロフト氏も亦實地をベーリング海峽に於て目擊したりき、キャプテン、コクラン(Captain Coolan)も米大陸の土人(Kaniaks)と亞細亞の一都ニシニイコリムスク(Nij imii Kolimsk)に於て邂逅し、始めて彼等の自由に相往來する事を知れりと、今假りにモルカンの說を借りて北米より亞細亞に來る連鎖上の順序を質すに、アラスカ(Alaska)の北方に續を解かんか須臾に



してキシヤ島(Amchika)に達すべく、夫よりアトウ島(Attou)まで最長距離にして一百里を出てず、アトウ島とカムチヤツカの間にはカツパー(Cappar)及ベーリング(Behring)の二小島あり、アトウより之に達するは二百里にして之より堪察加を經て、亞大陸に入る一百里のみ』と、以て通交の容易なるを知るべく、大古以來漁艇小舟の類が相往來したりしは、宜しく其所なべし。

〔1〕 Leland's Fusang(1875)

〔2〕 Narative of pedestrian journey(1824)

第二狀況　潮流の運動〔1〕

彼の日本の南岸太平洋面に黑潮(又名ジヤパン流)となり、同しく北米の西岸太平洋面に於てカリホルニヤ流となる所の幅一百里内外なる二條の海流は、是れ其源隨風皮流に起り、北緯九度と二十度の間に於て西方に流れ、ヒリピン(Philipine)群島に達して、其方向北に轉じ、東經百二十五度圈と北緯二十一度の邊なるベシー島(Bashee)の近傍海上、臺灣と呂宋との間に至りて、始めて成形自流となるべし、之より臺灣の東岸に沿ひ、東北に向て流れ、東方に轉じて、北緯二十六度、東經百二十五度の處に達し、

一支流を出して日本海に入るものあり、其本流は大隅海峽を經て、四國の南岸を洗ふて、伊豆七島に出で、所謂黑潮川を作り、犬吠崎を經て北折し、北緯三十六度三十分の邊に於て親潮と衝突し、東に向て走れり、後北緯三十八度東經百二十五度の邊に至て再びカムチヤツカ(Kamshatka)海流なる一小支流を出せり、其本流は但し猛進直駛、北米の西北隅に達し、オンゴン(Oregon)カリフオルニアの沿岸を洗ふて下り、赤道流となりて布哇の南方を通過して、再び比利賓に歸る、凡そこの一大暖流も亦遲般二大陸通交の上に一大便益を與ふるものにあらざるなきを得んや、セラー[2]も云へり、日本及支那の船隻、其他の漂流物が一朝此流に入る時は、自ら亞米利加に持ち來さるべしと、これ必ずしもクルセンテルン(Krusentern)及コセブ(Kogebue)の說を俟て然る後に知らざる也。

註 [1] 矢津昌永氏日本地文學及ヒ Geikie's phisical Glography.

[2] nature and Man in America, p117

第三狀況　風の方向[1]

我國の地形たる、東南は茫にして、黑潮の暖流ある太平洋に臨み、水面多量の蒸發氣を昇騰せしめ、氣壓をして著しく低降せしめ、大氣の塡塞流入あらんことを待つに際し、一般北半球に於て其影響を被れる亞細亞大陸は、殊に冬間、其氣壓最高にして忽ちこの低氣壓面に向て馳せ、此に西風若くは北西風をなし、遠く洋海面を亘りて米州にまで吹き去るべし、此風向は日本の最多風位として知られたるものなり、之に加ふるに、時々支那海に於て起る所の有名なる「タイフン」(Tayfoon)と稱する颶風あり、今其原因を究明するに、香港に於ける觀象臺長ドハルク氏が觀測によれば、此颶風は擺線的に旋動するものにして起點は北部太平洋の遙空即ちフイリツピン島の東部若くは南東部にして、空氣の乾燥溫度の增進に原づき、凡そ一時間八九哩內外の速力を齎らして吹奔する所のものたり、其風位は多く、東西若くは西にして、彼のモスマン氏の如きは此種の「タイフン」を以て、日本人がカリホルニアに漂遊したることを說て止まず。

註 [1] 矢津昌永氏日本地文學及ヒ Geikie's phisical Geogruphy

一、日本人米州に漂流及漂着の事實

合衆國の海岸及陸地測量局のジヨーゼフ、ダウイン氏が我水路部長肝付兼行氏に宛て送りたる海圖及蝦塊に付せる說明書によりて見れば太平洋海岸の

未だ歐人に領せられざる以前に日本の船、水手及密蟻を搭載せる船、遠海に打揚げられ其水手は救助を得たれども皆奴隷に賣られ蟻は海岸に多量に殘存せしが近來は極めて罕に見ることゝなれり、又其後も數回の漂着ありて一八三三年のもの最近き趣き記載せり、其蟻塊を見るに外部は黑色を以て被色せらるゝ雖内部は普通の蟻なり猶此外に大蟻燭數箇を拾ひ得たることありて全く日本人漂着せしに相違なしと云ふ（地學雜誌七集七十五卷）

二、日本船クリール群島のキタイに於て破船せり　History de Kamtchatka

三、日本船は多く黑潮の爲にアリウシアン群島に漂泊せしこと屢々なり現に一八七一年此事あり（Les Aleoutes et Leur Origine. Oreland monthly に網羅せり云々　新渡戸氏 Intercourse bet. U. s. Japan.）

四、日本船が北米漂寓のことを記すは

五、往年鹽湖の鎖蓋にて將校等が印甸人の骨相言語風俗器物等に賭し日本人の漂流して黑潮川の潮流につれ此地に流着したるものなりとしたるは實らしし（久米氏はそは廟愼人なりとて取り合はざりしと云ふ）（史學雜誌三號史海十八號、米歐回覽實記）

六、ヂョンストンの云ふ所によれば一八五九年一行が日本に來る時便乘したる船客の中にヂョセフ、ヘコ（彦）なるものあり今八年目にて本國日本に歸省するを見たりと是れ何れの國かの漁夫なりしが一八五一年に於て大洋に吹き流され後米國サンフランシスコに漂着したるを以てレバリー、サンダーとなん云へる君の厄介になり後ち英語に通ト商議所の職員をなしたること…（Johnston's China and Japan p.224.）

七、第仁孝天皇に年四月米人越中の漂民を救ふ

八、後四院天皇明暦三年我民亞米利加に漂着するものあり

九、日本小舟がカリフォルニア沿岸に漂着するは平均一年一回とす（C.W. Brooks in Bancroft. vol.v.p.51.）

航海術は疇昔東洋に於て大進歩をなしたる事

米亞間の通交を促す自然的狀況は既に然り、然るに亦東洋民族は疇昔航海術に於て大進歩をなしたるの事實を認められんとす、著者は此條に至りて轉た過去時代に於て日本民族が大雄飛の時機ありしを追想して止む能はず。

一般東洋民族が航海術に於て早く老熟の域に達したるの源因種々ありと雖唯一斯道の利器羅針盤の發見早かりしに歸せざるべからず、「マグネシヤ」と稱する名稱の如きも亞細亞洲の某地に於ける磁石產地の地名なりしと云ふにても其由來の古きを知るべく、故にダルデー（Duhalde）[1]は基督降誕以前殆ど千年、支那にては大陸

内の旅行に磁針器を用ひたりと云ひ、フムボルト[3]は又コロンベス以前四百年、始めて支那にて磁針を絲に懸垂して、其特異を利用したりと云ひ、ルヂベストマナス(Ludi Vestomanus)は一五〇〇年代に於て、既に東印度に於て今日歐洲に便用せらるゝ如き、最完全の磁針器を見たりと云ふ、各其云ふ所と見る所異なりと雖、東洋民族の磁針器を知ること早かりしを、徴するに足る、蓋し印度及支那が磁針を使用したる曉あれば、他の東洋民族、殊に海國的民族なる日本民族が、其使用に預りたる夕あるべき事情は、前章亦既に述ぶる如し。

回顧すれば、歐洲に於ては、十三世紀の末、ギルベーア(Gilbart)の云ふ所によれば、一二六〇年代に於て亞細亞より磁針器を傳習し、歐洲の航海術は殆ど端倪すへからざる程の大進歩をなし、忽ちコロンベスが航海上の試驗用として磁針に依據するを見るに至り彼が如き大發見を成就したり、是を以て觀れば、少くとも三四百年以前に、この一大利器に接觸し、且つ其應用に通じたる東洋民族が、航海上の進歩も亦端倪すべからざるものありしなるべく、取も直さずコロンベスを出すべき境遇は、東洋に於ては、西洋よりも三四百年乃至一千年以前に、上帝より享受したるものと謂はざるへからず、然らばコロンベスが米土に入るに先たす、先つ東洋民族が米土に入りたりと云ふ說の如きは、理に於て寔に睹易きものとせざるべからず。

[1] Duhalde's Historical, Geographical Descript. of china

[2] 氏は獨の哲學者にして晩年亞細亞及亞米利加を遍歷し蠻民の言語を研究せしが此說の如きは其當時に出でたるものとす

東洋民族中、日本民族は航海術に於て一日の長たらさる可らず

東洋民族として其何國民が航海術に於て最高進歩を制し、疇昔米土に入るの佐々木高綱たりしやは一疑問なるべし、思ふに此議論を解釋せんとするには、何國民が宜しく佐々木高綱たるべき要素を具有するかを知らば乃ち足らむ、日本四面環海の國也、舟楫の術は遠古より起りし事は、嘗て前論を以て解說を與へたり、是れ磁針器其物の使用に於ても他の東亞民族より便利なる地勢を有すればなり、佛のゲチー云へるあり、日本人は一般技術に於て東洋の他民族間に一頭地を拔ひて起つものにして、航海術の如きは殊に其長所たるべし、故に古代より自國の北方に國する

ものに留意せりケンファー(Kambfer)が日本在留の時、其國人の描きたるカムサツカ方面の古代圖を見たり、其圖の示す所に據れば、亞米利加と對向せる東海岸に於て方形の灣あり、灣内に小島あり、其北位亦一島ありて東西兩端は兩大陸の相近接せる有樣を巧妙に寫出せりとは、豈に驚くべき事ならずや、云々

遡たる遠古に溯て追究するも、日本の所謂天降民族は到底大航海の難苦を舐め千里の波濤を凌ひで斯國に來られたるを知る、凡そ天降民族の本國高天原と近縁ある馬來地方の民族は、振古に於て最勇敢、最冒險の海國人種にして、西は亞米利加マダカスカルより南は印度洋の諸島に至り、北はペーリング海峽に達し、當時の彼等は今日の大觀列嶺の如く、殆ど其の船を浮べざる所なかりしとはベイニングが說く所なり、よしトエニッチ、ビッカーリングの云ふ如く、風俗習慣の上より日本人種は馬來人種を容れたりとせざるも、天降渡來の民族が其の天降の途筋に於て、或は馬來人種と接觸し、此等の特技を會得して、永く航海民族たるの標榜を掲げたるならん。殊に航海術の如きは其の國土の氣候と位置とに關し、北方の寒國凍結の患ある所に萠發すべからざるなり、故に一般に南洋人種は北方人種より遙かに航海術に長けたるを常とす泰西に於ても フヒニシヤ人は地中海を航海して通商貿易をなし、東亞の南洋人種と相接觸したるものありとの根迹は、印度の梵語がフヒニシヤの文字に類するを以て知るべし。

オスボルン曰く日本民族が航海術の特技を以て支那印度の近海に跳梁し、至る所に殖民を樹てたる如く、彼等は遙か南洋なるサンドイッチ(Sandwich)及ゼオグアン(Geogian)のカナカ土人と風俗習慣の相似たるものあるは、其の殖民の後裔を遺すの故なるべく、且つ馬來群島に住する馬來人種の航海上の冒險勇敢は、日本人種と同一血族たらざるべからず、要するに、彼等は潮流と風向とに乘じ、太平洋を縱横に蹈躙したる跡あり云々、以て其如何に日本民族を以て航海術に一日の長ありとなすかを測知すべし。

註〔1〕フランツボップ及フンボルト曰く印度の「サンスクリット」語は南洋各地に入り今日其根迹あり又爪哇に婆羅門教徒が早く移住しマダカスカルニュージーランド島にも印度人古代移住せしことあり

〔2〕Osborn's Japanese Fragments P26.27.

日本人は振古果して米國殊に墨西哥に入りしか[1]

日本民族が振古以來航海術に於て他の東洋諸國間に一日の長として米土に入るべき佐々木高綱の月桂冠を戴くの要素具さに備はれるを見る、此に於てニユマン、ペレズは忽ち日本民族米國に入れりとの説を樹立したり、ニユマン[2]はケンファーの日本歴史を引て論じて曰く、日本の小舟が偶然にも亞米利加を發見せしとは事實にして日本民族の口碑にも、今日の米大陸は北西に擴がれりなど云ふにても知るべし、而して其小舟探檢の一行はカリフオルニア附近に冬籠をなし、遠くアラスカの山野を跋渉して歸國すと、ペレズ[3]も曰く、日本人が先づ米土に入るや、恰も歐人が米陸發見の際故國の都市名に因み、ニユーヨーク、(Newyork)ニユーオルレアンス(Neworleans)ニユーブランスウイーク(Newbranswick)と命名したる如く、日本人も墨西哥に於て其の故國の都府大阪に因み、命名せし(Oaxacu)[4]なる一大都邑今尚存せり。

日本の十二干支は固より支那より來り、支那の十二干支は印度より來たり、印度十二干支は大集經の説より十二獸に配當せしものなれば、隨て五つ目の寅は獅子なりしを支那に獅子なきを以て寅と改めたるもの、日本に來りて依然存せり[5]今フム

（第四圖）物鑄の所るせ存殘にヤマ國ンタカユ加利米亞央中
（る知をるた人本日てに貌面及び東具）

ホルト氏の墨國十二干支を見るに、彼我の間異同なきにしもあらずと雖、寅は同じく存在せり、是れ支那或は日本の躰を傳襲するものたらさるべからず、然らば寧ろ支那と云はんよりは日本より傳はり日墨交通上の一證として認むべきを知る。

レノイアー(M.lenoir)は、墨西哥産の壺[6]の類にて綠色又は黑色なるものと花崗石にて作られたる奇怪至極の模樣を置きたるものは、全く日本の青石製の磁器と分別すべからずと云へり、レノイアーは亦其の友人たるベラテル(Baradere)が己れの所有せる日本磁器を見て墨西哥博物館にて見しものと見違へたりと云ふより、益々日本と墨國との民族が古代に於て相往來したるを確かめたりと云へり、[7]其他今日墨西哥のユカタン(Yucatan)附近に多く散見する所の佛像彫刻等は東洋民族の遺物たるは何人も疑はさる所にしてアイヒサル、ニユマンは其地の宮殿に實藏せらる

る鎧兜の類は全く日本人の細工なることを斷定したり。

此に讀者をして尤も驚嘆せしむるはテルノー(Ternaux)一輩[8]の所論なりとす、氏等は云ふ、今日米洲に在る「トルテック」(Toltecs)人種は全く日本より海を濟りて來りたるものにして、始めヅラ川(Gila)に近き墨西哥の北西岸に於て上陸したる者の如し、

今日存する「モニュメント」と稱する建築は其の遺跡なりと、又云ふ譯て宣教師が羅馬に伴ひたる日本人と云ひしものを墨西哥に於て目擊せり、乃ち日本人の風俗習慣は全く「トルテック」人種と異なるところなきものなり、されば全く「コンテマラ」(Guatemala)及「ユカタン」(Yucatan)の紀念建築の如きは其實「トルテック」人の經營保存したるものたるべし、今や日本人が紀元前五世紀の頃米洲に渡航したるは爭ふべからざるの事實なりと云へり。(Antiquities [illegible])

著者思ふに凡そ一定の國域内に於て養成せられたる民族は其の移住的國土の變更ありと雖、永く其特有の人種的標徴(Race characteristic)を放棄する者にあらざるは學者の等しく承認する所にして、是れ恰も以太利及西班牙の「ゴス」民族が尚今日に於て祖先の血種の滅却せざる如き、「ムーア」「ハン」「タタル」は其創始國土を去て諸方に散逸せりと雖尚舊風の追跡すべきものあり、今亞米利加の國土が民族の創生國土にあらざる以上は他より移り來りたるものあらざるべからず、隨て今日其民族間に尤も移住的好適狀況を具有せる日本民族の人種的標徴を存すと云ふは頗る理あり、故に單に「トルテック」と云はず、斯種の形迹が他の在米人種間に捕捉せらるゝことを信ず、テルノ氏輩の所論に次で一八三五年巴里に於て刊行されたる二三の奇言は「ポコタ」平原の土人「ムスカ」人の原語は全く日本の國語と相類するものありと云へり。(Ancient [illegible])

是と相俟て說をなすものは曰く、英領「コロンビア」に住する「ナイアッシ」と云ふる土人の狀貌酷く我日本國人に似たりと、之と同時に近年晩香坡に於ては日本の甲冑に類するものを堀出したることあり、又英領閑龍比亞の「ヒヤクトリア」市に於て工夫井を堀りしに地下凡そ四寸の所にて、日本古代の鎖衣一領を得たり、其鎖衣は鉛筆の長さ程の鐵鎖數多より組成せるものにして、頭より裾まで其丈廿一吋半(我一尺七寸三分)其二袖は又物にて切られたりと覺しき二吋(一寸六分)程の痕ありて、銀に鑄べり、此鎖衣は二三百年前の製造たりと雖、此地にあるの由來は之を知る者なし、而して此近傍にも日本古代の住家と思はしき證跡數多あり、現に數年前にも日本古代の貨幣を石塚及墳墓より發見したりと、尤も此等の證跡は決して日本北方人種の移住を徵するに足るものとせずと雖、渡邊修二郎氏の云ふ如く、墨西哥航路に日本人が開きたる一の殖民地と見るか、又夫より以前殊更に此地に渡航したる日

本人なりしやを保せず。

今や此節を去るに臨み、墨西哥[10]の建國者が日本人なりと云ふ說に附加して、モスマン氏の最新說を述べて其事を實にせんと欲す、モスマン氏曰く凡そ日本人が東洋の大不列巔を以て自ら居り、一大海軍國たるの實名を揚げたるもの、其由來も蓋し古きなり、ソハ此民族は常に潮流及大風の作用にて積水萬里の米大國に漂着して既に其歸路を失ひ、遂に此勇敢なる海國民の事として相據て以て墨西哥王國、即ち近代に其名聞えたる一王國モテクズマの建立者なりとは何人も疑はざる所にして西班牙の墨西哥討伐隊長コルテス(Cortes)が此國に入りし時、國王はコルテスに對ひて、其幕下の名臣は皆其祖先の國たる遙かに西方の陸より聘する所なりと云へりと、サレバ日本人コソ宜しく最初の亞米利加發見者にして且つ其建國者たるべし、今日に於てもカリフオルニア及メキシコの土着民族の子孫は依然其祖先日本より漂着したるものたることを口碑に傳へて忘れずと云ふ、嗚呼日本國や竟に米國に民を植ゆるの卒先者たり、亦盛なりと謂ふべし云々。

明治維新に先つ數年、勝麟太郎が幕府の軍艦咸臨丸を操縱し、始めて米國桑港より歸航するや、公使ハリス氏は米國政府に書狀を飛ばして曰く、是れ實に亞細亞人の太平洋を横斷せる嚆矢なり、日本國人有爲の氣象掬すべしと、嗚呼是れ何等の嘆言ぞや、ハリスをして著者の說を聞かしめば、擊して而して慙せむ。

註 [1] 日本人説古墨國に入りたりと云ふ說に確信を置かしむるの力あるものは彼我の間に行はるゝ迷信及習俗の類似にありとす、例えば賓客の早く去ちんことを望むときは鹽の三粒を机下に置き箒を戸に立てかけるが如き同一の迷信行はるゝ。Scribner's Magazine, p.350.

[2] Zeitschrift für Allgemeine Erd-kunde.

[3] Revue Orientale et Americaine.

[4] メルトレベンの國民地圖には Onfaca に作る尙一層近きを知らん其位置は北緯十七度西徑九十七度五分。

[5] 法苑珠林 四十號

日墨十二干支の對照

	日本干支	墨國	水海經物	日本干支	墨國	總黃道
[1]	子	Atl	寅	午	Acatl	申
[2]	丑	cipactli	卯	未	Tecpatl	酉
[3]	寅	Ocelotle	辰	申	Ollin	戌
[4]	卯	Tochtli	巳	酉	Otomatli	亥
[5]	辰	cohuatl	午	戌	Ouauhtli	子
[6]	巳	Acatl	未	亥	Ttacuiutli	丑
[7]	午	Tecpatl	申	子	Calli	寅
[8]	未	Ollin	酉	丑		
[9]	申	Otomatli	戌	寅		
[10]	酉	Ouauhtli	亥	卯		
[11]	戌	Ttacuiutli	子	辰		
[12]	亥	Calli	丑	巳		

〔6〕フランク氏此説ありと云へり。

〔7〕Pallebedes Anciens monument, mexicans avec ceuxd L'ejypte Se L. Ende.

〔8〕Pernaux's History chichimecas.

〔 〕世界に於ける日本人　一七二頁、一七五頁

〔10〕墨西哥國雜記

〔11〕一、口碑　墨國古代の口碑に付ては之を窺知すること頗難し只其創世紀の口碑的理想は今日[illegible]の「クイック」王國にて廣く行はるゝ一書ポーポル、ブー(popol-Vuh)に[illegible]記されたる口碑に依らざる可らず、此書は[illegible]○年キシメチズの[illegible]にかゝりシユールセルか一八五七年澳國にて刊行したる者及一八六[illegible]年巴里刊行の Brasseur De Bourbonry にあり就て見るに其始め四方に限界ある天のみありき雖未だ物體の存在を見ず隨て空虚中會はんとして會ふ者なく離れんとして離るゝものなし即ち聲なく響なく極めて靜謐只混沌たる暗界に靜謐なる海ありしと造物先達支配等三種の神と羽翼を具する蛇とのみありし此等の[illegible]中動物を作りたる神はゴクマツ[illegible]一の賜ひき時に創世始まり造物主が土[illegible]の賜(塗は土は漠然雲霧の如く生[illegible]ト忽ち山々は水中より車蝦の如く高まりぬ、[illegible]シブレス及松は谷を掩び林には禽鳥躍り猛獸走る此等のものは彼等の造り手の神の名を云ふ克はざれき[illegible]と吼え[illegible]々と鳴き感謝する[illegible]の

如し[illegible]人は全く最初土にて作られ力もなければ感覺もなく遂に水に溶解したりしを以て神々は木もて之を作りしに是れ忽ち心情なき不用の動物となりしが後大洪水の爲め死滅に歸し生殘るものは後天より松脂を流し注ぎしに今日木に纏る所の猿とはなりぬ

此後四人の創成ありて其女皇なるは即ち「クイッケ」人の祖先なりと而して口碑は尚進んで海潮を横ぎり七つの穴と呼べるチユランに此國民の移住を起せり(アズテック、トルテック同じくチスラと云ふ)

二、國名の起り　メキシコ國名はメキシトル(Mextitle)と稱する建國者の戰神より來ると云ふ

三、アズテック土人の平均丈は五呎四吋にして頭骨の指數は七八なり而して「メソセファリック」に屬せり頭骨は扁平、前頭低く顴骨秀で唇肥大鼻廣く扁平ならざれば曲れり皮膚は黄褐色なりブレロフトは故に是れ亞細亞人種なり

[illegible]

アズテック人は墨國に早く殖民したる人種にして西班牙人の入りたるときは全國に亘れり而して其民族の完全なる行政法を行ひ高尚なる技術を有し始めて西班牙人が「アレ、チルス」嶋に於て見たる如き野蠻民にあらざりし[illegible]を見て驚きたりと云へり

四、墨西哥人種起源既にシケエンザー氏は「ノア」の支流ナブナーが埃及より航し來りたりと又キンゲスボラー氏も「イスラエル」七族の後と云へり而して著者に至りては是れ日本民族の後なりと Encyclopedia Britanica

歐羅巴人も亦振古より米土に入るべきの關係を有せり

凡そ亞細亞洲の北方に於て北米と地理的連鎖を有するが如く、歐羅巴洲も其の北方に地理的連鎖を有することを認めずんばあらず、即ちノリッシ島、諾威、氷州、グリンランドの如きは斯種の連鎖たるなきを得んや、潮流及風向も亦之と相俟て其關係をして密着ならしむること、亞細亞洲の米洲に於けると一般なり、メキシコ灣流は墨西哥灣に始まりて東北に走り、北緯五十五度の邊より東折して西班牙の海岸を衝き、西南に轉じて前者と等しく北緯十五度の邊を西走して墨西哥灣に歸るものなり、風に於ては地球の自轉に起因する所の一年、一定不變の東北東南貿易風あり、以て自然的狀況の完全なるに加へて、歐人が米土に入るべき近因をなしたるもの意外の邊より來れるあり、是れ他なし、歐羅巴人は元來亞細亞人と古くより內陸にて交通せしに、一朝「マホメット」の騷擾あり、其疎隔する所となるや彼等は遺憾遺る瀕なく、他の道を開ひて以て亞細亞に通せんとすると年あり、後に幾計もなく學術上の大發明より、大地の球形[1]なることを悟り、皆西に向て纜を解かんとするものの如し、歐人なるもの夫れ米土を蹈まずして止むべけんや。

註[1] 地球の球形なるを始めて數へたる人は紀元前三世紀に於てアリストートルあり歐西の水は亞東の岸を洗ふと云へり、此數により西班人七子カは早く既に歐西より亞細亞に通ずべしと思惟せり後アリストートルの祖述者アペロース此說を確めたるなりと Bancroft's History of the u.s. p5.

閣龍以前「スカンヂナビア」人、先つ米土に入る

「スカンヂナビヤ」(Scandinavia)人の米土に入るや、彼れは野葡萄の一種が其地に芋々として發生するを見、始めてバイン、ランド[1](Vine Land)(葡萄國の義)と命名したりとは、氷州及丁抹の學者が夙に主張する所にして、後世永く北米の書名をバイン、ランドとして傳へたるものは此理由に由ると云ふ、ペラペイ[2]は熱心に斯說を擁護する所の一人にしてスカンヂナビヤ人は輓近に於て新世界即ちバイン、ランド殊に南米のブラジルなる殖民地に於て發見せられ、且つ幾多の紀念物を止めたりと云へ

り、歐羅人がスラヴル附近に入ると云ふは事奇にあらず、是れ太西洋の貿易風と墨西哥灣とが、自ら歐羅巴人を、持來すの關係既に說く如く、今之を歐羅巴の歷史に徵するも、古代羅馬の小舟は米土に漂流して歸帆せざるもの其數を知らず、故に此時代の小舟は豫め、其漂流と破船の損失に應するが爲め、獸皮又は泥土にて作られたりとさ（云へり。其論の）

今日北土ニューポート(New port)市に遺存する白塔(通稱Round Tower)は、假令ベネディクト、アーノルド(Benect Arnold)知事が、"My Stone built wind-mill"と呼びたりとて、到底其建築の異樣は米國普通のものと區別せざるべからず、凡そ今より五十年前コペンハーゲン(Copenhagen)のラン氏(Lan)が、西歷千年頃に、明らかにスカンヂナヒヤ人が、北米に入り、ナラガンセット灣迄入れることを證定せしより、隨て亞米利加考古學者は、皆白塔の建築も此等の歐北民族なるべしと思料せしが、其れと前後してマサセッツ洲(Massachusetts)のダイトン岩に、歐北文字の彫刻あるを發見し、次で其ダイトンとニューポートの間に於て、後のロングフェロウの所謂"Skeleton in Armor"を堀出したる如きは、偖に共に北方民族が米州に入りし事實に、一層確說の資料を與へたるものとす。

こゝを以て近古の歐洲の古物學者は、秘魯國に存する王家の口碑の如きものを以て歐羅巴に根源するものゝ如く附會せんとするに至れり、之を要するに其貿易風と赤道流が歐羅巴人を此地に導きたりとせば、ペラベイの云ふ如くスカンヂナヒヤ人を以て之れを論せんよりは、寧ろこの貿易風と暖流とに爆露し、且つ殆んど同緯度の上に來る所の地中海岸の國土、即ち西班牙、葡萄牙、及羅馬人を以てせんこそ穩當ならめ、是れシエラーの云ふ如く、閻龍が西班牙人を以て後に米土發見の名譽を擔ひるが如きも亦この關係ありたればなり。

註〔1〕ノーマン曰く是れ佛徒の米國に入りたる後五百年、北米地方の發見者が葡萄の多きに基き名づけたるものなり

〔2〕L'Amerique Sours. Le Nom de pays Te Fon-sag

〔3〕本節多くスカンヂナヒヤ人と云ふ是れ諸國、丁抹、瑞典等の住民を總稱するものにして時に北方民族歐北民族と云ふ同一義なり其の同類海賊の輩は（ハーハルドと稱するものにて八七四年頃始めて氷州に入り之に據りたるが其黨類の餌々たるものインゴルスは其部下たるを屑しとせずして遂れたり、之に次ぎ百年後エリツクソンドの二人相携へてグリンランドに入り

次でピスニーノアスコチアニューガングランドに入ると云へり

他の歐羅巴人も亦古より米土に入りたり

前節説くが如く、獨りスカンヂナビヤ人のみならず、他の歐人にして米國に入りし例跡も亦少なからず、ゲネーの引ける亞拉比亞人の口碑の如きは、其説を確かむるの力あり、口碑に云ふ。

『アラビヤ人はオシヤデス朝の時亞弗利加戰勝の餘威を以て西班牙帝國を隷屬たらしめしも一朝オシヤデスシリヤの軍に敗を取るや、國運日に非にしてアバンデスの虐殺に遭はんとして身を以て西班牙に遁れ「カリフ」となり王國を經始せりと雖後又亞弗利加より來れる他の皇子の爲に一敗地に塗れ、この皇子暫らく時を渡りしも、後ち耶蘇教徒の亡ぼす所となり、遂に今は亡國の形にて一家徒黨と共にリスボンに奔り、是より行手の方も白波の四の大海原に漕ぎ出で落ち行き又固より此行は始め新陸の發見もがなと思ひ付きたるものなれど其結果や一行なして氣力沮喪の悲境に陷らしめにき、順風を以て西に駛すること十一日、四顧水天一碧、波濤を縫ふて鳴飛び泡沫躍りて千島舞ふあれど、更に陸標のものもなきまゝに、南に航すること十二日、辛ふゝてカナリー島に着し、こゝに亞拉比語を操つる一名の人と出合ひ無事上陸して島内を巡覽し島主と面談せしに、堪なく已等冒險の失策談より島主の談話に其父なるものありて昔て此一行の如く西海の極端を一貫せんと企て一ヶ月餘を航海に費したれど、陸地も發見するこ

となくして止み又遂にカナリーに歸航せりと語り出でき』余は之より推考するも充分アラビヤ人及カナリヤ島人は其後一層の冒險と勇敢を鼓舞して亞米利加大陸に上陸せしや明かなり然らざるも亞米利加に進みたるべく其勇敢なる航海者中には往々國體の爲にアゾーア島に漂着せしことありさは倒人も信ずる所にしてアゾーアは亞米利加大陸と全緯度に位し亞米利加に見る所の木片及住民の死体は常に此島に漂着することありと蓋し是れコロンボスをして亞米利加發見を思ひ立たしむるの唯一の元動力ともなりぬ

前節記する所のアーノルド知事は英人なり、其ニューホードに於ける奇異の白塔を以て「我が白塔なり」と呼びたるは、全く英國に存するものに相類すればなりと云ふ、ロングフェローの「具足したる骸骨」と云ふも、其實歐北民族には眞餘の具足などなく、是れ全く印甸が英國の移民より得たるものなりとなすは、近今の説とす、而して斯説をなすものは云ふ、英人の北米に入りたるも歐北民族と同時代なるべしと。

北方民族と稱するものは、英國に攻入して「サキソン」と呼ばれ、佛國を犯して「ノルマン」となり、遠く地中海に入り「シヤーレマン」の煩累をなし、去て亞米利加に寇する等、當時全歐に跳梁跋扈を極めたるものにて、其海賊群中、他の歐羅巴民族を加へしなるべし、觀よ北歐の古書に果して此の事あるを、クリート、ラッキーなる王侯三十五

人の中間と共にグリーンランドを出帆して、未聞の一島に來りたる時、其乘組の二人に獨逸人あり、(名はチルフ[1])始めて此地に葡萄を發見し、茲に始めてヴインランドの名を下すに至りしと云ふ、以て其の北米に通じたるは、獨り北方民族に止まらず、他の歐羅巴人も加はりたるを知るべし。

日本と歐羅巴人との米土に於ける偶然の邂逅

ベラベイは一歩を進めて曰く、西班牙人の上陸に先ち一千年にして印度の佛徒及び日本の移民は、メキシコ、タカンゴ、ウテマラ、ベレンクー、カンチナマリカ王國及び秘魯に在留するものと相通交したりと、之を他の點より觀察せんに、彼の磁針器がトルフアスの云ふ所の如く、未だ歐洲の南方に於て使用せられざる時に當り、既に一二六六年、歐洲北方の民族が航海上に使用したりとすれば、元來歐陸に於て磁針器が發見せられざりしもの、突然其此に至るはベラベイのスカンヂナビアン說と相待て、新大陸の北方或は南方に於て先づ歐北民族が磁針器の本家なる東亞民族と相往來して傳習したるものと考ふるを得べし。

凡そ亞米利加に遊びたる歐人が、南に北に其所を求めて、既に居住せしものとすれば、同時又は之に先んじて、米土に入りたりと云ふ日本人とは南方又は北方に於て自ら相邂逅せるの跡なかるべからずベラベイの斷案も妄りに孟浪杜撰を以て輕ゆべからず。

嗚呼日本民族なる哉、日本民族なる哉オスボルン[2]が云ふ如く、西曆紀元前の五世紀に於て、單身孤劍墨西哥の山を攀て佛說を說き扁舟隻掉阿馬遜の川に浮んで商品を鬻きし日本民族は、先天的最邁往最勇敢なる票性を獨らして、米土に歐人の門を叩く、豈に旺ならずや。

註〔1〕Torfaeus's History of sweden.

〔2〕支那に於ける高貴なる「オーガスチン」派の耶蘇教者ザユアン、デ、メンドザが一五八八年に公にしたる記錄に云ふに日本より程遠き所に日本人は殆ど婦女子を以て滿されたる一島を發見したり、後再び彼等は武器を負て征途に登りしに是れ全くアマゾン國なることを知り以來年々其土人と貨物交換の爲め渡航せしが間もなく其日本の船人とアマゾンの土人間に起る出

來事のため平和の途を求めんとて一種の通交條例の如きものを行へり、そは日本船が其地に着すれば先づ其地の酋長に着港の事と渡來の人數を通知せしめ酋長の承認を得て日を定めて上陸をゆるして其當日は日本船の乘組員と全數の女親の群が各手々に已れの當日たるを記名せる草履を運び乘組員等の甲板上にて之に注視する中にくだんの女親は彼等の草履を海邊に放擲し退散す茲に於て水夫の爭ひ之を拾ふや牧師風のもの奇妙なる彼の冒業にて Alos les homms santant a terre chaussent chacoum les premies souliess qui en-contsent et in-contsent approchert les Femmes と叫べば先の親軍は各已れの草履を拾はしたる乘組員を幸福として賞賛措かず遂に自然の緣組となり當書の契濃かにして明年を俟て其日本船の歸航するとき迄に夫婦の間に擧げたる子にて男子なれば伴ひ女子なれば此地に止め母の養育すべきものとせり

japanese Frangment. p. 28.

（著者按）希臘の小說に古代アマゾンなる女人國のことを記せるものあり今ナスボルンの云ふ處は之を想像して書立てたる一箇の逸說たるなきや

日本人と歐羅巴人との米土に於ける交通中絶

日本民族の遇往勇敢なる、振古米土に於て彼れ歐羅巴人の門を叩きて通交往來せるの證跡明亮なるに厥後今日に至る數百年の間、聞として消息を傳へず、彼が如く發達せる交通を今日に繼續せざりしは何故そや、之を換言すれば、東西兩民族、昔日交通の大連鎖は中途にして朽腐し了り、今日些の形跡をも索むるべからざるに至りしは何故そや、第四論を完結するに際し、一言此に及ぶの必要あるを認む。

按するに、凡そ西半球に於ける東西兩民族、這般の交通たるや、洵に偶爾の交通にして、敢て急要必須に迫られたるにあらざれば、交通的鎖鎖の粘着力毫も之なし、加ふるに連鎖地たる當年の米土は、榛莽草莽の區に屬し、無人無產の域なり、其我れより航程の最近にして渡海上の便利尤も多きアラスカ及びカリフオルニア沿岸は山系海に迫り、農耕の適地少なく、更に移民の根據とすべき所なければ、遠く其冒險心を驅て墨西哥の移住適地に達するものありたりとするも、海程千里、故國と消息を通じ、相往來するの便宜あらんや、故に米土の移住は、終に魚貫接踵、繼承者を出すの運に達せざりしものゝ如し。

是に於てか我有爲の民族も今は鎖國界裡に彷徨し、一たび米客が、浦賀の訪問に遭へば、周章狼狽、其措置を失し、百年拯ふべからざるの國患を釀成せり、思ふて此に至

る、潸然涙を注ぎ嘆息する者之を久しうす。こゝに國思の聖光を放つて此の地を照らす今日は熱帯の氣候を以て此の地を覆ふ一大の米穀は種の間に點ずるのみ

歐洲人の世界に出でゝ未だ嘗て見ざる新世界を發見するの事たるや其性質の如何を問はず人心を動かすに足るものあり之を以て歐洲人の世界に出でゝ未だ嘗て見ざる新世界を發見するの事たるや其性質の如何を問はず人心を動かすに足るものあり之を以て歐洲人の世界に出でゝ未だ嘗て見ざる新世界を發見するの事たるや其性質の如何を問はず人心を動かすに足るものあり

之を思ふに國民の性格は其の國の土地に關係し其の國の土地は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

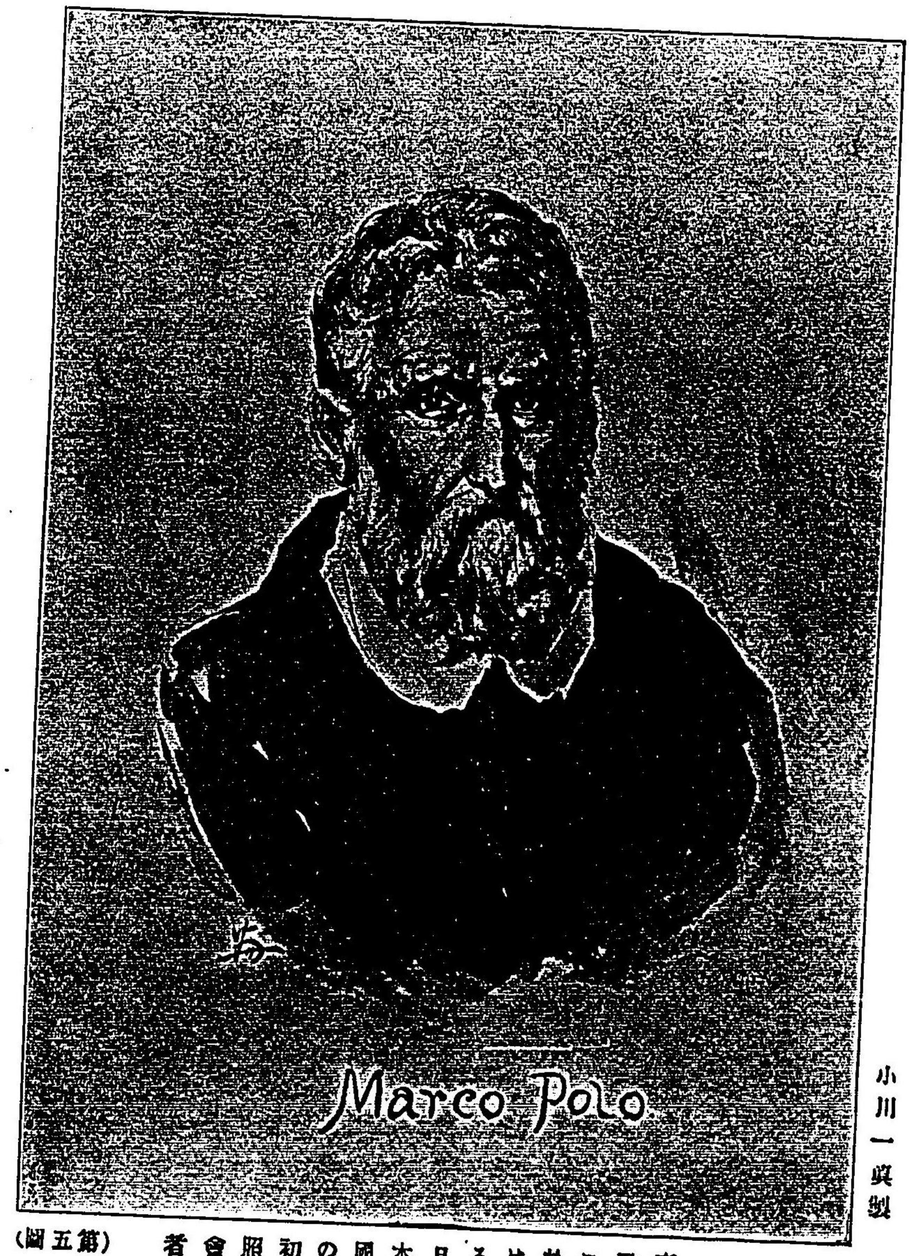
故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す

故に冒險的の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す故に國民の性格は其の國の歷史に關係す



小川一眞製

泰歐に於ける日本國の初照會者（第五圖）
（マーコ、ポロ氏の肖像）

第五論　歐羅巴人が亞細亞の地を蹈み殊に支那帝國に入りたるの日あれば日本人が世界の耳目に照會せらるゝの夕あるべし

亞細亞州の各國相國するや連壹隔壁の一鄕の如し隨て一國の事は他國も亦預り知るべきの理なり

亞細亞洲諸國交るものは我日本を始めとし、支那、朝鮮、印度、安南、緬甸、暹羅、土耳其、斯坦、阿富瓦、千斯坦、波耳地、斯坦、阿羅比亞等なり是等の諸國や其の遠近固より同からずと雖、其境壤犬牙の如く相交はり互に相接近し、恰も一鄕に甍を連ね壁を隔つる隣家の如く、自他の交通往來は、混沌たる建國の太初より既に之あり、況んや相隣るの家、時に耳語鼻新と雖、容易に之を聞知すべし、東方の各國が果して爾かく隣家の關係をなすとせば、若し歐羅巴人にして其の一國を踐む、他國の事亦聞知せざる能はとするを殆んど得べからざるものあるべし、但日本國に於ては稍他の亞細

亞諸州と其趣きを異にして、遙に東海面に一池濠を隔て隣家をなすものなれば、時に或は其風向の鹽梅により、最近の西隣、支那帝國と耳語鼻鼾を幸うして相通じたるの場合なきにしもあらざるべし。

歐羅巴人が亞細亞に蹈入り東洋の記錄を留めたるの始め

今や讀て歐羅巴人が東洋の地を蹈みしは何れの時にあり、人種發生の太古は措ひて論せず、爾來幾多の星霜を經て一國一鄉に土着し、人種的社會を作りてより、歐羅巴人と亞細亞人とは其中央亞細亞の路に依りたると、蘇土紅海の路に依りたると、波斯灣より亞拉比亞を横きるの路に依りたるとを問はず、何れにしても盛に相往來交通したることは何人も疑はざるべし、隨て其極東遙遠の地方は普ねく歐羅巴人の足跡を印するに臻らざりしと雖、亦耳聞の餘に、其情況を彷彿せしならん。

進で歐羅巴人が支那の地を踏みたるは何時頃なりしやと云ふに至りては、漠として判然せざるものあり[1]レクラス(Leclass)は歐羅巴人が亞細亞に通じたるは早き頃にて、希臘の商人が高原を踏んで往來したる跡により徵すべしとて、支那西域通商の事を說けり、云はく、ベクトラ(Bactora)は當時の大市場にして、プトレミー(ptolemy)の地圖に示す所に據るに、之より往來の順路をパミール(pameer)高原の南方に取り、上オキザス(upper Oxas)の谷に沿ひ、エアーデス(oech ardes)の上流に出でカシガリア(Kashigaria)の邊に達し、相通商したる如し、故にヤーカント(Yacand)の域内に在るタシカーガンを以て當時の隊商が語れるストン、ターウン(Ston town)のことなりと附會するものあり、要するに有名なる巡禮者フエンチヤンの(Hwen-Tsang)の報告によるも一般巡禮者が此邊の高原を通商すると普通にして、彼等がパミール及上オキザスの谷を過ぎりし事を徵するに足るべし。[2]

有名なるギボン(Gibbon)の歷史に據るに羅馬が支那に通ずるに先ち、紀元四百八十年代以前に於ては常に波斯の隊商が中に介して陸路にて二百四十三日の日子を費し、支那海岸よりシリヤの海岸を往返したり、後ち此事は騷亂の爲めに途絶したることありしを再びサマルカント(Samarcand)及ボカラ(Bochara)に市場を開き盛に取引をなせり、然れどサマルカントよりセンシ(Schensi)の最近部に至るに六十日乃至百日を要し、盜難等の患少なからず、依て路を南に取り、西藏を横ぎりガンヂス川を下り、マラバル港より、定期艦にて西歸すと尤も此中には歐羅巴人はあちざりしものゝ如く即ちギボンは特に此路に不馴の歐羅巴人(ボーロー)九ケ月の日子を費して北京よりインダス河畔に出で其の

耐忍を做るも亦愚ならずやと記しあればなり、而して羅馬人は後ジャスチニアン帝王の時、海路支那に通ずたりと云ふものゝ如し、

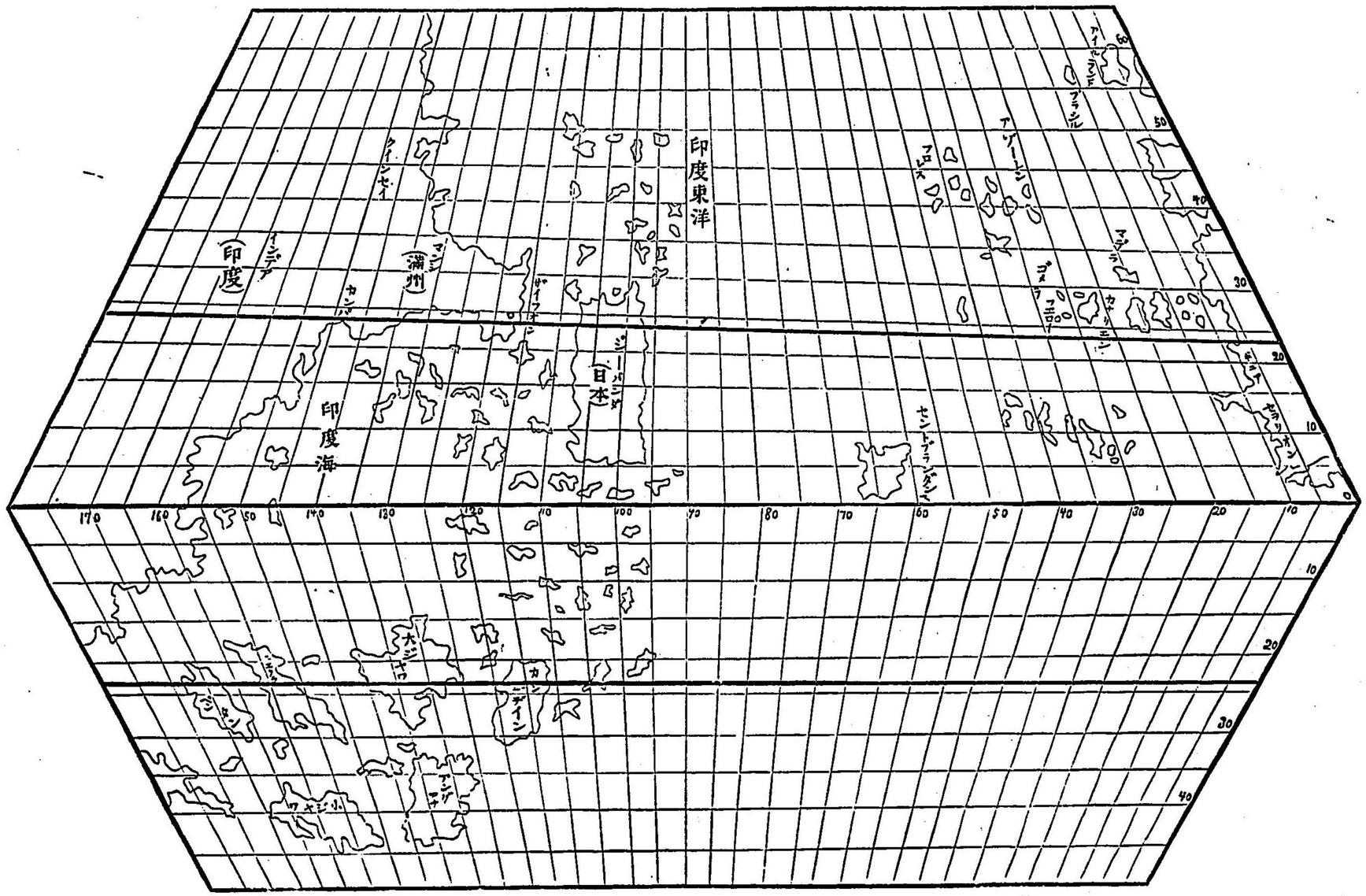
支那固有の所産物磁針器が、ホーラス、ベチダスに依り紀元百二十八年頃に支那より歐洲に傳へられたりと云へる、ジルベーア(Gilbert)博士の所論を異なりとせば、先づ歐羅巴人が支那に入りたるは、此の時前後にありたるを知るべし、然れ共當時日本國の耳語鼻新は彼れ歐羅巴人の聞知する所となるべき機會を有せざりき。

隨て西暦百四十年代に有名なる希臘の星學者兼地學者クロディアス、トレミーの如きも、他歐羅巴大小の星學者と共に日本の存在を認めざりしものゝ如し、是れ當時のトレミーの描ける世界圖(卷頭現圖參看)に依るも「sinae」即ち支那は、不分明ながらも世界の東端に其國壤を接することを表はすと雖、既に太洋の其東に横はるを知らず、詎ぞ復た我日本國あるを知らんや。

後ち、マホメット回々教生れ、基督教との間に葛藤を生じ、氷炭相容れざる關係を作るや、爾來疆に命脈を存したる歐亞の交通は、此に頓に一挫折を來し、是より去者日に疎く、永く東人西人を知らず、西人東人を忘るゝに至りぬ。

トスカチリー氏の舊世界地圖

亞米利加發見以前西暦一四九〇年頃刊行



典羅は圖原來元る擬に者るす載に頁七第」ドンラスウア、スダ」版出年七六八一暦西圖此すらな確今は圖原の氏ーリチカスト
りたれま挿もに圖地の」スンチーマ、トンセ」のもるす稱とりな圖の氏ーリチカスト今ほ尚ずせ保をきな異に圖此は或てしに

第六圖

261143

註〔1〕支那と西方亞細亞(今日の歐羅巴人種を含むべしとの間には上古濠濮の世より交通行はれたるものゝ如くマルチンの如きは舊約全書に預言者イゼイアが曾てビロンに來れる諸方の人民を歴擧せし、其の語中に見えたるシニム(Sinim)を以て直に今日の支那に擬しラッセンの如きは摩奴の法典に見えたるシナ(Tshina)を以て即ち今日の支那を指すとし、以て其交通行はれたるを確定せり、其の海路希臘人が支那の南方に來航しダイラス及プトレミーの地理志の材料を與へたりとさへ云ふ說あり

〔2〕Elisee Reelus's the Earth and its inhabitants vol. p. 26.

歐羅巴人が自動的東洋交通を始めしは其自己の邦國建設完備の日、十四世紀前後に於てせり

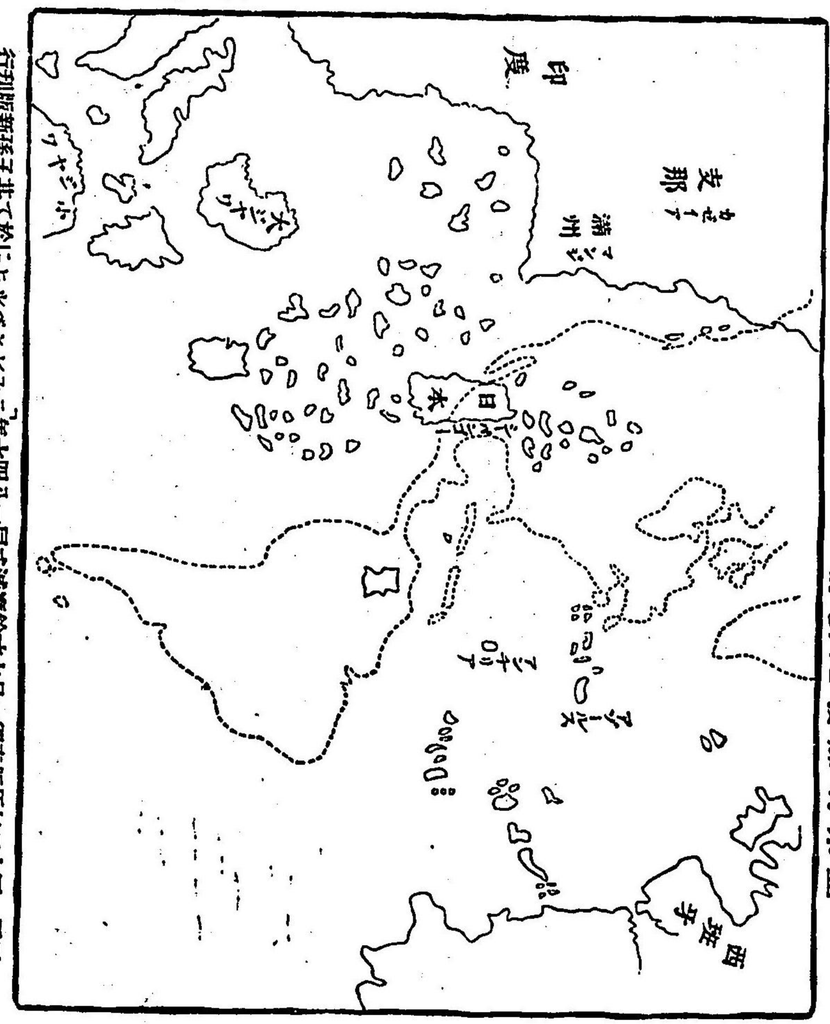
近世の歐人が冒險勇敢なる志望を齎らしながら、歐亞の通交一挫折後、絶えて其の消息を傳へず、漸く今を去ること四五百年前、始めて東洋の門戸を叩きしは、事奇なるか如くして奇にあらず、思ふに十三四世紀前の歐洲列國は、皆邦家建設の時代に屬し、到底東方に雄飛するの餘地なかりしも、十三四世紀以後に於ては邦家の建設既に成り、內顧の患稍々去りしを以て、此に始めて力を外に展ふることを得たりしなり。

之を譬ふるに、西暦千三四百年代前に於ける歐亞兩大陸の間は、一張の黑幕を以て劃斷せられたるものゝ如し、黑幕の未た撤去せられさるに先ち、辛くも其下を潛行し、東洋の微光を導きて全歐陸に顯耀せしめたるものは、則ち有名なる以太利ベニ三の旅行者、マーコ、ポロ(Marco polo)となす。

マーコ、ポロ果して此時を以て支那に入る——日本を全歐に照會す

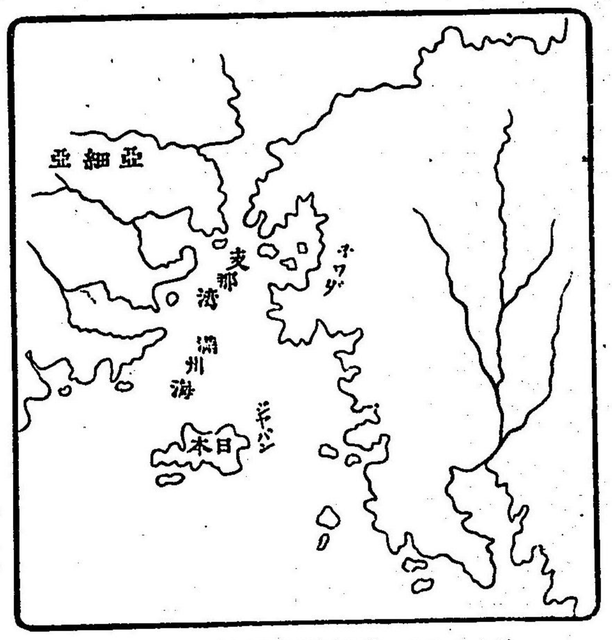
西暦十三世紀の末葉蒙古に大吉汗(ジンギスカン)起り、父鐵木眞と相携て威力雄張、天山を逾へて、西域に進み、振古未曾有の大帝國を中央亞細亞に建立せり、蓋し歐羅巴人の支那國あるを知りたるは此の時に始まると云へり、後ポーロ等支那のことを「カセイ」(Cathay)として傳へたるものは當時の歐人が大可汗(ジンギスカン)の本國滿洲の名稱を誤聞して此に至りたるものと云ふ。

此時に際し、歐人が大可汗の刺激に遇ひ、千年の眠頓に醒め、早くも東方問題に注目し來り、佛蘭西王の如きは卒先モンゴリアのカルコラム(Calcolam)に王城を構へたり、而して彼は當時の東方大帝國蒙古王に使節として、ブラン、デ、カービン(Bran de Ca



圖地界世の頃ヒイハヘ前以見發加利米亞

行刊版新孫子非て於に、ヒルベンレニ三年七四八一同す滅羅餘寸七尺一徑直版原年二九四一周四



第八圖

ザイダリイス氏の圖に依る亞米利加發見後四百一年代(一六六〇年)に於ける日本の位置を示す

rpin) 及ルブ・ルク(Rbruch)の二名を特派し入て朝せしめたり、後ち使節の復命を俟て一般歐人は支那國の事情を通曉するを得たりと云へり、蓋しポロ及他の商賈は實に此時を以て此等の使節に尾して蒙古の帝國に入るを得たるなりと傳ふ。

ポロの支那(當時金及宋の國亡び元の世となる)に來りたるは西暦一二七四年に相當し、二十餘年間東洋に流寓し、見聞共に博きを致し、西暦一二九五年を以て彼れが本國以太利のベニス(Venice)に歸着したる時、彼の見聞せし實話に、相當の誇誕を附し、面白可笑しく東洋奇談を皷吹したるものは、取も直さず、東洋殊に日本が世界の耳目に照會せらるゝの濫觴とす。

然れ共ポロは實際其の足、本邦を踏みたるにあらずして、多年大元國に流寓せる間に、隣家たる我國の耳語鼻新を聞知したるものと云ふに止まるなり、隨て其奇談なるものゝ正否未だ容易に信據し難きものあるは、固よりなりと雖、兎に角彼は幾千の臆測を以て、我日本國の事を相當に皷吹せしものなり。

ポロは我國の事を如何に皷吹したるか、ポロの說述を筆記して梓に上せたる數卷の書ありて歐洲に廣行せらる、就きて按ずるに、我日本の事を云ひしものとして、後

人か測定するは、只ジーパングーなる二三頁の記事に在り、然れとも近來説をなすもの、或はジーパングーを以て、全く我日本を指すものにあらずして、南洋の一嶋を指すものなりとすれと、是揣摩臆測の説に過ぎざるべし、如何となれば、書中他に日本に類するの記事なし、然るに彼れが我隣邦當時の大元國に二十餘年間も流寓せし間に於て、我日本の消息を知らざらんと欲するも得べからざるの關係ありしに思ひ合はすれば、ジーパングーの記事を日本のこととして認めざるを得ず、トーマスモーア氏(Thomas More)嘗て「ウトピア」(Utopia)なる一書を著はせしに、其説く所全く想像上の一嶋にありしを以て、(3 years in japan)の著者は、日本に關するポロの記事も、亦荒唐無稽、一の「ウトピア」たるに止まるべしと云へり、著者も亦ジーパングーを日本として正認すと雖、其記事の「ウトピア」なる事は、固より疑を挿まざるもの也。

註〔1〕蒙古は古の「ハンス」の遺種にして漢の西北戈壁沙漠内外、數百千餘里の間皆其の部落の在る所也、一一八五年頃也速該なる者始て強く諸部を併呑し子鐵木眞に至て威力雄張、西域を略し天山を逾へフッカリ、波斯高加索の諸國皆其の蹄下に在り、遂に大可汗の位に幹難河の北に即くや、都をカラコルムに建つ、其戰鬪問屠殺者五百餘万長子ジューン(朱赤)を四比剌亞に封し北氷海に抵る、二子察含台を希加里に三子窩濶台を蒙古に封す東黑龍江に達す是を太祖となす、窩濶台南略金を滅し宋を侵し其半域を奪ふ是を太宗と爲す、子貴由蒙哥相踵て經略す、忽必烈に迨で遂に殘宋を寇し交趾緬甸を略し亞細亞大略其所有と爲る舟車通する所朝貢せざるなし……顧承述略第四卷一枚目

〔2〕蒙古の元と稱したるは、一二七一年、我が文永八年なり、

マーコ、ポロがジーパングー島の記事抄譯〔1〕

ジーパングーは、マンジ(滿州を云ふ?)の海岸を去ること一五〇〇哩〔2〕に住し、其國土巨大にして住民の容貌秀美習俗文化の域に入れり、宗教は偶像禮拜にして統治の主權は天皇に歸し、絶て外國の干渉を受けず、國内黄金の産出は無盡藏と雖、帝王は之を外國に輸出するを禁遏せり〔3〕、故に商船の往來も極めて寥々たるものなり、然れば其の王宮の金色燦然〔4〕人目を眩し其美觀到底想像に餘りあるべし、現に足其地を蹈みたるものゝ話柄に聞く所を以てするに屋根は全くに金板を以てし、天井を張るには復貴金屬を以てし、室内据附の机案の如き厚さ數寸の純金製にて窓戸皆裝飾を施し、金を樓ばめ銀を張り、驕奢の樣は殆ど紙筆に悉すべからす、又此島には多量の紅色眞珠〔5〕を産し其形圓く大粒にして、白色眞珠と全價或は高價なり。

一部の住民は死人を埋葬すれど一部分には火葬をなすものあり、埋葬式にては死人の口に眞珠を擬するの習俗あり、以て其眞珠の量少々ならざるを知るべし、其他寶玉寶石

は極めて夥しく、是れ此國の富宇内に傳なき所にして、大王クブライ(元の忽必烈なり)が忽ち之に垂涎し、一蹴して其土を居り已れの有となさんとせる所以なり、クブライは則ち麾下の臣アバカタン、ポンサンシン[6]の二名を三軍に將たらしめザイツン及キンセイに纜を解き[7]、船艦海を掩ふて黄海を航し、無事に此國に達したるに、二將策戰計畧の譎合はず、相拒みて容れず、竟に一要塞の取て以て據るなきに了れり、其一軍偶〻日本軍を衝くも彼れ頑強にして下らず、兩軍は接戰、刻を遷せしが竟にクブライの軍利を制し、守兵の八人を遣すの外、皆斷頭場裡に落命せしめたり、蓋八人のもの斬殺に處せらるゝに當り、巧に妖術を以て刀鎗をして傷くる克はざらしめしも、遂に其事發覺して、木刀を以て撲殺せらるゝに至りぬ。

クブライの軍は彌々此を以て陸地に攻寄せんとしたりしも、此時遽く彼時早く、青虹海中に見はれ、怪雲空を走ると見へしか、忽ち北風吹きしきり吩咤まゝく、見る〳〵元の戰艦は大洋に推し流され、軍議さり〳〵にして今は暴風の止むを俟て、再び上陸せしむるの策に出づるの外道なく徒らに怒濤に揉まれしが、俄つかひもなや風は一層強烈にして數隻の戰艦は立ち所に木葉微塵に碎かれ、水に溺るゝの兵士は思ひ〳〵に、打碎けたる木片に縋り、海邊より四哩許のとある小島に流[8]れ付き危險を逃れしが、遠く大洋に漂へる戰艦は幸に破船に至らざりしものから、是れ不幸中の幸なれとて其中の主なる二艦は乘組の將校以下餓々たるもの合せて十餘万人は再舶を圖ることゝして、一先づ大元國に引取りたり。

憐れなるは其小島に生き殘れるものにして總て三万人もありつらん、今は兵器なく糧餉もなく飢餓を眼前に控へ空しく撓虐となるの時を俟つものゝ如し、間もなく一天晴れ荒れは遂に靜まりしかばジーパングーの軍士は先を爭ひ幾百の小船に棹して、滿州軍のなり果てを吊ひてんと出で來りければ、くだんの落武者どもは驚き慌てゝ島内の程良き谷の深みに逃れ匿れしが、ジーパングーの追手は斯と見るより已れ逃さじと、追ひまくる、追はれて今は途を失ひ、海濱近きに逃けのびしが、天の與へか、ジーパングー軍士の旗印を吹き流したる軍船は、二つ三つ錨を入れて泊れるものから、得たりやおうと飛び乘りて、急ぎ船主なる追手の軍士に見咎められぬ先にと、いづこともなく漕ぎ出たり、聽てイト繁昌の都に到着しけるが、其他の人々か船印に自國の旗を推し樹つるものから誰一人上陸を拒むものなし、此都には婦人のみ多く少數の男子を見たれば是等を殘らず域外に放逐し、婦人を以て思ひ〳〵に亂暴なる所作に及びたれば、此事時もあらせず、國王の御耳に達しければ、イタク逆鱗ましく〳〵ハヤ速かに攻め取れよとの賜はせられ、數多の軍士は群々と攻めかけたるに、殆ど六ケ月の久しきに亘りしが、竟に滿州軍の矢種盡き、本國に生還せしめられることを條件として、出でゝ降を乞へり、是れ實に一二六四年春[10]の事ともなり。

元主忽必烈は後此遠征に敗を取りし、即は全く二將に在りとし、其の一人を殺し、他の一人は之をソルザー[11]に貶謫せり。

ジーパングー及其附近の諸地方偶係の形は一にして足らず、或は牛の頭或は象或は山

羊、狗及他動物の頭顱等を禮拜し、時に偶像に二面若くは三頭のものあり、四肢乃至十肢百肢を具へ千手觀音寺に至りては尊崇頗る高し、而して若し耶蘇教者が其の國民に向て何故に斯く其禮神に種々の形像ありやと問かば、彼等は是れ祖先の作爲する所なれば飽までも保存して以て子孫に傳ふるのみと答へん、而して其祭事の儀式等に至りては實に野蠻にして殆ど嘔吐を催さしむ、故に余は之を述ぶるを憚るものなり。

こゝに一事の記すべき尤も慊焉たるべき習性は彼が戰に勝て敵人を捕獲せば敢て金を以て損害を要償せしむるの道を講ぜずして、妄りに其捕虜を斬殺し、其肉を屠り、親戚故舊を會して勝軍を祝し以て榮となすにあり豈に是れ殘忍の極ならずや。

註〔1〕著者の譯出したるは一八八三倫敦刊行トーマス、ライトの註釋附英譯書(其原本はマースデン氏の原譯なり) Book. 3. Chapter. 23:より

〔2〕一五〇〇哩は多く支那の里數なるべく以太利の里數に改算すれば五百里に上らず、日本里に改算すれば一九〇餘里なり

〔3〕ケンフアー云へり日本の至る所金礦あり帝國は夫に對し無上の管理權を有し全國の採礦の三分の二は之を献納せざるべからず然れども晩年に至り其量を減ず今は昔日の如くならず云々…Hist of Japan

〔4〕ケンフアー云はく、Kojatu と稱する帝王の御所は其柱に金銀彫刻を鏤ばめたりと、コザツ古刹を云ふか

〔5〕ケンフアーは又眞珠は貝の珠と稱し西國海岸に何人にても取るべき牡蠣に付くものなりと云へり、然れども是れ虚説ならん

〔6〕日本及支那の正史によれば此時元より來りたる將校は忻都洪茶丘及范文虎となす前者ポンサンシンにして後者はアバカタンが

〔7〕マースデンの註釋にはアモイとニンポウならんと云へと斯かることはあるまゝく正史に據るに一將は合浦に由り一將は江南を徑て日本に來るとあり、恐らく之に相當するか

〔8〕ゴービル氏は是れ長崎に近き平戸なりと云へと當時の戰史に據れば全く鹿島ならざるべからず要するに元寇の事は今次に日本の實史を抄して讀者の判斷に任ずるを善しとせん

〔9〕ライト曰く是れ大坂なりと著者は之を信せず如何となれば大坂は瀬戸内海の奥にして彼等が此遠方まで來るべき利なく且婦人のみと云ふ既に大坂に在らず

〔10〕年代は原書の誤にして一書には一二八四とし巴里出版のものには一二六九年とあり、又一版には一二八九とあり、一定せず、然れども實際日本に於ける元寇の事ありしは弘安四年にして西暦一二八一とす

〔11〕ゾルヂーは滿州の一國なりとライト氏は云へり

ジーバングーの語解及ひそは日本を指すものなりとの辨

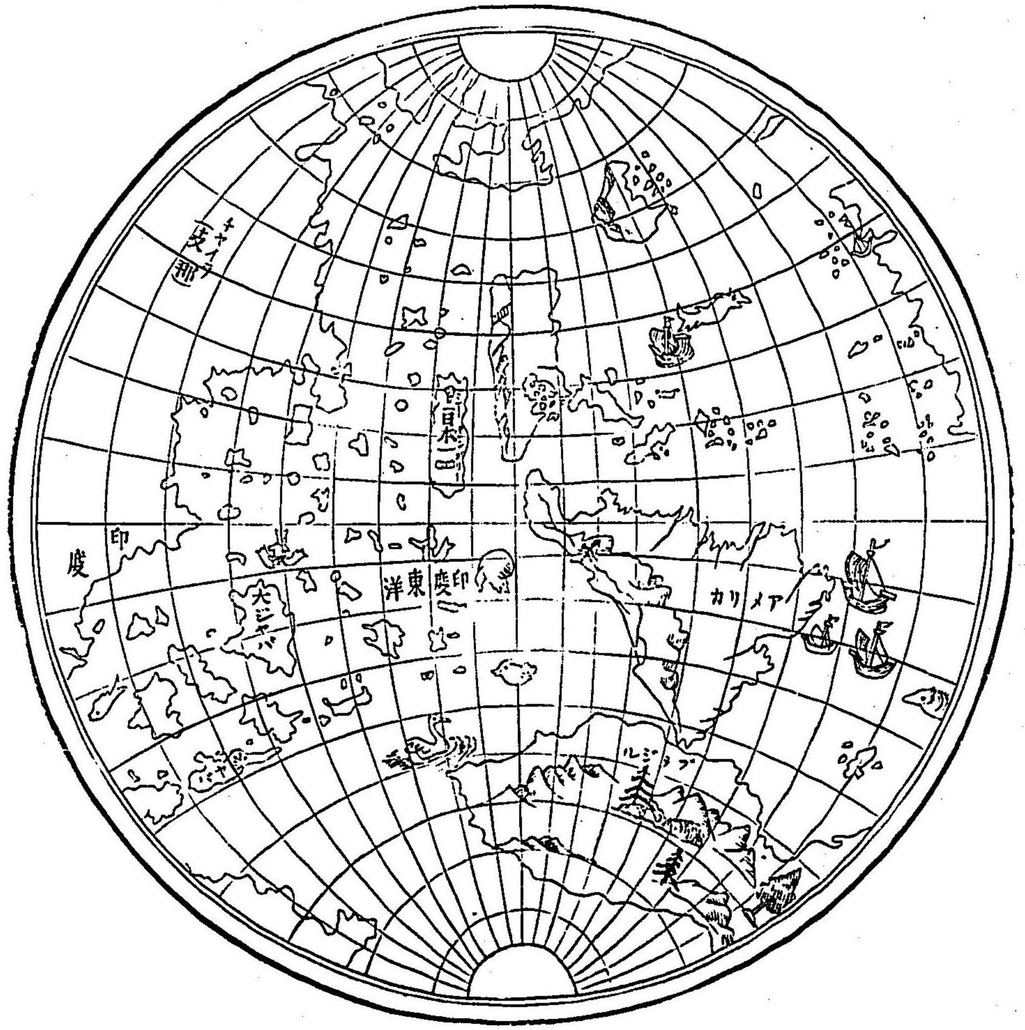
ポロのヅーバンゲーは後世の地理學者が其國々によりて多少轉訛の進を傳ふるもの多し然れ共其源は一ヅーバンゲーに在ることを思はざるべからず今其數名五六を次に載す。

年代	地理書又は地圖の著者		著者の國	名呼	
一四九〇年代	トスカネリー	(Toscanelli)	以太利	ヅーパンゲー	(Gipangu)
一四九二年	マーチン・ベハイム	(Martin Behaim)	獨逸	チーパンゴー	(Cipango)
一五一五年	シエーネル	(Schöner)	仝	ヅーパングリー	(Gipangri)
一五三二年	ミユンステル	(Münster)	仝	同	
一五一四年	「ゼ・トロス・ゴーンス」	(The Tross Gores)	佛蘭西	チパグリー	(Zipagri)
一五一九年	ゼームス・レノー	(James Lenox)	以太利	チパンクリー	(Zipancri)
一五三四年？	ダ・ビンシー	(Da Vinci)	仝	チプグナー	(Zipugna)
一四九〇年代	ピロー・コッポー	(Pierro Coppo)	仝	チンパンギー	(Cimpangi)
一五一八年	ポーロ・デ・ハーランス	(paulo De Hurlant)	仝	チムパガ	Cimpaga)
一五五六年	ザルチーリー	(Zaltieri)	仝	ジアパン	(Giapan)
一五六六年	ジルバート	(Gilbert)	英國	ジアポン	(Giapon)
一五七〇年					

元來日本と云ふは ニッポン(Nippon)又は ニポン(Nifon)にして之れが支那音を仮りて ヅーブン(jih-pun)又は ヅポン(Gipun)の如く轉訛するは自然の勢にして ヤーパン ポロ

西亞米利加發見以後シェテルの氏地球圖

西曆一五二〇年獨乙ニュレムベルヒ刊行



第九圖

亞米利加發見以後レノオ氏の地球圖

西曆一五三四年(?)刊行

第拾圖

等は先づ支那人の音より日本を耳にしたり、故に支那人のジープン又はジポンは彼等洋人(主にチウトン人)[1]の口より出づる際には勢ひジペン(jy-pen)またはジーパン(jih-pan)となるべく、次でジーパングー(Gipangu)[2]に變化したるは音調の自然にして一も怪むに足らず、但し其の語尾の「グー」、又は「グリー」は亦全く支那にて國と云ふ發音が時としてクー(Kuo)又は(Kwoh)と云ひ、隨てジーパングーがジーパングー又はグリーとなりたる迄にて、其轉訛明認すべしレクラス(Reckrus)氏[4]は支那のジーポンクヮー(jipon-Kwah)が馬來に入りてジーパングーとなれりと雖も信じ難く寧ろジーパングーは西班牙及葡萄牙人等の稱呼として見るべく、羅典にてはシアムパグー(oyampagu)と發音し、以太利にてはシムパグー(oimpagu)と發音し、多少各國固有の音に轉訛せしものとして、認めむこそ穩當なるべし、由て其語解より云ふときはジーパングーの日本を指すものたることは殆んど明晰無疑なるべし、因にペルリー及び[5]ミユンステルベルヒ氏の說を借りて今日のジヤパンを導きたる各音の轉遷を次ぎに示す。

Niponjih-pen-schipen-Japan.

註〔1〕獨のライン氏が新渡戸氏に語りたるによるに一般チウトン民族はジヤパンと發音し羅典民族はヤポンと發音すと即ち英、獨、蘭は前者に屬し佛、以、葡西等は後者に屬す

〔2〕De guignes and morrison.

〔3〕ゲローニン曰く、支那音ゼープエンゲー(Gepnengu)なりと

〔4〕Earth and its inhabitants. p.355

〔5〕perrys Expedition Vol.1.p.6.

ジーパングーは日本に非らずと云ふジョージ、コリングリッヂ氏の立說

是れ在濠洲のジョージコリングリッヂ氏が明治廿七年五月發兌の倫敦地學協會報告に登載せしものにて氏は特に此說の世上に知られんことを望み其八月態々書を飛ばして東京地學協會に其說を通に來りたるものゝ由にて協會は濱田俊三郎氏に託して全文を飜譯し地學雜誌第六集第六十九號に載せたり今此には其儘を拔萃したるのみ序に云ふコリングリッヂ氏は尙十分の證據を擧げて一部の書物となして江湖に示す積なりと云ふ

日本國の歐洲人に知られしは、千五百四十二年葡萄牙人アントニオ、デ、モータと呼へる人航海中に其針路を失して、圖らずも日本に漂着したるを始めとす、其の後數年ならずしてセント、フランシス、ザヴィア氏其の地に教會を設立し、始めて日本の風土を察知し、其の人民と相知ることを得たり、然れども地圖上に其國土を見るに至りしはモータの發見より二十七年を經過したる後なりき。

千五百六十九年ゼラルド、マーカトルの貴重なる世界地圖の出版あり、圖中載する所を見るに、今の日本の南半に當る所に一島の記入あり、題して

Lapan dicta Zipangri a M Paulo Veneto, orim Chrise

と云ふ、其外形は恰も本土の南半に九洲四國の二大島を合せたるが如し、而して右三嶋の間に横はる內海の記入なきは、全く著者マーカトル氏に知られざりしが爲めなるべし。

蓋しマーカトルは歐洲製圖家中日本を地圖に記入したる先輩者なるべし何となれば マルコポロのヂパングー Zipangu トスカチリ及びコロンブスのシパンゴー Cipango 等はマーカトルより以前に記載せられたれども、下に說明するが如く、是等は日本を指したるものに非さればなり。

シパンゴーは種々異なる發音を有し、多くの學者ありて Ji—pen—Koue Ge—pen, jih—pun, 等ジヤパンに近似の稱呼を以て之れを記述するに至れり、然れども是等の音がジヤパンに近しと云ふのみを以て眞にシパンゴーは日本なりと云ふときは、其の論據は聊か薄弱の感なき能はず、今此の問題に就き、靜に精密の觀察を下さば、シパンゴーは日本なりと云ふ證據は『今爰に新しく發見せられたる一島ありとせんに、該島の位置恰も從前記

載のシパンゴーと一致し、且つマルコ、ポロが嘗て東洋にジパングーと稱する島ありと云ひしに依り、此新島は即ちジパングーなり』と斷定するに止まるべし、然るにマルコポロの所謂東洋とは果して何れの海を指すや、ジャバ近海に非ざるなきを保せんや、從て彼のシパンゴーも亦た東印度諸島の一なるやも知るべからず、若し果して然らばシパンゴーの日本なりとの說は全く破壞して地に墜ちんのみ、故に此際余が努めて探究すべきは、シパンゴーの原圖を併せて、マーコ、ポロの記行を熟讀するに在り、總て地圖學者は已れ實査を遂ぐるか、又は十分確かなる憑據あるに非ざれば、漫りに前人の圖を改訂するとなきものなり、トスカチリ及びコーチンペハイムの兩氏は、平面地圖を球面地畫法に改めたる元祖にして、其の起原を尋ぬれば、フラ、モーロの有名なるマパムンディ(Mappamundi)を引用せしものなり、而してマパムンディは頗る書き地圖類を集め之れを參酌して造りたるものにして、其の畫法茫式に屬すと雖も、國土の外形を圖することは頗る眞を得たる場合少なからず。

シパンゴーを記載せるトスカチリの地圖は今や之を失ふて知るに由なしと雖も、同地民が千四百七十四年に葡萄牙政廳に捧呈したる細書及びコロンブスに贈りたる手書に據りて之を察するに、千四百九十二年出版のペハイムの地圖と同一物なり、而してペハイムの地圖を繙てシパンゴーを檢索するに、恰もフラ、モーロの地圖中に在る一大島と符合するを見る、然れども其名異りて之れをジャバ Giava と記しあり、是に由て之を見れば シパンゴーは日本に非ずしてジャバなること容易に知るを得べし。

斯くの如くフラ、モーロの所謂ジャバをシパンゴーと變名したる爲め、世人をして Giava を Java と異物たらしめ Giava を cipango と同物視して今日に至るまで其誤譯を傳へたり。

扨てトスカチリはフラ、モーロの所謂Giavaを變名してシパンゴーと命名しjavaの名を赤道以南に横はる一大島に與へんと苦心したり、何が故に誤譯したるか、請ふ是より序を追ふて之を陳述せむ、

フラ、モーロの地圖中に記載する所の東印度諸島中ジャバ、バリ、ロムボック及サムバロ諸島の形狀、就中ジャバ島は其輪廓殊に精確なるを以て、該地圖はポルトラノー(Portolano)を用ゐて描出したるものなるべし、然れども トスカチリーは其地方の地理に暗くフラ、モーロの地圖に描畫したるが如き正確の智識なかりしは疑ふべくもあらず、加之ならずフラ、モーロがジャバ其他の諸島を東西に並列せしめずして、南北に排置せしめたる所以をも窺ひ知る事能はざりしは、亦拙ふ可からざる事實なり、若し然らずとせば平面地圖を球狀地圖に變更するに際して、ジャバ其他附近の諸島の南北に横はるものをして東西の位置に訂正したるや疑なし、然るに爰に及ばざるものは、全然フラ、モーロの眞意のある所を解せざりし事昭然たり。

フラ、モーロ所記のジャバ(Giava.)を變ずてシパンゴーと爲すものは、蓋しコルコ、ポロの說を信じたるによりしならん、既にコルコ、ポロの說を信ずる以上は其說に從て平面圖を球狀圖に引直すに際して、經緯度の關係よりジャバの面積を擴張增大ならしむる必

要ありて、之れを實地に行ひたり、從つて地圖上シパングーの面積はジャパよりは遙に大なるを見る又フラ、モーロのジャパ島の位置は恰もマーコ、ポロの東洋にある者に相當するを以て、益々ジャパはシパングーの誤謬なりと確信せしためなり、是に於て赤道以南に横はる大島即フラ、モーロが Sumotra over Japro'bana と命したる一島の名を奪ひ之れをジャパと新稱したり、此一島の名即 Japrobana とは實に大文字を以て書せられたるものなりし。

マーコ、ポロの記述を按索するに先ちて、フラ、モーロがジャパ島を赤道の北方日本と殆んと同緯度に横出せし所以を探究せざる可らず、思ふに如斯誤謬はフラ、モーロが因て以て根據となしたる傳説、及ジャパ島を地圖上に描出す可き餘地なきに職由す、蓋しフラ、モーロ以前の地圖は其種類の何たるを問はず、皆圓形の輪廓内に陸地を寫出したるものなり、如斯地圖にはジャパ其他附近の諸島は悉く東洋中に散在せり、即ち第十一世紀のセント、サヴア、マツモンデ、チユリン府圖書館の藏書たる第十二世紀の製作に係る地圖並びに第十四世紀の初代のマリノ、サヌドーの世界地圖千四百三十六年出版せられたるバイアンコーの地圖等皆然り、此等の地圖は實にフラ、モーロをしてジャパ島及び附近の小島を東洋中に置かしめたり、而して此等の地圖は勿論何れの地圖と雖も、總て圓圖内に書する例あり、且つ經緯度の區劃なき爲め、ジャパ其他の諸島を東西に並列せしむる事能はずして、南北に連續せしめ之を赤道以北に圖したりしを以て、氏は其註解を地圖上に記したりしと雖も、敢て氏が志を痛ましめし者なし、然れ共氏は地圖上に

ジャパ其他諸島を容る餘地なかりしことを明言せり、而して其諸島は疑もなくボルネオ、セレベス及ヒリツピン群島なり、却説マーコ、ポロはジャパ其他附近の諸島を合してシパングーと呼稱したる者の如し、蓋し附近の諸島とは東印度諸島の大部分即ちボルネオ、セベレス及ヒリツピン群島等を初さし、サムパワ島に至るまでを總括したる者なり、從てシパングーとはジャパの複係の如きものならんか、何さなれば同氏は別に眞正のジャパに就て記載する所あればなり、又其書の他の章に於てシパングー島は東洋中にありて支那を距ること千五百哩なりと、實に千五百哩の距離は恰も支那とジャパ島との距離に該當し、日本さの距離は遙かに短くして五百哩を出でず、其最も短き距離は朝鮮海峽の地にして實に百哩に出てず。

マーコ、ポロはジパングー島の王宮は華麗に國土は富裕にして且つ金銀珠玉に富めりと云へり、此の記載の如きは半ば小説的にして取るに足らずと雖も、記事の恰もジャパ島に關係を有する事少しさせず、プトレミー氏のジャパリオー即サバデベ(Jabalioe or Sadiibe) 或は梵語のジャパディッパ(Jawa Dwipa)等凡てジャパに關係ある書籍中に記載ある事實と彼此相符合する點少なからず、何れも皆な金銀珠玉に富むと云へり、マーコ、ポロは更に歩を進めて、元の忽必烈の遠征に及べり、其の中に火葬の事あり、火葬は今日までジャパ島に於て執行せらるゝものなり、他の記事は日本に由緣少くして、反て彼に多きものあり、忽必烈は實に日本を征したり、然れ共ジャパを征したると亦數次なり、マルコポロが記する所の年代は實にジャパを征したる年代の一なり、又其のジャパ島たる

べきの信用は其の他の人民の文身せるなり、所謂文身とは皮膚の下に油墨を注射するにはあらずして、皮膚と筋肉との間に珠玉を嵌入せしむ、是れ戰爭に際して死傷する事なき匹符なりと云ふ、其ジヤバに相違なきはニコル、デ、コンテ氏も亦之れを詳にせり、他の書籍に於ても島の中央に奇異なる大樹林あり、其の幹より薄くして長き鐃の枝を生ず、此の枝長く伸びて地上に達し遂に地中に入りて根を生ず、此の鐃枝を取りて皮膚と筋肉との間に挿入するも、更に苦痛を感ずることなきを以て、土人は好て此れを皮膚中に入るゝと云ふ、又次にシバンゲー島土人の崇拜する偶像、並に風俗に就て記載を試みたり、即ちジヤバの舊都シンガサリ其の他の舊都には人身にして象其の動物の首を有するものあり、又一身に二頭或は三頭乃至四頭を有するもの若しくは數多の手を有する諸像凡て印度傳來の偶像少なからず、ニコルテ、コンテ、氏の記述によるも此の地の土人は其性質極めて殘酷にして世界中比を見ず、彼等は殘酷の點に至ては一歩も他邦の人民に讓るものにあらず云々、グユードピコーパセマ氏も亦千五百〇三年に於て千四百四十年代の記載をなして、土人は金錢を貪るとなのみ認み、其の兩親すらも之れを賣買すと。

マーコ、ポロは最後にチン(Sea of chin)と稱する海の支那と日本との間に横はると云へり、所謂チン海と呼ぶ者は即ち現今の支那とジヤバ島との間に横はる支那海にしてマーコ、ポロ全時代の地圖並に書籍とによりてジヤバ島と支那のスパイス島との間に横はる海をチンと呼びしは明瞭なり、支那船(Junk)は冬日東北貿易風に倚りて安南の海岸より新嘉坡に達し、全所よりスマトラ島及ジヤバ島に廻船し、南半年風の來るを待ちて、支那に歸船するは、往昔より今日に至るまで行はるゝ航海法にして、支那より日本に航海するには貿易風並びに半年風を藉るを得さるが故に其の航海は大に困難にして固より前者の比にあらず、マルコ、ポロの記載によりて判斷するも、亦シバンゴーは日本に非ずしてジヤバ島なる事を推知するに難からず。

既にシバンゴーはジヤバなりとせば何故に、ジヤバをシバンゴーと呼びたるを討究する事必要なり、思ふにシバンゴーは前述の如く、其昔はジヤバ島附近の嶋の總稱にして、其一群中のサムバワ島より傳訛したる者ならむか、之れを何れの語學者に尋ねても兩者の間には關係なしと云ふならん、然れ共假りにシバンゴーを變化してジバゲア(Zipangus)と爲し、サムバワをシムバク(Zimpagu)と呼稱すればジバゲアと互に肖似せん、而してジンバクと稱する島はフラ、モーロ氏の原圖にはジヤバ島に隣れる一小島バリ島に與へられたる名なり、蓋し此名稱よりして遂にジヤバ島其他附近の諸島をシバンゴーと呼ぶに至りたるものか。

ジヨージ、コリングリッヂ氏の立說に對する著者の反駁

著者未だコリングリッヂ氏が如何なる地位の人にして如何なる學者なるやを知らずと雖、此問題の論者たる以上に於ては著者の一好敵手なり、其說駁せざるべから

ず、著者を以て見ればコリンクリッヂ氏は其好奇心に驅られて、恰も往年我日本の千頭清臣氏が池中海旅行中ジャバニーズと誤認せられたることありと云ふ如く、ジャバー眼を日本を否認せんとする意志にあらざるや、是れ稍もすれば其立説牽強附會に陷りし所以なり、請ふ其駁説を語らん。

地圖上の論點　劈頭第一コリンクリッヂ氏はトスカテリーの地圖今は空しき由を告ぐれ共、著者が渉獵したる圖書の中に別刷(現圖參看)の如きものを探求するを得たり、是れ既に此の考證の不充分なるを自白するものたり。

ポロ以前に在りて、プラ、モーロの如きも地學者として日本の存在を知らざりし程なれば、ジャバなる一島を載するに製圖上の都合ありて北方に偏記せるが偶々我日本の位置にありしものとせんか、後ちポロの紀行が恰も其位置に當りてジーバングーなる地ありと云ふを告げたれば後の地學者トスカテリー、ベハイム等は其説明に對照しモローの假設的ジャバの位置に相當するを以て其儘之にジーバングーを命じ、ジャバーは本來の位置なる南洋の一島となしたるは、其措置正々堂々にして一もコリングリッヂ氏が云ふ如くモーロの意志を損したるの嫌なし、是れモーロのジャバをジーバングーとなしたるにあらずして、モーロの假設的ジャバの位置を他の正當なる位置に更正したる迄なればなり、其杜撰は元とモーロに在り、トスカテリー等がモーロの假設的ジャバの位置にポーロのジーバングーを据えたりとて、直ちにジーバングーはジャバなりと强ゆべけんや、モーロ若し假設的ジーバの位置を他の方位に置きたりとせばトスカテリー等は全じく之にジーバングーを命ずるの謂れなく、偶〻ジーバングーの本位置にモローが假設的ジャバーを畫きたるは實にコリングリッヂ氏等の論據を作る所にして、抑も薄弱と云はざるべからず。

次で氏は日本の地が地圖上に示されたるはゼラルド、マーカトル(一五一二―一五九四)に、即ち歐羅巴人の初來後廿七年目に始まると云ふも、頗る其意を得ず、タトヒ日本の記入はジャバンを以て始まらずとするもジーバングーを以て世人に知られたるべし、既にマーカトル自身もジーバングリーを以て呼ぶにあらずや、況んやマーカトル以前幾多の地學者が描きたる地圖にジャバは南洋に明記しジーバングー則ちジャバと全く別物なる日本は之を或は北方に小さく或は米

亞の間に長く蟠るものゝ如く記入せるを觀るをや、若し是等の地學者がジャバーとジーバングーとを全物視したりとせんか、焉ぞジーバングーを以てジャバーの記入所に傍註して「ジャバー一名ジーバングー」とせざりしか、事此に出でざりしは豈に日本の記入がマーカトルを俟たずして既に之ありたるにあらずや則ジーバングーは日本に非らずや。

里程上の論點　日本支那間の里程は五百哩を出でず、故にポロの千五百哩の巨離とするは支那ジャバー間なりとは氏の論點なり、然れども里程の條に於てポロの記事に留意せんかマンジ即滿洲の海岸を去ること千五百哩と云へり若し之か果して南洋のジャバなれば何すれぞ支那最北の地を起點として其距離を云々するの迂を學ばん、是れ既にジャバーにあらざる證定なれど尚ほ後のポロが記事の註釋者及著者を以て考ふるも千五百里と云ふは畢竟支那里なるべく故に日本の里數に改算すれば近々百九十里餘にして恰も日本支那間の巨離に相當せずや、滿州より南洋のジャバ假に千五百以太利里とするも尚ほ足らざらん、況んや百九十日本里をや到底ジャバーにあらざるは此論點に於て殊に明白也。

元寇の論點　コリングリッヂ氏は忽必烈がジャバを征したること數次なりとなし且ポロの記事にある其年代は恰もジャバ征伐の年代に符合する如く云へど、支那の史書には未だ元主のジャバ征伐の事見當らず、矧んやポロの記する所の年代西暦一二六四年とあり、多く一二八二年我弘安四年の誤植ならんとは人の云ふ所なれ共、假に一歩を讓り一二六四年ジャバ征伐ありとせんか、是れ元の至元元年忽必烈未だ即位せず、宋未だ亡びず、忽必烈等全力を注ひで宋を攻むるの當年に於て、詎ぞ大兵を海外而も最寄の朝鮮日本を差置きてボルネオ大島を隔つる極南界のジャバに兵を動かすを得んや、恐らくは是れコリングリッヂ氏の臆斷に過ぎざるべし。

其記事の大躰は不時の暴風の爲に敗軍せりとありて頗る日本の元寇に類し又疑を挾む可からず、凡そ元寇の事に付ては外國の著者多少の謬傳をなすは獨りポロのみに咎むべからず、今假りに其二三を抄して參考に便す。

(1) ベレ、アミオットの傳說[E]　六百隻の戰艦は King-nan Fou—Kin Ho—nan Chung—tong の四洲より蟻聚せられ全軍海を掩ふて朝鮮より渡り先づ九州に上陸し Tonsinn に進軍したりしが既に日本軍の豫備ふるものあるを知りたり、其船艦が日本の海岸に進むと共に大暴風に遭遇し、波濤の爲に悉く粉碎せられ唯に一二隻のみ

辛ふして遂れ去れり

(2) マレラの傳說[2] 一二二八一年の六月に於てはAlamanは六軍に將さして日本遠征の途に上りたり、後一港に投錨したりしが之と仝時に彼は死沒し、Anbaiは其後を承けて司令官となり恰も船艦の大方木ノ葉を散らすが如く、海邊に吹き付けられたりしが將校二三の無難なる船に乘り遷り、十万の軍卒を其嶋に見捨て、本國に逃げ歸れり、居殘りの軍卒共は相議して新に船艦を營み歸國せんと日本軍の窮追する所となり皆斷頭場裡の露と消えられにも本國に生還せしめられしもの三人と云ふ

(3) ゴービールの傳說[3] 此戰の結果支那及朝鮮人凡て八十人捕虜となり他の蒙古人は三万人程殺戮せられたり

(4) ケンファーの傳ぶ[4] 皇曆一九三五年西曆一二七五年後宇多天皇の九年蒙古の將は戰艦四千軍兵廿四万を率ひ、日本の海岸に向へり、然れ共日本國の守護神は其七月一日を以て暴風を起し蒙古の艦船を破碎せり

(5) シーボルドの傳說[5] 氏は日本紀や王位を踐むを出したるものなりとて曰く忽必烈汗が蒙古の日本を從へて高麗の如く隷せしめんとするの意に怠なり即ち一二六八、一二七一、一二七三年書を以て其意を通せり大宰府は常に之を破棄したり しかば忽必烈汗怒り、蒙古の兵忽ち對馬を襲ふと雖天皇は神に祈誓し將軍は既に沒海を警めたれば容易く蒙古の軍を擊攘ふを得たり云云

風習上の論點

ポロの其他風習に關する記事に於て、或は葬式文身、偶像禮拜の事は日本以外の記事と思はるゝ事あれ共、文身も元來北海の「アイヌ」南の琉球人等に在り、葬事は先つ酷類し、偶像禮拜も强ち他方の事にあらず、實際日本に千手觀音、二面大師等の類あり、我國の記事と見て差支なかるべく、殊に其金銀寶玉の夥多を說くに至りては却てジャバに見る克はざる所にして、日本の黃金時代に此事ありたりと覺しく、彌々其日本の記錄たるを疑ふべからず。

駁論結案

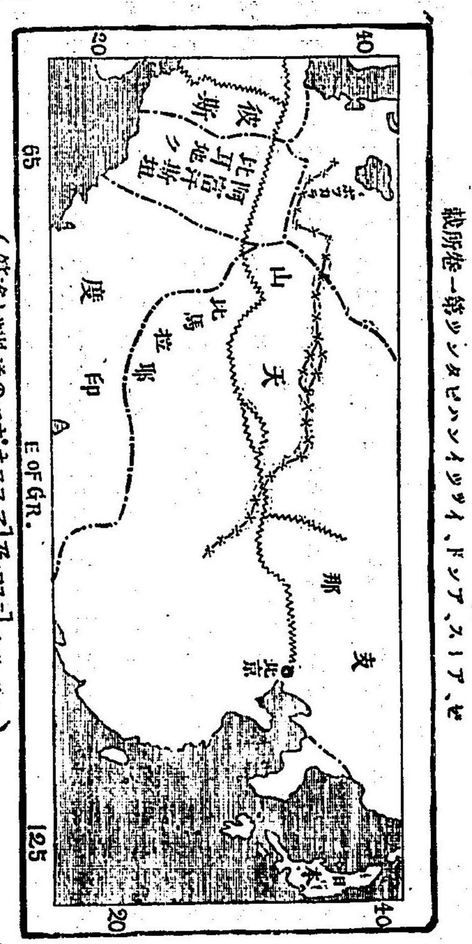
コリンジリンヂ氏が如何に强論せんとするもポーロは別にジーバンゴーの外に現在ジャバの記錄を止むる章あり、若しジーバーゴー即ちジャバなれば焉そこの重複を須ひんや、ヨシジーバンゴーを以て諸島嶼の總稱なる意味の下に多少其諸所の談話を混淆したる形迹なきにしもあらずと雖、日本を以て其中心骨髓としたるや疑ひを容れず、且つ氏が論末にジーバンゴーはジャバより轉訛したる稱呼なりと云ふものと、著者のジッポンより訛傳したりと云ふの兩說に於て、通識あるの士は輙すく判斷を下すことを得べし。

註 [1] memoires concernant les Chinnis, (pere Amiot)
[2] Histoire General de la chine (mailela)
[3] Ganbil, Histoire de la Dynastie dis mangoux.
[4] Kampfer, Nipon odaiki. & Nipon okatize.
[5] Schebold, Archives of Japan.

マーコ、ポロの人となり、及其支那に入りたる前後の閲歴

ポロに關する傳説頗る多しと雖、今尤も信據すべき以太利の史家が語る所によるにポロの家は代々ベニスの名門にして祖父(Andren polo da. s. Felice)は三子を有せり長はマーコにして次はマフェオ次はニコロなりマフェオ及ニコロはベニスの豪商を以て一二五四年其商用にてコンスタンチノップルに航したりしが、途々にて西韃靼に入れば引合の貨物もあらんかとの噂に、二人は一攫千金の富もやと相携へて其地に入りしが、恰も東西韃靼の首長ヒユラグとバーカー[1]の間に不和を生じ干戈を以て相詰責するの時に際會し、心ならずも二人の兄弟は歸國することを克はず、ポックラの町に止りしがヒユラグの知る所となり、東韃靼に伴はれ、入て元主クブライに謁見せしめられしがクブライ喜悦斜ならず、厚く之を遇したり、後二人の者が歸國するに際し特にクブライの使命を帶し、全行の使節を相携へて出立せしに、其使節は途中に病みたれば、二人の者は急ぎ、アーメニヤのアヤスより乗船して以太利に上陸するを得たるは恰も一二六九年の四月にして、之に先だつ凡そ一年法皇クレメント四世は簒を易へ、未だ後繼の嗣立なきが爲め法皇に謁してクブライの使命を果すを得ず、止むなく故郷ベニスに歸りたるに、憐れニコロが最愛の妻は一子マーコなるものを遺して、早や亡き人の數に入りしかば、今はせんすべもなくマーコの行く末を樂しみに養育に怠りなかりき、但しこのマーコと云ふは本題のマーコ、ポロのことにして全く父ニコロの兄の名に因み命くる所と覺しく之より先き叔父ニコロは死沒したるものと知るべし。

月日の進むに關守なく、軈てポロ十七歳の春を迎へければ、今は前志を果さんものとて再び二人はポロを携へてベレスタインに入り、クブライの親書を奉呈し、後繼法皇グレゴリー十世の命を俟ちたりしが、十世易々其願を入れ、耶蘇布教師として二人の僧侶[2]を差向けられたりしかば偖に與に崎嶇を攀ぢ、羊腸を蹈み、ゴビ沙漠を過ぎて東韃靼に入り、大元大王に謁見したり是れ恰も西暦一二七四年(我文永十一年元至元十一年)に當れり此に於てニコロの一子マーコは人と爲り悧發穎敏なりしが爲め痛く大王の寵する所となり、王宮に侍したりしが、彌々國情に通じ、諸國の語に慣るゝに至りしかば王命を帶して、四方に使するに至り、後特に扳擢せられ



筋違ひに過通の等氏ロポロイ
就所港一第ッンタピハンイッツイ、ドッア、スーア、ビ

て河南揚州都督の重仕を拜したり、實父及叔父も亦各高官に上ぼされ、マーコ、ポロ一門の榮、今は嶺に達せり、ポーロ等大元に入りてより既に十七裘葛を更へ、今は忽必烈も高齢に達し、後の頼みも少なく成り行く儘に、頻に歸國を思ひ立つと雖、クブライ之を許すの　樣もなきまゝ私かに時節の至るを俟にける。

當時彼斯に王たりしヒユラグの孫(クブライの五甥)ハ其后妃を亡ひたるを以て、クブライに由て一女を得んとを乞ふクブライ則ち就中美貌なる者を撰び、使者を附して之を嫁せしめんとすマーコポロ等此に於て其地理に詳らかなるを以て名とし、使者たるを得たりしかば、匆々其途に上りしに、中ばにして全く、進路を失ひ、止むなく元都に引返さんとしたりしに、ポロ等實に一路を案出し、一行は今日泉州なり(?)と云ふ「フオーキン」のダイタム港より、乘船し海路、安南、交趾、亞弗利加、新蔓答剌、錫蘭を經て彼斯に入りたり、是れ實に一二九二年とすポーロ等は其使用を果すや直ちに陸路イウキシンよりコンスタンチノップルに出で、後一二九五年ベニスに歸着するを得たり、實に國を出でゝ二十四年目と云ふ。

以上述ぶる所のポロ一族の冒險談は至て材料に乏しく僅にポロが直接間接の談話に止まるものなれど、是より以後のことは、史家ラムシオが二百五十年後に於て蒐集したるベニス市民間の口碑に於て詳悉せりと信ず。

ポロ等が其家に歸着したりし時は最近親のものと雖、既に死せるものとのみ思ひ

し折柄、長の旅路の疲勞と憂苦によりて容貌の如きも全然韃靼人の如く談話も外國語訛りにて、誰の見る目にも以太利人とは受取り難き有樣なりければ、「エスキヲバン、クリストモ」に於ける祖先永住の宏閣、當時巨萬の宮殿(La corte del milioni)と綽名されたるものに入りて我こそ此家の主人たりとて名乘るも、市中の人誰か之を肯ぜんや、然らば夫れポロは如何にして其身の成行を萬人に會得せしめしぞ、其物語はラムシオの朋友にてポロの家の近くに住み、殿直家として知られたるエム、ガスパロ、マリヒイロ氏が聞傳へに語れるものによりて知るべし、其大要左の如し。

三人のポロ等歸着するや其家に親族一同を招待し、無事歸國の祝賀として披露の宴を張りたりしに、嘘て時刻に及び三人のものは當時の儀式に用ひらるゝ濃紅の繻子地長衣を着け、勝手より徐ろに出で來り來客に一揖し洗手の儀式終りたれば、一同も自分自分の席に着かんと欲せし際に、三人のものは其上衣を脱ぎ去り、同一色相の緞子の上衣と着替へて、先の長衣は寸裂して侍者に分與したり、

偖て第一回の饗應了りたれば又々濃きくれないの天鵞絨製長を着け緞子の衣は再び寸斷せしめ、嘘て饗應の全く濟みたる頃ほひ其上衣を三度寸斷し、此度は客と一樣の平服を着け直しぬ、斯かる異樣の所行に來客皆々顔見合せて且は驚き且は異しむ耳已、サテ次には如何なる事やあらんと待ち撐へたる折しも中に尤も若年なるポロ(即ちマーコ

ポーロ)はツト坐を起ちて隣室に入りけるが、稍暫くして掌て此家に入りし時着け居たる經樓の旅衣三重おも〳〵しく逆び込み、ナイフを以て一々其縫目を切り放し、つぎ切れ及裏地を取り離したるに、サテモ不思議なる黄、紅玉、碧玉、寶紅玉、金剛石、綠玉石等の寶石は燦然として邊り眩ゆき迄に輝めきつゝ、露れ出でたり、蓋し其値幾萬圓なるや計り知るべからず、來客一同は此異變に一入驚き呆然口を開ひて見つめ居たりと云ふ、是れ全くクブライが出立の砌下賜せられたるものゝ由にて道路逆搬の便を計るが爲に悉く寶玉に代へ人目を避くる爲に巧に縫ひ付けたるものゝ由なり

此饗宴によりて、一同は始めて眞のポロたることを認め却て其反動として、非常に尊敬の意を表したりとなん此噂がベニス市中に傳はるや、住人擧て、ポロの家を訪ひ其奇談を聞かんとせり。

後其尤も年長なるマフェオは政府重要の位置に立ち年若のポロは日々來客を相手に經歷談をなしたりしが、世人は皆巨萬王マーコ君と稱し彼等が持歸りたる富が千五百萬(ヂュカート)を越ゑ、國王の富も及ばずとてもてはやしけるが、爰に悲しき一事は憐れポロをして牢獄に呻吟せしむる事こそ起りたれ。

ポロ等が歸鄉後幾干もなくしてラムベドリアに引率せられたる「ゼノア」艦隊が埃及北岸キユルゾラ島に顯はれたりとて報知に接し、ベニスよりも一層の艦隊を編

成して、アントレア、ダンドロに委ね出軍せしめたればポロも經驗ある海軍士官の一人として撰抜せられ軍艦に長として軍に從ひたりしに雙方の艦隊は忽ち衝突し海戰數時なりしが不幸にしてベニス軍は失敗したり是れ一二九六年九月八日の事と聞ゆ此に於て水師提督ダンドロは勿論ポロも先鋒隊となりて奮戰せしものから數多の手傷を受け餘議なく降服したりしが次で相共にゼノアの獄に繫がるゝに至れり。

マーコ、ポロの入牢は父及叔父の憂苦の種なりければ、如何にもして兩軍は平和を克復しマーコを歸國させんものと、種々策を旋らせしが、常に失敗に歸し、今は斷念の外なし、是れイカニ多く金錢を積むも放免せられず、加之死後と雖、重罰すべしとの事なりければ、斯てはポーロ家の相續人も打絶えん事あらんかとて、一族相會議して父ニコロの老ひて益々憂鬱なるを幸に早く後室を迎へしめ後嗣を作らんとはせり。

然るにポロが禁錮中四年間ゼノアに重要の人々に與へたる愉快談に免し、獨り許されて歸國したりしが、父は繼母によりステハノ、マフェオ、ジオバンニの三人の弟を生みたるを見たりマーコ、ポロは元來人品俊拔のものなりければ強てこの異變に激したる色もなく、己れも亦好配を得て華燭の典を擧げたるが後モレッタ、フアンチナの二女子を得たりと云ふ。

父ニコロ「ポーロ」が死去せし後は其の高恩に報ひんことを心掛け、元來孝心に厚き生なれは、直ちに亡父の紀念として「ヒューストン」の墓表を立て佛事供養怠りなかりきとなん、此表はラムシオの時尙殘存してセント、ロレンヅ寺の玄關右側に「此市に住みたるニコロ、ポーロの墓」として苦むしたる儘に立ち居たりと。

次でマーコ、ポロの行末は如何なりしや享年幾歲にして死去せしやに就てはベニス市人の間にも更に口傳なく、又往年の史家にして其の確實の事を傳へたるものもなし、凡そ全市に於て忠誠なる一著述家サンソビノハケメレと云へる島に建設せられたるセントローレンヅ寺の路傍に新世界旅行記の著者にして閣龍以前に新世界を跋渉したる巨萬王マーコ、ポロの墓ありとの事を記せりと雖ラムシオの說に從へば全く父の墓と混同せるものとせり。

偖てポロ家にてはニコロが再婚後、生みたる三人の子供の中マフェイオのみ生存し

て家族を有し、都合五人の男子と一人の女子とよりなりたり、然れ共五人の男子は後嗣を遺さずして皆死したり、故に長女マリヤは祖先の財産を相續したり、後マリヤはベニス共和政治に名高きツリビシノなる貴族に嫁ぐと雖、其の家系は此に斷絶したるものと云はざるべからず是れ實に西暦一四一七年の事とす。

註〔1〕シュラグは忽必烈の兄弟、バーカーは有名なる成吉汗の末孫にして、土耳古人を幕下とす。

〔2〕此時は一二七〇年代にして、恰もシリヤの北方は埃及人の攻撃に遭ひ、アーメニヤ亦災厄に罹り、二人の僧は終に韃靼に入らざりしと云ふ。

〔3〕一説に據ればポロは一三二四年病歿せりと、然らば其享年は七十歳歟(其生歳は一二五四年)

マーコ、ポロの東洋紀行が印刷となりて全歐に傳播したる次第〔1〕

ポロのゼノアの獄に在るや、一囚徒に過ぎずと雖、彼れが絶代の經歴は早く既に巷の噂となりゼノアの名門縉紳の人々は先を爭ふて、此絶代の奇男子を訪問するに至り、其の盡力によりて生擒中の苦痛をも幾分か寛められたり、サテモ彼の東洋奇談は繰返し卷返し幾度となく來客に語るも五月蠅かりける折柄とある人の薦めに遭ひ、其頓末を書き寫して世に公にせんと志し、父の許に貽し置きたる旅行日記を取寄せ、主に之れに依據して傍ら己れの説話を次て補ひつ獄中に於てラスチゼロなる人に書き寫さしめたり、此ラスチゼロとなん云へる人に付ては其來歴に樣々の説あり、ラムシオの説に從へば全くゼノアの紳士にしてポロと昵懇にせし人なりと、某寫本によればヒサの人にて同牢のものなるべしと、又佛版の一書(是れはポロ紀行の原本なりんさ云ふ)にはヒロのラスチシェン氏にして、中世紀の有名なる著述家にてアーサー王の世界一周記を作りたる人なりと云へり、要するに此書が完結して寫本が世人の手に入りたるは西暦一二九八年(我永仁六年)なりしものゝ如し。

ポロの紀行は其の記事の平易にして其事の奇なるより、凡そ婦女子に至るまで愉快を覺て其死後三世紀の間に、苟も文字ある國とさへ云へば、此の紀行を譯さゞるものなく、竟に印刷或は寫本となりて世に行はるゝもの八十餘種に及びしと云ふ、其間各譯譯者が思ひ〳〵に其原本を改竄する所あり、爲に今日に及んでは何れが原本なるやは容易に判明せられざるものゝ如し。

マースデン氏は其の説話筆記原本は元來伊太利語にて出でたるものならんとて、ラムシオの印刷せしものより取る所ありたり、然れども實際ラムシオは原本其のまゝを用ひたるものにあらずして、多少自己の意見を加へたるものなり、蓋し原本羅典語説は後ちに於てはリカード、ヒルドレス[2]あり。

一八二七年ラムシオの書より一層確定ならんと思はるゝ原本より伊太利語に譯されたるものパルデニポン伯の手より顯はれたり、之を前後して一八二四年巴里地理學會は十四世紀の寫本よりポロ紀行の二種を印刷し出したり、其の一は全く羅典文にして他は佛語なりしが、何れも其以前に於て世間の著述家の批判を受けず、且此等により充分克く飜譯せられたりとの形迹もなきなり、然れども佛文こそポーロ口傳筆記の原本ならめと云ふの説は尤も勢力あるものゝ如く、是れ伊太利のパルデロが一八二〇年代に於て始めて主唱したる所にして、今日其原本は巴里府書籍館に藏する由を云へり、後エムド、アベザク氏出で原本佛文説を贊し、一八四一年八月地學協會の「ブレチン」にて次の如く述へたり。

今日の如き觀察により再びポロの文言を繰返し讀み味ふに羅典伊太利書共にフランス文より譯されたるものにて、シカモ甚だ拙劣なる譯者の筆になりたるものにして杜撰誤譯も只ならず云々是れ既にパルテロ氏の主唱する所なるが何人にても兩本を對照して判讀すれば容易に其黒白を分つを得べし。

蓋し今日にては多く原本佛文説を主張するもの丶如く、ライト、ウインソール[3]の如き皆其人なり。

要するに歐洲印刷術の廣く行はれたるは十五世紀の中葉以後にあれば、タトヒポロの紀行が之より以前に世に傳播したりとするも、寫本位に止ればさしたる事もなかりしを知ると雖、印刷となりて廣く傳播するに及では當時の一大珍書として兒童の話頭にさへも登りたるべし、今其印刷の順序を質すに、就中古きものは獨逸譯本にして一四七七年(文明九年)に出で、次に古きものは一四九〇年(延德二年)に刊行されたる、羅典譯本にして、次に以太利譯本一四九六年(明應五年)に出で次に葡萄牙譯本一五〇二年(文龜二年)に出でたり、一五二〇年(永正十七年)の西班牙譯本一五七九年(天正七年)の英吉利譯本、各之に次ぎ、世に行はれ、此に及んで紀行中の一節に於て大日本帝國は全歐に照會せらるに至れり。

註〔1〕著者の本節を記するや、多くライト氏のポロ東洋紀行緒論中より引證した

りゼ雖、坪井九馬三氏の史學雜誌に掲載せる論文なも參考したり。

[2] Japan und Japaneas. 1855.

[3] Narrative and critical Hist. of America. Vol. 2. p. 30.

マーコ、ポロの紀行は初來の歐羅巴人を導ける一大伏線なり

ジヤコボデ、アクイの日記に曰く、ポロの臨終の際、其朋友は良心の示敎により、ポロをして前に出版したる書は之を絶版するか、然らざれば、世間の架空談ならんと認むる部分のみにてもセメテ取消さしめんとしたるに、ポロは私かに冷笑して、尙其紀行は目擊せしものゝ半に過ぎざる由を告げて瞑したりと、凡そ今日の著者がポロの東洋紀行を評するや、一も二もなく架空虛妄の談話なりとて擯斥し、甚しきはポロ其の人をも毆ひんとするの傾向ありと雖、ポロの閱歷を翫味するものはポロが斯の如き賤劣なる人にあらざるを知るべく、著者を以て之を觀れば飜譯の再三再四變轉する間に於て、其の當時の譯者が讀者の嗜好を迎へんが爲に、事を誇張華美にして、往々改竄顚補したる所も强ち之なしとは謂ふべからず、故にポロの紀行は其當時に於ては世間に相當の信用を以て迎へられたるや殆ど疑ふべからず。

ポロの寫本が始て出でたる一千二三百年代は、時に或は泰歐の諸國內廂の虞を斷つ能はず、隨て所謂渾球的動作をなすの時にあらず、這般の奇談珍話も屢に宴席の話柄、坊間の笑資となりて沒了し、ポロの珍談が潑々東洋の探檢に變ずるが如き運に至らず、竊かに百年の後に期するものゝありし如し、誰か知らん百年の後果して西班牙國クリスファス、コロンブスを出さんとは、彼は實に微々たる毛織職人の一子として動き始めたり。

閣龍は一四九〇年代の人にして西班牙譯本は一五七九年に出でたれば世の說をなすもの或は閣龍のポロの紀行を讀むなくして止みたりと云ふものあれとも、フンボルト氏が說く所によるもポロの紀行に奮起して彼の如き大發見をなすに至りたりと云ふもの眞なる如し、隨て今日コロンビアン圖書館に羅典文なるポロの紀行樣の一本を藏し閣龍が傍註を施したるものなりと云傳ふるものあり[1]之に依て彼は羅典語を解し羅典譯本によりてポロの紀行を讀みたること判明せられた

り。（よし獨逸譯本は一四七七に出でたりするも彼獨語は解せざりしものゝ如しと）。

爰にポロに後るゝ事三四十年マンデビーレなる人ありて亞細亞旅行をなし其紀行は英、佛、以太利文等に譯されたりしが、一四八〇年佛のリオンにて "Itinerarius" なる題目にて出版されしが後一四八五年マンデビーレの此著述とポーロの紀行等が一緒となり "De regionibus orientalius の題目によりてゾーレに於て刊行されたるが是れ全くポーロの紀行が羅典語に譯出せらるゝの始めなれば閣龍の讀みたるものは畢竟此書なるべしとはヂヤスチン、ウインソールが説く所なりとす。[2]

さてポロの紀行中にも閣龍が尤も着目したるはジーパングーの記事なりし、フロレンスの天文學者トスカテリーは閣龍に書狀を以て慥かに歐羅巴を西に進行すれば「ジーパングー」なる地に達すべきを示せり、[3]今や彼の熱誠は大日本當時の「ジーパングー」を蹈まざれば一歩を引かざるべし、彼は目出度くイサベラに縋りて其の本意を遂げ數月苦航の後辛ふして亞米利加の一地を發見して、「ジーパングー」近しと心得て心私かに喜び、其の色は眉宇に溢れたらん、然らば閣龍は理想上の初來歐羅巴人と稱すべく、日本と西歐との關係今日の密切を來せるを見ば、彼の英雄も髣

髴として、我國に降りつゝあるならん。

大日本帝國は「ジーパングー」の名の下にマーコ、ポロに依りて全歐に照會せられたり、其照會の下に始めて大日本を訪問せんとしたるは閣龍なり、然れ共閣龍は不幸にして其門に及ばずして終れり、之より陸續他の賓客は大日本の門戸を敲かんとしたり、此賓客は問はずして知る、初來の歐羅巴人たることを。

註 [1] Haper's Manthly XLVI. p. 1.

[2] Winsor's Narrative and critical Hist. of America vol. 1. p. 30

[3] Bancroft's History of United state. p. 6.

第六論　近世史[1]の始めに於ける歐洲人文の開展、殊に航海術の萠發は、歐人をして東洋發見の途に上らしめたり

歐洲航海術萠發の一新時元

中世の末葉、全歐洲の闇黒時代に陷るや、基督教會最上の主權を握りて、歐洲諸國の統治僧侶の手に委し、名門右族は頓て全盛の榮華を貪り、國土を小分して封建制を樹立したり、此際東羅馬帝國の瓦解滅亡と共に、其遺民の流離顚沛するに乘し、獰猛頑强なる蠻族「チュートン」人種の亂入と爲り、風俗頽敗、德義全く地を拂へり。

潮て歐土の史乘を看取するに、宗教上の衝突に、主權者の鬪爭に、暴主の虐政あれば、志士の反旗を翻すあり、一治一亂、攝齊爭攘未だ嘗て寧日あらず、凡そ斯の如き天地に在りては治者の抑壓と社會の妨碍とによりて、人類の稟性を挾弘し、文物を顯耀せしめ、以て自然の美を濟すの道を得る克はず、人文の光明地底に潛みて、空しく閃發顯耀の時を俟つのみ。

人文の光明閃發する時は、則ち治者の虐政と社會の防碍と排除せらるゝの時なり、想ふに中世史の末造より近世史の初期に跨りては、宛も此新時元に際會せんとしたるものゝ如く、十一世紀以後には諸國に都邑の自治權を有するもの、踵を接して出で、當時三大發明の一なる火藥の如き、其起源に就きては亞細亞北方より輸入せられたりと云ひ、又一說には全く一三五四年(文和三年)獨逸ブレスガーウのレライベーグに於てベルトホールト、シューワーズ(Berthold schwars)氏が新發見にかゝると云ひ、其說一定せざる如しと雖、要するに十四世紀の中葉に於て、封建打破の一大勢力をなし、スイントンをして封建小國の打破潰裂は、一列の中央集權制大王國を產出し、各國は主權者の下に協力一致國難に殉ふの傾向を生し、其結果、各國合縱連衡、成るべく危難を避けんとして、國力の權衡政略を講せしむる新時元を開きたりと說かしむ、是れ則ち歐洲に於ける、治者の虐政、社會の防碍を排除し、人權を崇び、自由を尊ぶの致す所たり、ギーゾー曰く、羅馬帝國は地方制度を、蠻族は個人の自由を、耶蘇教會は精神上の靈力を、各近世史期の置土產としたりと洵に然り。

此時を以て俄然航海術の一大進歩を促すべき、原動力を産出したり、是れ即ち當時の三大發明の一たる磁針器にして其起源に就ては一定の確說なし、ドクトル、ラベーアの云ふ所に依れば、西暦一二六年(景行天皇五六年)に於て既にポーラス、ベネタスが、支那より以太利に齎らせる所となし、或は又十三世紀の頃、以太利ネープルの人フラビオ、ヨーヤの創製にかゝると云ひ、或は又巴里の圖書館に藏せらるゝ器ありと云ふと雖、其實地航海術に應用せられたるは十三世紀の末造より、十四世紀以還に在らざるへからず、要するに是れ航海術の一大進歩を促す原動力を産出したるものにして、航海術萌發の源由は深く此に存するものと知るべし。

註〔1〕近世史は一四九二年亞米利加發見より一六一四年カエスト、ハーリーの瓦解に至るものとす今著者の始めといふものは一四九〇年前後と心得べし

萌發以前に於ける航海術の狀態及萌發の當時

歐洲の航海術は、西暦紀元始まてより一千年の間殆ど睡れるが如く、單に地中海に於ける底平箱形の「クラシック、シップ」を以て兒戲的の小航行を繰返したるまでに止まり、ギボン〔1〕が說く如く、羅馬帝國が紀元第一世紀に於て、既にトラヂャン(Trajan)大王の如きを出し、萬里天荒を破りて印度洋に出で、航海上一大進歩をなせりと云ふは、信僞容易に決すべきの言ならず、ヨシ斯事ありとするも、烏んぞ今日の航海術を以て比すべけん耶。

歐洲の史家が傳ふる所を以てすれば、北方民族が斯かる箱船のまゝにては到底帆走の用に堪へず、輙く顚覆すべければとて、僅かに龍骨を具ふる船隻を製造するに至り、時人北人を德とし謳歌して止まさりしと云ふは、尙是れ十世紀以後の事なりしと、而も尙ほ一たび海に浮び、風浪早瀨に打たるれば、簸然として醱へることありき。

然るに中世以後に於ける歐洲は既に述ぶるが如く、一時列國の隔離と社會の沈靜とを來せしより、勢ひ人口に於て急激なる增殖を見るあり、其の結果は民人を驅て貿易通交の思想を作興せしめずんば已まさるに至りぬ、然るに通交貿易の事たる、耶蘇敎者と回々敎者との軋轢の爲めに、陸路東方に通するの途を壅塞せられたるより、已むなく海に依て西に出で東に通ずるの途を索むるに急ならしめたり、是れ取も直さず歐洲航海術の萌發を促したる硫黃質肥料なりき〔2〕而して羅針盤の發見

は、之に附隨する所の日光及熱を與へて、一層其萠發を促進せしめたるものと考ふるを得べけん。

一三八〇年より一四六〇年の間は、「航海狂」(Henry the Navigater)の綽名を博したる葡萄牙國の王子ヘンリーが、葡萄牙の大政を攝したる頃にして、一意專念、身を挺して航海の犧牲たらんとせり、王子が此綽名を享くるも蓋し偶然にあらざりき、一說によれば以太利人は十四紀の幕明けと共にカナリー(canary)マデイラ(madeila)アゾーア(Azores)に發航したる事あるも、後事故の爲めに一頓挫折し、後永く忘れられんとしたるに、幸にこのヘンリー出で、斯く航海の術を奬勵したるより、葡人は[3]西曆一四一八年(我應永二十五年)一四一九年(我應永二十六年)の間に於てポート、サンド(port-sand)及マデイラを、一四四五年(文安二年)にクープ、ヘルデを、一四四七年(文安四年)にアゾーアを一四五五年(康政元年)にクープ、ヘルデ島を發見して、之が航路を開き、進てギニア(Guinia)に殖民地を拓き、定期航海をも開始するに至れり。

亞弗利加西海岸の發見は斯の如くして、大に其歩を進めたりと雖、悲哉航海狂ヘンリーが其宿志の未だ半に達する克はずして、中途に易簀するの不幸に遭遇せり、之を西曆一四六三年(我寛正四年)となす、幸にしてヂョン二世[4]絶倫の資を以て後廿一年冠を戴き、先考の志を繼ぐに急なりしを以て其治下に一四八六年(我文明十八年丙午)には既にバルトロメウ、ヂアス(Bartolomeu Diaz)[5]なるもの出で、カーボトーメントス即ち「荒れが岬」の意味を以て永く航海者の夢裡に恐怖する所たりし、亞弗利加極南端の一角に進むを得たり。

ヂョン二世が「荒れか岬」に渡航の報に接したる時は、其悅び譬へんに物なく、稟性勇武の王なれば、今や舊名を存して依然荒れが岬などゝ不吉の稱を下すの時にあらずとなし"Carbo de Bon Esperaned"則ち英語にすれば"cape op good hope""未頗毋しき岬"と改名せり、今邦人が喜望峯と唱ふるもの是なり此時に際し有名なるバスコ、ダガマ(Vacco da Gama)は來れり、彼れ英邁の才識を持して葡國水師提督なる地位に立つ、果して何事をかなしたる、蓋しガマの偉績は歐亞の交通史乘に一大光輝を投くるものにして、讀者と共に記憶せざるべからず、仍て節を更へて說き分けんとす。

註 [1] Gibbon's Decline and Fall of Roman Empire. Vol.1.p.

[2] 王は西曆一三九四年に於てオヂルトに生るヂョン一世の子にして英王ヘ

ンリー四世の甥に當る勇敢地理の學術を習得し、アルガベニに航海學校を起し諸學者を聘し銳意其道を奬勵したり、其在世間は未た目醒しき結果を見る克はざりしと雖其功や沒すべからず、故に後世王を傳するもの多く中に佛のコルナンド氏"vie de Henry de portugal"(巴里一七六一)及英のマシヨル氏の"Life of prince Henry the Naivgater"等は有名のものなり就て一讀すべし

[3] 發見年代は諸書一樣ならず、今主にカール、プロエズ氏の最新"Epitom of History"に從ふ

[4] 此王はアルフオンソ五世の孫にして一四五五年出生一四八一年王位を踐むや幼にして武勇絶倫既に十六歲の頃アフリカン、ムーア及タンギーアの地を取れり此勇敢なる精神を以て航海上の事業を起すこと少なからず、崩するの歲一四九五年と云ふ

[5] 氏は後一五〇〇年に於てカブラルの部下となり印度に來りたることあり然れども破船の爲に罰せられたりと云ふ

第四世紀末葉 歐羅巴人中東洋亞細亞近海に航路を開きたる

第四世紀末葉 先鞭者……バスコ、ダ、ガマ

航海術の萌發生育に、直接光と熱との功果を奏したるものは、先づ羅針盤の發見と天文の觀測にありたること、既に述ふる如し、ベンリーは葡萄牙の極南角サグレス

(Sagres)に於て觀測場を起し、皇居を爰に營み、銳意專心、太陽の傾度を測定せんとし、ヂヨセフ二世の次で踐祚するや、益々斯道の研鑽を續け、理學者ロデクック及ヂヨセフ(joseph)等を聘用し、竟に太陽傾度表を編成したり、占星表(Astro—table)と呼ふもの即ち是なり、斯の如くして天文觀測上の好果と羅針盤の發見と成る、航海術豈萠發生育せずして止むの勢ならんや、今や磁針器と占星表を掌にしたる航海者は烟波掩映、浩渺際りなき西海東洋、何れの海に浮ふと雖、生きて再び故山に歸らずとの杞憂を減殺するを得たれば、奮起又奮起、自覺自重の精神を以て纜を埠頭に解き、棹を青海に擧げんとするもの、三三又五五、クリストファーコロンブス(Christpher Columbus)及バスコ、ダ、ガマの如きも亦た是等の群に伍し、稍々學識と經驗とを有したるものと謂ふべき而已。

セノアの毛織物職工の遺子コロンブスは、穎悟利發の生れにて、幼より地學に志ざしたる功果を以て、地球の球形なることをも早くより臆測しヂアス等の企てたる如く、喜望峯を回航して東洋に向ふの航路を取るは極めて迂愚なりとなし、寧ろ一直線に西航して東洋亞細亞に出つるに若かずと爲せり。

コロンブスが東洋に來らんとするの志は、マーコ、ポロのジーパングーの記を讀むと共に彌々烈火の如く燃え、早く其地を踏で一攫猗頓の富を致さんとするに急なり故にイサベラの袖に縋り、遂に一四九六年(我明應五年丙申)亞米利加大陸を發見すと雖、其實コロンブスの理想は東洋の發見にありしなり、故にコロンブスは東洋を發見し、東洋の航路を開きたる理想上の先鞭者なりと云ふも不可なしと云ふべし、西大陸ベマ一聯の群島を命けて西印度となし、西大陸北部一帶の土人を命けて印甸と命け、今日に至れるもの、閻龍が四回の往返をなして、未だ悟覺せざりし理想上の東洋たる所以ならざらめや。

ベスコ、ド、ガマに至りては蓋し信實東洋航路發見の先鞭者たる月桂冠を戴べき航海者にして彼はコロンブスが迂遠となしたる、チアスか企圖したる所の航路に由り、其覆轍を踏むを敢て疾しとせざりき而して彼は遂に能く無事無難に西曆一四九八年(明應七年戊午)喜望峯を一週して目出度く印度カリカット(calicut)のマラベル(malabar)海岸に上陸するを得、適れ東洋亞細亞近海に航路を開くの先鞭を着けたり、斯節を去るに臨み、ガマの小傳を掲げ其偉績を頌することと次の如し。

(附)バスコ、ダ、ガマの小傳[1]

ガマの生年月は史家の得て之を傳ふなし只彼が葡國シチス(Sines)の一漁村に呱々の聲を擧げたるを知るのみ、從て若年時代の經歷は今詳にせすと雖、西曆一四九七葡萄牙のエマニュエル(Emanuels)王が剃めて印度派遣艦隊を組織するや抽でられて其が提督に任ず、其六月八日三隻の船艦と一百六十人の部下を率ひてリスボン(Lisbon)を拔錨せり、一行は無事喜望峯を廻り亞弗利加の東岸に出で、モザンビーク(mozambique)メリンダ(Melinda)に上陸し、此處に熱誠なる水先案内を傭ひ、一四九八年の五月二十日無事カリカットに到着したる次第なり、彼がカリカットに上陸するや直ちに其王侯に謁し通航定規を結ばんとしたれども得す、故に一四九九年の九月に一先づ里斯本に歸着し後一五〇二年がマは再び大艦隊を率ひて東洋に向ひ、カリカットを砲擊し、進で交趾に製造場を起し、後又一五〇三年歸國すると共に王は其功績を偉なりとし、伯爵を賜ひ之を賞したり、ガマは靜裝加餐悠居爰に二十年の後再び官に仕へて印度副王に任ずたり、實に其卒するや交趾に於てし西曆一五二四年我が大永四年となす、享年詳かならす呼乎ガマの如きは洵に才勇共に秀で絶世の偉丈夫にして彼が東洋新航路發見者たる榮譽は萬世に朽ちす、時人カメオの「ルシアッド」(Lusiad)と共に千歲に傳はるべし。

註-[1] ガマの小傳及び當時の發見事件の成行等は主に次の書に依る Barros "Decad as" 及ビ Lafitav "Histoire des decouvertes des portugais"

ガマの新航路に發程したる葡萄人及其動靜[1]

西暦一四九八年ガマは東印度第一の貿易港カリカットに上陸したりしが、之より先カリカットは波斯人、亞拉比亞人、亞非利加東岸の住民其他錫蘭人等が出入來往する所にて、爲に熱鬧なる一大互市場をなしたりと云ふ。元來亞細亞と歐羅巴との貿易は是迄回々教徒の手を經ベニスを通過して行はれたるものたりしが、葡萄牙人の一行ガマ等は斯かる新航路を開きたるは是れ大に埃及人の反抗を惹起するの因とはなれり、何となればベニスより蘇士の地峽を通過するの貿易一朝廢絶に歸せば埃及人は忽ち其關稅を喪ふべければなり。

葡萄牙人は埃及人の倔疆なる抵抗に遭遇し、殆ど持て餘せる折柄一方に於ては印度の言語事情に通ぜざるよりして、不便彌々甚なからざれば、今は大壓力を加へて此等の障害を排除するにあらざれば何等の事業をも成す能なざるべきを悟り、立ろに艦隊を艤裝し提督(Albuquerque)アルブケルクをして之を率ゐしめたり、提督は驍勇克く兵を用ひ智を旋らし、屢々戰利を得、遂に歐西の一小王國葡萄牙をして威信隆々宇内に顯赫せしめたり。

回々教徒の貿易場は四箇所にして、波斯灣の海岸に位する(ormuz)オルムーツ亞拉比亞のアデン、カリカット、マラッカなりとす、當時の葡萄牙國王ドン、エマヌエルは是等の貿易論を併有して、總て貿易業をも己の掌中に歸せしめんと企畫し、先づ印度西海岸全部マラバルを探險して一五〇五年永正元年錫蘭に進み各地の諸侯と相闘ぎ、戰利する所なきにあらざりしかど、艦隊其地を引揚ぐれば依然舊の如く抵抗を試み、更に功果を收むるに至らず、故に葡國の斯征畧は固より多少奇貨珍寶を鹵掠するの利なきにあらざりしと雖、一般貿易業の開發に對しては毫も益する所あらざりき此に於て、エマヌエル王は舊慨措かず、更に大經綸を畫定し、即一大艦隊を組織し之に三千人の陸戰隊を乘組ましめ、先のドン、アルフオンソー、アルブケルク(Don Alphonso Albuquerque)を以て印度副王に任ぜりカリカット征服の第一攻擊は其目的を達するに至らざりしも臥亞を占領し、一五一〇年二月十七日には威儀堂々旗幟を飜へして此に侵入せり、後轉戰數合カリカットを陷れ、城砦を築き溫塹を遶らし、既に其守成るや、一五五九年に至て此に始て印度副王の居を据え、印度貿易に樞要なる市場となせり。

次で征服せんと企てたるものは馬剌加にして、葡軍は數回苦戰の後終に之を屠り、其際巨多の財貨を奪畧したりしが、不幸風伯の怒に觸れ破船の厄に遭ひ悉く之を流失したり、提督アルブケルクは殘餘の艦躰を將ゐて一先づ臥亞に歸り、更に艤裝を整へ將に亦オームトッを征せんとし、こは容易く外交上の手段を以て併呑するを得たり。

斯の如く葡萄牙は其貿易根據地を到る所に占領して、印度貿易の全權を掌握せり、今やアルブケルクは亞拉比亞を征服し、進んでは五大洲を震撼せんとして、準備に急なるの折柄、不幸皇天此人に餘命をかさず、一五一五年我が永正十二年に遽然として永眠せり。

註〔1〕此節は著者編輯の勞を省くが爲め最近出版獨逸書左記のものより飜譯せり　japans Auswartiger Handel 1896. p.—4.

葡萄牙人が支那近海に出現したるの始め及交通の次第〔1〕

是等發見の進みに於て、彼れ葡萄牙人は馬剌加附近に、支那商人と偶然相邂逅するの機會を得たり隨て支那人は例の驕張的口調を以て葡人に語るに、己れが帝國の廣大なる事物を以てせり。

從來葡萄牙の貿易は南洋の野蠻人種と營むか、然らざれば當時に於て全印度國の各所に割據したる小諸侯と營むに止りしが、其前者たる野蠻人種に於ては極めて從順に葡人に信服したるか、然らざるも容易に葡人に依て信服せしめられたるものなりしも、後者の印度諸侯との關係は、動もすれば圓滑なる克はず往々兵を秉てその訓練且熱心なる軍隊に向ひ、輸贏を爭ふことあり、其煩累に堪えずと雖、幸に土地の諸侯間には猜忌と嫉妬とに驅られて互に相容れざるものあり、之を利用して僅に反間苦肉の策を行ひ一時を彌縫したりき。

支那は當時其文明の度に於て、亞細亞の他の諸邦に比しては遙に優りたり、十四世紀の末葉に及んで明太祖出て、連年兵火の爲めに寥寞を極めたる帝國に、強固にして平和なる中央政府を建立せり、是を以て葡萄牙人は支那に對しては特に從來把持し來りたる政略を變改し、威迫を以てするの代りに情義に訴へて、交通貿易の